

河上肇著

599  
118

マルクス主義批判者の批判

599-118



\*1200800042874\*



河上肇著



356



マルクス主義批判者の批判

河上肇著



希望閣刊





## 序

二十世紀にはいると間もなく物を書き始めた私は、爾來二十六七年の間、しばしば自分の意見を論争の形態で發表して來た。私はこの間、他人への批判を通じて自己批判を試みつゝ、今日まで論争のうちに育ちえた、と言つても差支ない。今この冊子に收むるところのものは、最近數年間における斯かる批判の主なるものである。この期間私の關心は、主としてマルクス主義の基礎理論を明かにすることに繋がれてゐるがゆゑに、本書の内容は、おのづから題名の示すが如きものとなつた。なほこの題名のもとに収録しうる舊稿は茲に盡きてゐるわけではないが、今日より見て私の主張に誤解が含まれてゐると思はれるものは、すべて之を廢棄した。

論文排列の順序は、新たなるものを前にし、比較的古きものを後にした。内容はもちろん字句の末に至るまで、すべて舊態をそのままに保存した。

今や勞農黨の成立に際し、私はすでに一黨員として之に参加し、今後は黨の活動を通じて、直接に解放運動の實踐の上に、何程か老殘の微力を致さんことを決意してゐる。このことは、



おのづから私の文筆的労働の性質を規定して、これに一期を劃するに至るであらう。かゝる意味において、本書は、私にとつて、新たな首途の一紀念標である。

一九二九年十一月九日

河上肇

目次

辯證法的唯物論について……………三

——土田杏村氏に答ふ——（一九二九年十月）……………三

辯證法的唯物論の批判の批判……………三九

——土方教授の批判の批判——（一九二九年四、五月）……………三九

マルクス主義經濟學のために……………六四

——土方教授の謂はゆる『盲信的マルクス主義の克服』について——（一九二九年三月）……………六四

經濟と權力……………一〇三

——高田教授の『勢力説』の批判——（一九二八年十二月）……………一〇三



マルクスの絶対地代論……………一四八

——土方教授の『地代論より見たるマルクス價值説の崩壊』と題する論  
文の分析——（一九二八年七月）……………一四八

反動學派の陣營における窮餘の一戰術としての事實の虚構……………一六八  
——拙譯『資本論』に對する福田博士の非難について——（一九二七年十二月）……………一六八

我國に於ける反動學派の擡頭（一九二七年二月）……………一三八

學生檢舉事件について……………一四六  
——和辻哲郎氏に寄す——（一九二六年十一月）……………一四六

資本蓄積の行き詰り……………一七九  
——生産手段と消費資料との關係につき高田博士に答ふ——（一九二六年四月）……………一七九

# マルクス主義批判者の批判

河上肇 著



### 辯證法的唯物論について

——土田杏村氏に答ふ——

本誌（中央公論）八月號には土田杏村氏の『河上肇論』なるものが載つてゐた。氏が斯かる文章を公けにされた目的はいづこに存するか知らないが、私はたゞ辯證法的唯物論に對する吾々の理解を深めるために役立つかぎりにおいて、こゝにそれについての若干の所見を述べる。

氏の文章の第一節は『河上氏の存在形態の辯證法的批判』と題する。——因にいふ、氏は『辯證法』を『辨證法』としてゐられる。氏の言はれるところによれば、『辨證法なる語をマルキシストは一般に辯證法と書くけれども、これは誤字であるから、私は……すべて辯證法の文字を取る。すべて河上氏の諒解を乞ひたい』とのことである。だがベンシヨウホウを辯證法と書くのは、マルキシストに限つたわけでもない。『岩波哲學辭典』を開けて見ると、『本來ディアレクティクなる語は、會話の技術。辯論の方法を意味した』云々との書き出しで、それには辯



證法の文字が用ひられてゐる。もしディアレクティックなる言葉の由來が此の如くであれば、辯證法と書くよりも辯證法と書く方が却てこの言葉の由來に縁をもつことになるかも知れない。その上、辯と辨とは、もと言と刀との相違があるだけで、どちらにも分析判別の意味があることは、支那人の説明に「判別也、其字從言或從利」とある如くである。辯證法は誤字であると言つて、特にこれを斥けるほどの必要はあるまい。またたとひもとは誤字であつたにしても、今日の如く大多數の人々がそれを慣用することになれば、(現に氏の論文の前に横たはつてゐる杉森孝次郎氏の論文にも、辯證法と書いてあつて、辨證法とは書いてない)、それこそ辯證法的轉化によつて誤字はその反對物たる正字に轉化したのである。だから私は失禮ながら、依然として「すべて辯證法の文字を取る、敢て土田氏の諒恕を乞ひたい」。

さて第一節の「河上氏の存在形態の辯證法的批判」なるものは、土田式「唯物辯證法」によつて、河上の思想發展の過程——過去における若干の發展および將來における發展の可能性の限度——を論じられたものであるが、それを見ると、この問題は全く河上のがまぐちの觀察によつて判斷されうるものの如くである。例へば氏は言はれる。「大學における氏(河上)の講義が一年毎に純粹のマルキシズムに近づかしくられ、最後には全くマルクス學の祖述となつたことも、……大學教授としての氏の地位が進められ、京大經濟學部の重鎮としてもはや他の教

授に氣兼ねをしないでよい時に達したことの結果と見なければならぬ。どうしてさう見なければならぬか、私には合點がゆかぬ。しかし「教授としての地位が進められ」といふのは、月給が段々上がった上に、恩給年限にも達したことを、意味するのもかも知れない。それで場合によつては免職になつても、米代だけはあるといふ安心から、「他の教授に氣兼ねをしなく」なり、何程か「純粹のマルキシズムへ近づく」ことができた、といふのかも知れない。大學をやめた後の河上が、マルキシストとしてモノにならぬのも、彼れのがまぐちの調子にあるらしい。そこで土田氏は河上の収入源を問題とされる。氏はいふ、「河上氏は今日……國家より恩給を受け取つてゐられるかどうかを私は知らない。しかし云々」。河上氏が今日氏の謂はゆる文筆勞働によつて得られる報酬が普通熟練勞働者の勞働賃銀に比較してその幾千倍であるかを私は知らない。しかし云々」。かくて問題は飽くまでもがまぐちの内に横たはるのである。彼れのがまぐちへ流れ込む貨幣が、國家からの俸給または恩給といふ形態をとるかぎり、あるひはまた資本家的出版會社が會社の利益を講ずるために買ひ取るところの、彼れの文筆勞働の生産物に對する原稿料の形態をとるかぎり、彼れは純粹のマルキシストになりえない。「右の如くにして河上氏の今日の地位はまた依然として大いなる矛盾を含むものである。この矛盾が成熟してその地位を爆發せしめるまでは、河上氏の思想もまた純粹のマルキシストとして成熟



したものであるといふことができない。』。こゝにいふのが土田氏の意見である。

だが、今日の社會において、國家または資本家から貨幣を受取らずして、吾々はどうして生活してゆけるのであらうか？ 私が假に肉體的労働者であるとしても、私は私の資本家から賃金を貰ふより外に仕方がない。しかし賃金を貰つて働くかぎり私は私の資本家のために剩餘労働を搾取される。そしてその剩餘労働こそは、正に資本家階級の懐にはいる利潤の唯一の源泉なのである。それとも失業してれば、濱口内閣が間もなく計畫に着手するであらう失業救済のための土木事業にでも雇はれなければならぬが、悲しいかな、この場合にはまた、私の受取る貨幣は國庫から出る。かく考へると、私は乞食にもでもならなければ『純粹のマルキシスとして成熟したもの』になりえないかの如くであるが、これはまことに心細きかぎりである。

ところで土田氏自身は、ちやんと唯物辯證法を心得てゐられるらしいが、なんと幸運な人であらう。失禮ながら敢て問ふ。氏のがまぐちには、どういふところから、お金がはいり込むのでありますか？

私は以上のやうに、人の思想をがまぐちの規準において批判する方法を、『土田式唯物辯證法』と名づける。それはもちろん、マルクス主義の辯證法的唯物論と、似ても似つかぬものである。例へば、エンゲルスは、『事實上世界體系に關するあらゆる思想的映像は、客體的には

社會狀態によつて・主體的にはその創設者の肉體のおよび精神的構成によつて制限されてをり、且ついつでもさうである』といつてゐる。『反テューリング論』、ドイツ本、二四頁。彼れはまた、ヘーゲルが人類社會の發展過程の內的法則性を發見しえざりし理由を擧げて、『たとひヘーゲルは彼れの時代に於ける最も博識な學者であつたとはいへ、しかも彼れは第一には彼れ自身の智識の範圍が必然的に局限されてゐるといふことによつて制限され、第二には彼れの時代の智識および見解が同じくその範圍と深さとにおいて局限されてゐるといふことによつて制限された。だがなほその上に第三の理由がある。すなはちヘーゲルは觀念論者であつた、云々』と云つてゐる。(同上、九頁)。この場合注意すべきことは、或る個人の思想が一定の形態をもつた理由を説明するにあたり、エンゲルスはいつでも當該個人がそのもとに住んでゐた『時代』または『社會狀態』を観察することを、決して忘れないでゐるといふことである。個別を知るためには、吾々はもちろん、それを自然的な・もしくは歴史的な・聯關から引き出して、先づそのものだけについて研究せねばならぬが、しかし如何なる物も決して孤立的に存在してゐるのでないから、例へば或る個人を観察するにあつても、吾々は當該個人の肉體のおよび精神的條件のみならず、それらと同時に、彼れがそのもとに住むところの社會——社會狀態の變動——を見なければならぬ。かゝる聯關を無視するところこそ、形而上學的な・非辯證法的な・考へ



方の缺陷が横たはるのである。世界大戦以後の日本におけるマルクス主義的・もしくは反マルクス主義的・思想の推移を、かゝる推移がそのもとに行はれたところの社會狀勢の推移・なかなく階級闘争の激化・との聯關において見ることを、思ひも染めないやうな觀察の仕方が、なんぞ唯物論的辯證法であらうぞ。或る個人がその生活の資源を如何にして得てゐるかといふことは、もちろんその個人の肉體的・精神的構成を規定する主なるエレメントの一つではある。だがそればかりを問題としてそれ以外のことを見えざるものは、土田式唯物辯證法であり、がまぐち的辯證法である。それは實際においては、たかゞ問題の一面を説明しうるにすぎない。試に見よ、もしも或る個人の『大學教授としての地位が進められ、もはや他の教授に氣兼ねをしないのでよい時に達したことの結果』として、その人の講義が必然的に『純粹のマルキシズムに近づく』のであるならば、久しき以前から斯かる地位にゐられるであらうところの福田・小泉・土方・高田、等々の諸教授は、何故に今もなほ、あのやうな流儀の講義をしてゐられるのであるか？

→ 麥の種子からでなくては麥はできない。だがたとひ麥粒でも適度な濕氣と熱とをもつた土地の上へまかれなければ、謂はゆる否定の否定によつて自己を數百倍に増加することはできない。麥粒はそれ自身のうちに矛盾を含む。だが冷蔵庫のなかでは長きにわたつてその現狀を保

つであらう。

## 二

土田氏の論文の第二節は『河上氏の唯物辯證法の理解批判』と題する。『唯物辯證法に對する氏（河上）の理解には、なほ多大の未成熟が含まれてゐると考へる』。此の如くに土田氏は考へる。河上自身もまた左様に考へる。だがこゝでの問題は、土田氏が前記の如く考へられる理由の當否如何である。私はそれを吟味するために、氏の見解に對し何程かの程度において私の見解を對立せしめねばならぬであらう。もしそれによつて消極的な批評のうちに何程か積極的な叙述を含ませることができたならば、私の目的は達せられたといふものである。

土田氏は六ヶ條の疑問を提出してゐられる。それについて簡単に答へておかう。

一 私は嘗て拙稿『第二貧乏物語』の第一回目において次ぎの如く書いた。

『社會の變動は、人間がそれを意識すると否との關係なく、それを希望するや否やに係はりなく、むしろ彼等の意識せぬうちに、多くの場合には彼等の意志に反して、實現される。そして、如何なる社會的諸關係が結ばれたかは、事後になつて、しかも極めておほろけに、人間の意識に反映するにすぎない。……世界經濟のなかにおける個々の各生産者は、生産技術の上にかく



かくの變化を齎したことを、意識してをり各々の商品所有者は、彼れがかく／＼の生産物を他と交換したことを、意識してをるが、しかし生産者も商品所有者も、彼等がこれによつて社會的存在（人々の間に結ばれる社會的諸關係の全體）を變化することを、意識してはるない。……彼等は自分たちが一體どういふ社會に住んでをり、その社會がどう動いてゐるかについて大體の筋道すら心得ずに生きてゐる。

『人間がその上に住んでゐる地球は、人間が頭のなかから考へ出したものではない。それは人間が一定のプランに基づいて構成したものではない。人間の頭はもちろんのこと、人間そのもの乃至その他の生物もまだ存在してゐなかつた頃から、地球はすでに存在してゐたのである。それは人間の意識から獨立に存在してゐる。そして人間がそれを信じようと意識しようと否とに係らず、地球は絶えず、太陽の周りを廻つてをり、また人間がそれを豫期しようと希望しようとなつて係らず、自身の内部が絶えず運動を（例へば地震といふが如き運動を）起してゐる。これまでのやうに、人間が彼等自身の社會關係を意識的に統制することができず、むしろ逆にかゝる社會關係の制御のもとに無意識的に引きずられてゐるかぎり、社會組織に對する人間の意識の關係は、この地球に對する人間の意識の關係と同じである。』

『かくて現代社會の改造は、言はゞ地球の改造と同じである。して見ると吾々の意識・意圖・意

欲からは全く獨立に、與へられたるがまゝの複雑なる諸條件を具ふるこの地球の上に、現に自分が生活してをりながら、この地球の改造が問題となつてゐる場合に、地球自體の研究は全くこれを無視し、たゞ自分の主觀的な要求や希望を規準として、將來構成さるべき地球の設計圖を描くといふことが、如何に愚かであるかは、明かであらう。』

私が斯くも長く自分の舊稿を引用したのは、土田氏の疑問の第一は右の文章に係はつてゐるけれども、その疑問は右の文章そのものが既に解決してゐると信じるからである。『しかし』——と土田氏は言はれる——『この理解は、果して何等の誤謬もなしに、マルクス、レーニン主義を解明してゐるものであるか、また論理的に考へて、右の如き構成の理論形態はそのままに許容せられることができるか、私は直ちに次ぎの疑問を掲げて氏の所説を検討し、氏の明快なる答辯を要求するのである。』かく言ひつゝ、氏はその第一の疑問を提出される。曰く『河上氏は、現代社會の改造は、地球の改造と同じことだと言はれた。その意味は、社會科學上の問題は自然科學上の問題と同じく、與へられたるものの解剖から出發し、觀念からは出發してならないといふのであらう。勿論のことである。しかしこの場合、河上氏が社會科學の科學的性質を自然科學のそれと同一のものだと考へ、社會科學の科學としての特殊性を無視せられるならば、それは誤謬であらう。』



私が先きに引用しておいた私の舊稿の一節において、私が何を問題としてゐるかは、字の讀める人には分かるはずだ。私がそこで地球を引き合ひに出してゐるのも、フョイエルバッハに倣つて『人間以前の自然の視點』から、觀念論の破綻を明かにせんがためであつた。『唯物論一般は、人間の意識、感覺、經驗、等々から獨立の客觀的に實在的な存在を（物質を）認める。史的唯物論は、人間の社會的意識から獨立の社會的存在を認める。意識は、この場合、前の場合と同じやうに、たゞ存在の反映にすぎない、よく行つてそれのほど正しい反映である。人々は、客觀的眞理から遠ざかることなしには、ブルジョア反動の虚言の抱擁に陥ることなしにはこの渾一的に出來てゐるマルクス主義の哲學から、たゞの一つの根本的前提をも、たゞの一つの本質的部分をも、取り去ることはできないのである。』レーニンはかく言つてゐる。そして私は、先きの文章においてマルクス主義哲學の——唯物論一般および史的唯物論の——かゝる根本命題を説明せんとしたにすぎない。それはたとひ如何に不充分なものであらうとも、私がそこで何を問題としてゐるかは、字の讀める人には分かるであらう。しかるに、土田氏はそれについて、『この場合河上氏が社會科學的性質を自然科學のそれと同一のものだと考へ、社會科學の科學としての特異性を無視せられるならば、それは誤謬であらう』と言はれる。だが私はそこで社會科學と自然科學との特異性を問題としてゐるのではない。尤も、私自身はそれを問題

としてゐるのでなくとも、土田氏の見地からは、私がそこで社會科學の特異性を無視してゐると見えたのであらう。しからば暫く氏の言ふところを聽かう。氏はいふ、——  
『社會は人間と人間との關係によつて成立した一の意味的存在である。その社會的成立には前提があり、社會の諸活動はこの前提より全く離叛にすることはできないが、従つてその點で社會諸現象は社會的必然性をもつ一存在形態であるが、この前提は人間の關係が自らの中に内在せしめる意味であるがゆゑに、人間の努力により變革せしめられることができる。……等しく存在形態はあつても天體自然物としての地球の存在性と社會のそれとの間には、性質の上に根本的の相違がある。……自然物自身としては自然必然的推移があるのみで、その價值關係的存在形態が變革せしめられた前も後も、「改造」をいふことができない。ひとり人間生活には改造がある。「改造」とは、存在形態を離れ、その存在形態を支配しうべき「理想」を考へることだ。なほ言へば、存在形態としての現に在る社會形態に超越的であつて同時に内在的でありうる理念を考へることだ。』

これは私に對する疑問の提出といふよりも、おしやべりの一觀念論者の獨白にすぎない。それによれば、天體自然物としての地球の存在形態と社會のそれとの間には、性質の上に根本的な相違があるとされる。そしてもし私が斯様な講釋を受け容れない故をもつて、『その理解は



果して何等の誤謬もなしにマルクス、レーニン主義を解明してゐるものであるか」との疑惑を蒙るのであれば、私は全くマルクス主義そのものを抛棄せざる以上、土田氏のお氣に入るマルキストにはなれぬであらう。

先きに掲げた私の舊稿からの引用文が示してゐる通り、吾々は從來の歴史における社會形態の變革を一の自然史的過程と看做すものである。例へば今日存在するが如き資本主義的な社會形態は何人の意志・意圖・意欲に基づいてできたものでもなく、その點において、それは恰も、今日存在するが如き地球の形態が、何人の意志・意圖等に基づかないのと、全く同じである、といふのである。しかるかぎりにおいて、かゝる種類の社會現象に關する吾々の研究方法は、自然科学のそれと全く同じでありうるし、全く同じものでなければならぬのである。(吾々は、一方において自然と人體との對立を認めながら、他方においてこれら對立物の同一性を認め、人間をもつて自然の產物となし人間そのものを自然の一部と考へてゐるから、吾々にとつては、自然と人間との間に何等越えがたき深淵があるのではなく——總じて辯證法は如何なるところにも斯かる橋渡しのできない深淵を見出さない、——従つて自然科学と社會科學との間にも、決して鐵筋コンクリート式の限界を認めはしない。)

もちろん『意識體たる人間から成り立つてゐる社會』は、かゝる意識體の存在と無關係に存

在してゐるものでもなく、發展しうるものでもない。そしてその點においては、社會は無意識物から構成されてゐる地球と異なる。だが、それにも拘らず、『社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐる』のであり、この點では、地球の存在が吾々の意識から獨立してゐると同じである。詳しくいへば、吾々が『生活をなし經濟を營み、子を産み、生産物を作り、またそれらの生産物を交換する』のは、みな吾々の意識的活動に屬する。『人間が動かす一切のものは、人間の頭腦の中を通過しなければならぬ。このことはどうしても避けることができぬ。飲み食ひの如きですらそうであつて。それは頭腦の媒介によつて飢渴を感じた結果始まり、同じく頭腦の媒介によつて飽滿を感じた結果終るものである。』だが、それにも拘らず、かゝる個々人の意識的諸活動の結果として、それら個々人の何れもが意識せざるうちに、『出來事の一の客觀的に必然的な連鎖、一の發展の連鎖』が、いつの間にか成立するのであり、それは『吾々の社會的意識からは獨立してをり、吾々の社會的意識は決してこれを遺漏なく把握することはできない。』吾々が、社會的意識から獨立して存在する、それは恰も地球が吾々の意識から獨立して存在するのと同じである、といふのは、そのためである。

すでに吾々の社會的存在は吾々の社會的意識から獨立してゐる。それは吾々が意識する以前にすでに實在してゐるだから吾々は斯かる社會的存在を後から認識するために科學的研究を必



要とするのであり、社會科學はそのために成立するのであるが、この際その社會科學が人間の意志・意圖・意欲等々の意識的事實を出発点とすることができず、またしてはならぬといふことは、自明であらう。

吾々はあらゆる社會的意識を、一の例外もなしに、結局的には、社會的存在から説明する。吾々にとつては社會的存在の研究が根本的問題であり、爾餘の社會的諸現象はこの基礎の上に説明される。かくてレーニンのいふが如く、『科學的社會主義』は、近代的ブルジョア制度を分析し、資本家的社會組織の發展傾向を研究することに局限せられた、しかもそれだけである。だからまたエンゲルスはいふ、『吾々は、かの道義の世界には、歴史および民族の差異を超越するところの・それ自身の永遠的な原理が存在するといふ口實のもとに、何等かの道德的獨斷を、永久的な・窮極的な・進んでは不變な・道德律として吾々に強制しようとするが如き、あらゆる要求を拒否する。吾々はこれに反し、すべて従來の道德理論は、結局においては、それぞれの時代の經濟的社會狀勢の結果であることを、主張する。』（『反デューリング論』、ドイツ本、八九頁）。彼れはまたいふ、『吾々の見解に従へば、あらゆる社會的××および政治的××の窮極の原因は、……これを哲學に求むべきではなく、當該時代の經濟に求むべきである。現存の社會諸制度が不合理であり不正であるといふことについての……自覺めゆく洞見は、いつの間

にか全く知らぬうちに生産方法や交換形態のうちに變動が生じてゐて、以前の經濟的諸條件に合はせて裁たれた社會秩序がもはやそれに適合しなくなつた・といふことの一徴候にすぎない。そしてこのことは同時に、發見された弊害を除くための手段もまたこの變動せる生産諸關係そのもののうちに——多かれ少かれ發展しつゝ——存在してゐねばならぬといふことを意味するのである。かゝる手段は、頭の中から發見されるやうなものではなく、むしろ頭によつて生産に關する現實の物質的諸事實のなかで發見さるべきものである。』（同上、二八六頁）。

此の如きが正にマルクス主義レーニン主義の見地である。これを土田氏の見地——『改造とは、存在形態を離れ、その存在形態を支配しうべき理想を考へることだ』——と比較せよ。氏にあつては、人間生活の理想を考へることだ。——世界を様々に解釋して満足してゐる一列の哲學者なみにと、私はこれに附け加へよう。しかも斯かる理想は、土田氏によれば、社會の『存在形態を離れた』ものであり、『現に在る社會形態に超越的』なものである。——私はそれに附け加へよう、土田氏自身は如何に主觀されてゐようとも、氏の考へられる理想は、決して現實の社會的存在から離れたものではなく、逆にそれに依存してをり、むしろそれは社會的存在の何等かの形における思想的反映であることは、例へば氏が萬卷の書にうづもれて假寐されたる折に結ばれる夢が、たとひ如何に幽玄な高遠なものであらうとも、それは結局のところ



氏がいつかうつゝに見られた現實的存在の諸映像の再生産にすぎぬと同じことなのである。私がかくいふとき、氏は或ひは言はれるであらう、だから自分は『現に在る社會形態に超越的であつて、同時に内在的でありうる理念を考へる』と言つたではないかと。私はこれに答へていふ、それなら『存在形態を離れる』とか『現に在る社會形態に超越的』だとかいふ言葉を棄てらるべきである。存在の反映としての外には何等の意識をも認めぬか、あるひはそれ以外の意識を——存在から獨立してゐる意識を——認めるか、そこに唯物論と觀念論との本質的差異が横たはる。土田氏が自分勝手の觀念論を振り廻はされるのは、しばらく氏の自由に一任しておくが、しかしさういふ立場からはマルクスもレーニンも分かるはずはないのだといふことだけ、こゝに一言しておかう。

## 三

簡単に答辯しておかうと思つたのは第一項だけで既に、思はず長くなつた。以下なるべく簡単に片づけよう。

二 私に『第二貧乏物語』の第二回目で、辯證法を説明するために、醫學博士足立文太郎氏の研究になる。日本人と西洋人との軟部人類學上の比較（それは博士が無数の屍體を解剖する

ことによつて、現實の材料に基づき觀察されたもので、そのために博士は實にその一生の努力を拂はれたのである）に關する。一結論を利用した。その結論とは、博士自身の言葉によれば、『東京人類學雜誌』第四十三卷第八號、『人種的の違ひはすべて絶對的のものではない』といふのである。こゝにエンゲルスの言葉によれば、『宥和し和解することのできないものと考へられた兩極的な對立、無理に固定した境界線や分類、……かゝる對立や區別は、自然のなかにあるにはあるが、しかしたゞ相對的な妥當性をもつにすぎない、といふことの認識、また吾々がかゝる對立や區別やについて考へてゐる凝固性や絶對的の妥當性は、これに反し、全く吾々の考で自然の中へ持ち込んだものである、といふことの認識、——かゝる認識が辯證法的に自然を把握することの核心をなす。人々は、自然科学において集積される諸々の事實に強制されつゝ、かゝる認識に達する』といふことの、極めて適切な一例が存するのである。それは辯證法について多少の知識を有するものが肯定せざるをえざるところであり、そのことは茲に引用したエンゲルスの言葉だけからでも推察できよう。ところで土田氏は、『河上氏があげられた日本人の優劣云々の命題は、正しく唯物辯證法を説明する例であるか』といふことを、その第二の疑問として提出し、それについて『明快なる答辯を要求するのである』と言はれるのである。問題は土田氏が疑問を提出されるに先だつて既に明かになつてゐると思ふが、しかし、



どういふ點が氏のために疑問となりうるのであらうか？

私はまた、すでに次ぎの如くにも言つてゐる。――

『西洋人は日本人よりも優れた人種であるといふのは、一の肯定的結論である。だが辯證法は、吾々に命ずるに、かゝる肯定的結論に安んぜず、むしろ之に矛盾した方面がありはしないかを探求することを、もつてする。そこで吾々は、ある一部分だけについてでなく、例へば筋、血管、神経、内臓、等々について、次ぎ／＼に研究してみる。さうすると果して相矛盾した諸結果が出てくる。すなはち或る部分では西洋人が日本人より優つてをり、また或る部分では逆に日本人が西洋人に優つてをる。そして吾々が研究を進めれば進めるほど、此の如き對立的な關係が無數に生じてくる。そしてそれらを總て綜合するときに、日本人と西洋人との人種としての異同が、全面的に理解れる。このことは、現實に向つて極力注意を拂ふことによつて、はじめて實現される。現に足立博士は、過去數十年間、數知れぬ屍體の種々なる部分にわたつて、極めて忍耐強き解剖學的研究を繼續されたのであり、且つそれゆゑにこそ、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ・矛盾を含んだ・一の辯證法的結論に到達されたのである。』

私は重ねて茲に私の舊稿からの引用を敢てしたが、それは、そこには疑問の餘地なきまでに

問題を明瞭にしてゐると考へるからであり、これをもう一度落ち付いて讀んで貰つたら、話は分かるはずだと思ふからである。

だが、土田氏の疑問なるものを、一應文字通り讀んで見よう。氏は次ぎの如く言はれる。

『唯物辯證法的命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した諸傾向を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ。しかるに長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることと長蹠筋に關して日本人が西洋人に優れることは、如何なる點で矛盾し相對立するか。長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して長蹠筋に關し日本人が西洋人に優れることとなりうるか。河上氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない。河上氏は右の命題を「かくて我は彼に優ると同時に劣るといふところの・それ自身に矛盾を含んだ・一個の命題」と呼ばれるけれども、いつの間にか優劣の關說せられてゐる長掌筋と長蹠筋とはわきへ打ち捨てられてゐる。二つの命題は全く別のものについての關說だ。これを合して一つの命題にしても何等の矛盾をも含みはしない。河上氏は長い二本の足を持つてゐる、河上氏は短い二本の手を持つてゐる。この二つの命題が何の矛盾を含むか。河上氏は純粹のマルキシストにならんとする意識的努力を持つ、河上氏は觀念的經濟學者に止まらうとする無意識的傾向を持つ。この二つの命題にして初めて唯物辯證法的論理の對立になりうるのだ。』



河上は『普通の形式論理をさへ知つてゐない』と威猛だかになつてゐる土田氏が、こゝでは惜しげもなく辯證法に對する自己の無智をさらけ出してゐられるのは、なか／＼の御愛嬌である。

私は先づ絶對的眞理の問題に關するエンゲルスの有名なる辯證法的命題を掲げよう。それは次ぎの如き言葉で表現されてゐる。『人間の思惟は、至上的であると同様に、非至上的である。』あるひは『人間の認識能力は、無制限的であると同様に、制限的である。』これらの命題は、『日本人は、(西洋人に比し)劣つた人種であると同様に、優つた人種である』といふのと、全く同じ性質のものである。この後の命題を詳しくいへば、『日本人は、長掌筋等々においては、劣つた人種であるが、長蹠筋等々においては、優つた人種である』といふことになり、また先きのエンゲルスの命題を詳しくいへば、人間の思惟は、『その素質、傾向、可能性、歴史的の究極目的よりすれば、至上的であり無制限的であるが、個々の實行やその都度の實現性よりすれば、非至上的であり制限的である』といふことになる。そこでこれに土田式論理を適用すると、次ぎの疑問が生じることになる。『その素質よりすれば思惟が無制限的であるとの命題は、如何にして、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、個々の實行よりすれば思惟が制限的であるとの命題となりうるか。エンゲルス氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない。』――

かゝる疑問を大上段に構へて持ち出すことが、やゝ滑稽であるといふことは、今となつては、土田氏自身も感づかれたであらう。だから、かゝる馬鹿げた疑問を提出するに至つたのは、何をどう誤解してゐるためであるかといふことは、哲學者土田氏の名譽のために氏自身の解決に一任しておくのが、おそらく穩當であらうと考へるが、たゞ一般讀者の便宜のために以下少しばかり之に觸れておかう。

この場合何よりも先きに目立つことは、土田氏のへんてこな疑問なるものは、タアルハイマアの言葉を用ふれば、事物の連絡を『状態として、または靜的に』觀察することにより、その『横断面』を示す場合と・事物の連絡を過程として、進行として、または動的に』觀察することにより、その『縦断面』を示す場合・との區別に對する無理解から起るといふことである。レーニンはいふ、『對立物の同一性は、(精神および社會を含めての)自然のすべての現象と進行とにおける、矛盾に充ちた相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識(發見)を意味する。』ところで土田氏はいふ、『唯物辯證法的命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した諸傾向を含み、肯定はその反對物たる否定に轉化するものでなければならぬ。』前者と後者とを比較して見れば、土田氏が何を誤解してゐるかゞ分からう。氏の命題は、『肯定はその反對物たる否定に云々』といふ最後の句を削り、且つ『諸傾向』の次ぎに『認識(發見)』を加へ、



それで打ち切れれば正しくなるのである。すなはちそれは次ぎの如きものであるべきなのだ。――  
 『唯物辯證法命題は、矛盾に充ちた・排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識（發見）を含む』。  
 辯證法的命題は『それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して』その反對物になりうるものでなければならぬといふ風に、土田氏が考へられてゐることが、そも／＼の間違ひである。最も解かり易い一例を示さう。『商品は、使用價值と交換價值との・この二つの對立物の・直接的な統一である』といふのは、マルクスが商品について立言した『唯物辯證法的命題』である。辯證法は、統一的なものを分解してその矛盾に充ちたる構成成分を認識することを、要求する。商品は一個の統一物である。これを分解して、使用價值および交換價值といふ二つの對立物を發見するのは、その矛盾に充ちた構成成分を認識するゆゑである。かくて『商品は、使用價值と交換價值との・この二つの對立物の直接的な統一である』といふ一の肯定的な辯證法的命題が生れる。だが、如何にそれが辯證法的命題であり、從つて如何にそれが事物のうちに含まれてゐる矛盾を指摘してゐようとも、この命題、それ自身が矛盾を含んでゐるのではなく、從つてこの肯定的命題がそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化してその反對物に推移するはずはないのである。（私が『日本人は西洋人に努つてゐると同時に優つてゐるといふ・矛盾を含んだ・一の辯證法的命題』と言つたのは、言葉が不正確であつた。正確には『矛盾を含んだ』の代りに

『矛盾した事實の認識を含んだ』とあるべきだ。これは土田氏を誤解せしめるための一助となつたかも知れないが、もしさうであつたらお氣の毒なことであつた。）

土田氏は私に向つて、『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることゝ、長蹠筋に關して日本人が西洋人に優ることとは、如何なる點で矛盾し對立するか。二つの命題は全く別のものについての關説だ。これを合して一つの命題にしても、何等の矛盾を含みはしない』といふ疑問と、『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關して日本人が西洋人に優ることゝなりうるか』といふ疑問と、これら二つの疑問を提出することにおいて、『河上氏は普通の形式論理をさへ知つてゐられない』と斷定されてゐるが、今年の京都の夏は特別に暑いせいか、さすが土田氏の頭腦も茲では混亂を極めてゐる。

私は氏の第一問に答へていふ、長掌筋に關して日本人が西洋人に劣るといふことと、長蹠筋に關して日本人が西洋人に優るといふこととは、氏の言はれる如く『全く別のものについての關説』ではなく、双方とも西洋人との比較における日本人の人種的持徴といふ同一の對象についての立言である。たゞ異なるところは、日本人を西洋人と比較するために抽出された方面のみである。すなはち前者は日本人が西洋人に劣る方面の事實を指摘してをり、後者は逆に日本人が西洋人に優る方面の事實を指摘してゐるのであり、（かく種々なる方面について觀察するこ



とにより、吾々の認識ははじめて全面的になる、かくてこれら二つの事實は、一方は日本人の劣つてゐる方面を・他方はその優つてゐる方面を・指摘してゐるといふ點において、互に相對立して矛盾してゐるのである。この場合、對立と矛盾とは、これ等二つの事實の間に存する。しかるに土田氏が、その第二問において、『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關して日本人が西洋人に優ることとなりうるか』と質問されてゐるのは、何としても滑稽である。もし唯物辯證法的命題といふものが左様なことを要求するものであるならば、例へば、『商品は使用價值であり交換價值である』といふ命題の前半、すなはち商品は使用價值であるといふことは、『それ自身のうちに含む矛盾により、轉化して』商品は交換價值であるといふこととなりうるのでなければならぬ。もしさうでなかつたなら、『商品は、使用價值と交換價值との・この二つの對立物の・直接的な統一である』といふマルクスの命題は、辯證法的な命題ではないといふことになる。これはなんと馬鹿けた話であらう。

土田氏が斯かる馬鹿けたことを持ち出されるに至つたのは、氏が辯證法における『反對物への轉化』の問題を知つてゐながら、しかも極めて不充分にしか知つてゐられないためである。それ自身のうちに含む矛盾により一定の事物がその反對物に轉化するといふのは、事物の連絡

を『過程として、進行として、または動的に』觀察することにより、その『縦断面』を示す場合のことである。例へば、幼蟲がそれ自身のうちに含む矛盾のために、成長して蛹となり、更に蛹がまたそれ自身のうちに含む矛盾のために、發育して成蟲となる、といふが如きは、すなはちそれである。そしてこの場合、發展過程の全體（それ自身がまた一個の統一物）についていへば、蛹は幼蟲の否定によつて生ずるところの・幼蟲の反對物であり、また成蟲は蛹の否定によつて生ずるところの・蛹の反對物なのである。

かゝる見地からすれば、價值および交換價值といふ二つの矛盾物によつて構成されてゐる商品そのものは、それ自身のうちに含む矛盾のために、運動するものたらざるをえない。諸商品の交換過程は、すなはち斯かる矛盾の展開であると同時に、かゝる矛盾の一部的な且つ一時的な解決である。この解決は、一定の商品が貨幣となることによつて實現される。この場合、貨幣は商品の反對物である。すなはち一定の商品は、普通の商品たることを否定することによつて、その反對物たる貨幣に轉化するのである。だが、此の如きはすべて商品そのものの發展過程に關する問題である。もしこれを、商品を分析してその矛盾に充ちた構成成分を認識することによつて成立つた命題と混同し、かゝる命題自體もまたそれ自身のうちに含む矛盾のために動かねばならぬものの如く考へたならば、それはめちやくちやくといふものである。



もちろん一定の事物に関する命題も、その事物に関する吾々の認識が窮極的に完全なものないかぎり、一定の矛盾のために運動して、最初のものとは異つた或る他のものに轉化するであらう。すべて運動を生むものは何等かの矛盾であるがゆゑに、運動を理解するためには、吾々はいつもその源泉たる矛盾を理解せねばならぬ。かくて一定の命題は、あるひはそれ自身のうちに含む矛盾により、あるひはその命題と現實の事物との間に存する矛盾により、轉化して自身以外のものとなるであらう。ヘーゲルの哲學體系は、それ自身の内容全體を絶對的眞理であると主張することにおいて、あらゆる獨斷的なものを拒否する彼れの辯證的方法と矛盾してゐた。そしてかゝる矛盾のために、ヘーゲル哲學の體系は否定された。久しく西洋人の間に行はれてゐたところの・日本人はすべて人種的の西洋人に劣つてゐるといふ・命題は、實際には現實の事實と矛盾してゐる。だからそれは、この矛盾のために否定されて、日本人は西洋人に劣つてゐると同時に優つてゐるといふ命題に置き代へられた、等々。

およそこれらの場合は、事物の發展過程を『對立物の闘争過程』として把握することにより、『反對物への轉化』を一の『自己運動』として理解する場合に屬するのである。そして土田氏の奇妙なる質問は、——『長掌筋に關して日本人が西洋人に劣ることは、果してそれ自身のうちに含む矛盾により、轉化して、長蹠筋に關し日本人が西洋人に優ることとなりうるか?』

『結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか?』等々は、——以上述べ來つたやうな・事物の連絡を進行または過程として動的に觀察する場合の問題を、少しばかり嚙つて、これを變なところへ應用されたことから、生じたものに外なのである。

三 土田氏の疑問の第三は、『現實のものの性質を分析すれば、一つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば必ずしも二つだけではなくて幾つでも事實の分析に即して得られるはずである。例へば鼻の高さに關しては日本人と西洋人の間に優劣がない、爪の色に關しては日本人と西洋人との優劣は無記である、ともいへるのである。河上氏の論理をもつてすれば、これらの命題もみなそれ／＼に矛盾し對立する辯證法的命題であるか。結局運動は何れの方向に起り、これらの命題の何れが消滅し他に轉化しなければならぬのであるか』といふのだが、これはつまり前述の第二疑問と同じ誤解に立脚してゐるのだから、特に取り上げて説明する必要はない。たゞ新たな問題は、『一つの命題に矛盾し對立する命題は必ずしも二つだけではなく幾つでも得られるはずである』といふ點にあるかと思ふが、これはそれで一向差支ないのである。例へば、日本人は西洋人に比して人種的に劣等であるといふ一つの命題があるとするとき、それに對して、長蹠筋においては日本人が西洋人に優るといふ命題、血管のしかく



の點においてやはり日本人が西洋人に優るといふ命題、更にまた視神経においても同じく日本人が西洋人に優るといふ命題、腋臭腺においてもまた日本人が西洋人に優るといふ命題、等々が對立しうるのである。もしさう澤山にならぶのが氣になるといふのなら、これを一纏めにして、日本人は長蹠筋、血管系統の或る部分、視神経、腋臭腺、等々において西洋人に優るといふ一つの命題となし、それをば、日本人は西洋人に劣るといふ命題に對立せしめてもよからう。そんなことは、事物の本質からいへば、どうでも可いことだ。元來、矛盾だの對立だのといふ言葉を形式論理的に解釋すればこそかゝる疑問が生ずる。かゝる疑問を提出するものは、何故使用價值と交換價值とが對立物であるか、何故生産諸力と生産諸關係とが對立物であるか、使用價值の對立物は非使用價值であり生産諸力の對立物は非生産諸力ではないか、等々の疑問をも提出するであらう。これらの疑問はすべて辯證法における『事實の客觀的論理』を理解しなければ解けないのであるが、委細はすでに土方氏の論文を批評せし際説明したことであるから、(一九二九年—昭和四年—四月號『改造』。本書四〇—)こゝには之を繰り返へさない。

たゞ一言注意しておく。吾々が事物の連絡をその發展において動的に觀察する場合には、すでに述べたやうに、これを對立物の鬭争として見るのであるが、すでに問題が對立物の鬭争である以上、それはいつでも『二者鬭争的』(zweischlächtig)である。例へば源平は紅白に分れ、

圍碁は黑白に分れ、相撲にあつては東西に分れる、等々。その關係をレーニンが次ぎの如く指摘してゐる。『數學においては、正數および負數、微分および積分。力學においては、作用および反作用。物理學においては、陽電氣および陰電氣。化學においては、アトムの結合および解離。社會科學においては、階級鬭争(すなはち搾取階級と被搾取階級との對立、あるひは生産關係と生産力との對立、——河上補)』。かゝる場合にはいつも二つのものが對立する。土田氏が『一つの命題に矛盾し對立する命題は、河上氏の例を取れば、必ずしも二つだけではなくなるはずだ』といふことを、不都合に感じられたのは、あるひは前記の如き場合の問題を履き違へられたのかも知れない。

四 私の舊稿のなかには、『辯證法は、一切萬物の前に、たゞ一つの例外をも許すことなく、その消滅性を宣告する。その前には、究極的なもの、絶對的なもの、××なものは、何一つとして存立しない』といふ類の言葉がある。それについて土田氏の疑問の第四が起る。氏の言葉によれば、『人間の努力はいかに偉大であり、その範圍をひろめても、客觀世界の現象のすべてを盡くし、今後起るべき現象の一切を盡くすことができない。しかるに河上氏は「一切の事物」について辯證法の行はれてゐることを主張せられる。個々の現象についての分析の結果を一切のものに擴張しうる根據は何處にあるか』といふのが、それである。



この場合にも、私は先づ、『河上のこの理解は、果して何等の誤謬もなしに、マルクス、レーニン主義を解明してゐるものであるか』との、土田氏の疑問をはねかへさう。何故なれば、以上の如き表現は、次ぎに示すが如く、エンゲルスもレーニンも一様に用ひてゐるところであるから。

先きに引用した私の舊稿中の章句は、『この哲學（辯證法）の前には、究極的な・絶対的な・××的な・何物も、存立しない、この哲學は一切のもの、の消滅性を證明する』といふエンゲルスの有名な句（佐野文夫氏『フオイエルバツハ論』一九頁の譯文に従ふ）に、相當するのである。

レーニンはまた、認識の法則および客觀世界の法則としての辯證法をば、例へばプレハーフにおける如く『實例の合計』と解すること（『例へば種子、例へば古代共産制、——單に分かり易くするためにはあるが、エンゲルスもまた爲せし如く』）を、非難した後、それに引き續いて、『對立物の同一性は、自然（精神および社會を含めての）すべての現象と進行とに對しての矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した・諸傾向の認識發見』を意味する。一切の世界の進行をその「自己運動」において……認識するための條件は、それらをば對立物の統一として認識することである』とも言つてゐる。だから、『一切の』とか『すべての』とかいふ言葉は河上が使つてゐるのが土田氏のために疑問となるのなら、氏はその疑問を一先づエンゲル

スやレーニンに向けらるべきである。そしたなら、氏はこれらの偉大なる辯證法論者から、氏の疑問に對する辯證法的解決を得られるであらう。吾々が辯證法について立言するとき、屢々『一切の』とか『すべての』とかいふ類の言葉を用ひるのは、それが『極度に一般的な・正しくそのゆゑに極度に重要な・法則』だからである。すなはちそれは辯證法的な意味において最も絶対的な法則だからである。（辯證法はすべてのものが相對的であることを認める。だが、かくいふとき、その相對的なる言葉もまた相對的に用ひられる。それは絶対を排除しない。）だが、吾々はかく言へばとて、土田氏の考へてゐられるやうな、『今後起るべき現象の一切』に對し、現實の事實に關する何等の分析をも經ることなしに辯證法的法則を公式的に『擴張しうる』と考へてゐるのではない。これについて委しいことは、エンゲルスの『反デューリング論』における辯證法の條下を見ても分かる。私はこゝにたゞ次ぎの章句だけを引用しておかう。

『マルクスは、かゝる進行（資本主義的生産様式の没落の過程）を否定の否定と名づけ、それでもつて斯かる進行を一の歴史的に必然的なものであると證明しようとしたのではない。反對に、彼れは斯かる進行のある部分は事實上すでに生じたし、ある部分はこれから生じなければならぬといふことを、歴史的に證明した後、それをば一定の辯證法的法則に従つて行はれる進行だと名づけたのである。それだけのことである。……だが、もしデューリング氏が、辯證



法をもつて、恰も形式論理學や初等數學が限定された仕方できう考へられうると同じやうに、單なる證明のための一道具であると解するならば、それはすでに辯證法の性質に關する理解の完全なる缺如である。……辯證法は、形式論理の狹隘なる視界をつき抜けるゆゑに、より包括的な世界觀の萌芽を藏してゐる。』(『反デューリング論』、ドイツ本、一三六―七頁)

この際土田氏がデューリングと同じやうな考へ方をしてゐられるのなら、それは實際に『辯證法の性質に關する理解の完全なる缺如』である。問題はこゝでもまた、辯證法的に解決されることを必要とするのである。

なほ土田氏が以上述べたるが如き疑問を提出しつつ、更に自身の意見を述べて『我々は思惟形式の或るものの客觀世界に對する先驗性を主張するのだ』と言つてゐられるのは、完全なる一つ觀念論的噓語にすぎない。これについては、既にエンゲルスが、『反デューリング論』第一篇哲學の冒頭『先驗主義』の條下で、徹底にやつつけてゐる。もしそれに異論があれば、それを批判されんことを希望する。觀念論の決まり文句を投げ出しただけでは、問題にならぬ。

五 疑問の五は、前項と同じ性質のものゆゑ、こゝには略する。

六 土田氏の第六の疑問にいふ、『一切のものが自己の消滅を齎すべき要素をそれ自身のうちに包含するものならば、……それ自身一個の觀念形態である唯物辯證法は、またマルキシ

ズムは、結局消滅し、他に轉化しなければならぬではないか。自己の消滅を豫想するものが、どうして自己の眞理性を主張しうるか。』これが土田氏の最後の疑問であるが、順次を追うて茲まで來ても、氏の疑問は依然として、辯證法的唯物論に對する單なる素人の疑問にすぎない。これらの疑問は、すべて辯證法的にのみ解決されうるものであり、それゆゑに、それらはすべて辯證法に對する無智から生じるのである。

レーニンのいふところによれば、『マルクスは一八四五年に、エンゲルスは一八八八年と一八九一年とに、實踐の規準を認識論の基準となした。』そして『この規準もまた、人間の認識を一の「絶對的なもの」へ轉化することを妨げるに足るだけ「不決定的」であるが、しかし同時にまた、觀念論および不可知論のあらゆる種類に對して容赦なき闘争を遂行するに足るだけ「決定的」である。』(このレーニンの命題そのものがまた、一の辯證法的命題である)。土田氏の提出された眞理の絶對性に關する疑問は、たゞこの規準から辯證法的にのみ解決されうるであらう。

『客觀的絶對的眞理への吾々の認識の接近の限界が歴史的に條件づけられてゐる』といふ點において、如何なる眞理もみな相對的であり、新たなる事實の發見される毎に、それは絶えずその姿を改める。だが『客觀的絶對的眞理そのものの存在は無條件的であり、吾々がこれに近





づくことも無條件的である。』そして吾々の智識が、かゝる客觀的眞理の一部を把握してゐるかぎりにおいては、それは絶對的である。だからレーニンはまたいふ、『注意せよ、主觀主義（懷疑主義、詭辯論、等）と辯證法との區別は、なかんづく次ぎの點にすなはち（客觀的）辯證法においては相對と絶對との區別そのものが相對的であるといふ點に存する。客觀的辯證法にあつては、相對のうちにも絶對が含まれてゐる。』吾々がマルキシズムを眞理であると主張するのは、それが以上の意味において相對的眞理であり且つ絶對的眞理であるといふことを主張するものである。

なほマルクス主義的××が完了したならば、社會は資本主義的に構成されたものではなくなるのだから、マルクス主義のうち特に資本主義的社會の構造を分析したマルクスの經濟學は、吾々が現に住む社會を説明するための經濟學ではなくなり、かゝるものとしてはそれは他の學問に席を譲るであらう。だが、例へばボグダーノフの如く、『マルクスの貨幣流通の理論に對し、たゞ「吾々の時代にとつて」のみ客觀的眞理たることを承認し、この理論をもつて「超歴史的」客觀的」眞理たることを「獨斷論」と呼ぶのは、また一の混淆である。この理論が實踐に適應するといふことは、何等將來の事情によつて變更されえない。しかもそれは、ナポレオンが一八二一年五月五日に死んだといふ眞理が永久的であるのと同じである。』問題は實に此

の如く明白である。

土田氏の論文の第三章は「河上氏經濟學の方法論的批判」と題し、第四節は『河上氏經濟學の内容的批判』と題する。だがこれらは暫く批判の外におかう。何故なれば、氏は哲學者としてこそ大衆の間に影響を與へうるであらうが、經濟學者としての氏に對する信用は、氏が如何なる議論をされようとも、それが大衆に有害な影響を及ぼすであらうほどに、さして大なるものではありえない、と觀測されるから。

この論文を終るにあつて、私は最後に一言する。讀者諸君は、私が以上述べ來つたところによつて、要するに土田氏の疑問なるものは、盡く氏が辯證法的唯物論を理解せざるよりして生ずる疑問に外ならぬことを、恐らくは理解されたであらう。そしてこのことはまた、氏の提出されたるが如き疑問が、辯證法的唯物論に不案内なる多くの讀者たちにとつて、何故に一應は尤もらしく見えるかといふ理由を、説明するものである。

しからば、氏は何故に、かゝる幼稚なる疑問を提供することを敢てされるのであるか？ 答へは極めて簡單である、それは哲學すらが（否な哲學こそは）最も黨派的な學問であるから、階級闘争が尖鋭化するにつれて、ブルジョアジーの御用を（意識的に又は無意識的に）つとめる



觀念論的哲學者の全系列は、今やプロレタリア的××的唯物論の勃興を鎮壓すべく、それぞれ觀念論の錆びついた青龍刀をひたして、バリケードの彼方に動員されざるをえざる時代であるから。現に形勢不利と見ゆる場合には土方博士の如き經濟學者すらも、かゝる哲學論の領域にまで有り合せの武器を携へつゝ、飛び出してこられるのである。

『大體において、經濟學の教授連は資本家階級の學識ある番頭以外の何物でもなく、そして哲學の教授連は——神宮僧侶たちの學識ある番頭以外の何物でもない』(レーニン)。否な大學教授には止まらない、大學からは一文の月給をも貰つてゐない土田氏も、今ではこれら大學の諸教授と完全に手をつなぎつゝ、吾々唯物論者を征服しようとしてゐるのである。だが、私をつかまへて、『氏(河上)が最初より教授でなかつたものならば、唯物辯證法に對する氏の理解も、もつと早い時期に徹底せしめられたであらう』といふ土田氏自身の理解は、——氏は仕合せにも最初から教授でも何でもないので、——徹底どころか上滑りにすら達してゐない。このことは、私がこの文章の冒頭で取扱つたが、まづち哲學そのものの破産を、早くも茲に證明してゐるわけであるが、これなどは、この際における拾ひ物の御愛嬌の一つであらう。

(一九二九年—昭和四年—十月發行『中央公論』所載)

## 辯證法的唯物論の批判の批判

——土方教授の批判の批判——

東京帝國大學教授土方成美氏は、日本の經濟學界における第一の勇者である。氏はしばしば極めて不用意なる準備のもとに、マルクス主義の排撃に突進され、その度毎に、至極の勇者でなければできない藝當を、吾々の眼前で演出される。

氏は昨年秋『經濟學總論』と題する著作を公けにされたが、その第一章第二項の二は『唯物辯證法』と題してある。それは殆どエンゲルス、ブレハーフ、デボーリンからの引用で埋められてをり、それらに對して簡單なる評言が加へられてゐるに止まるが、しかしその僅な評言のなかになく振つたものがある。その一例を挙げよう。

『辯證法によれば、物はその對立物に轉化してゆく。……茲に考ふべきは或物の對立物ならびにその止揚が、或物が與へられるや否や特定のものとして與へられるのであれば、吾人が辯證法を経験界において採用すべきや否やの問題も極めて明瞭であるが、謂はゆる辯證法における對立物は不特定のものである。例へば、机の對立物としては、机にあらざるあらゆる物が考へ



られる。その止揚もまた同一である、云々。』(前掲書七一頁)。

失禮ながら、驚くべき無智の表白の以外に、そこに何かがあるか？ 氏はいふ『辯證法における對立物は不特定のものである。例へば、机の對立物としては、机にあらざるあらゆる物が考へられる』と。氏はかく言ふことによつて、辯證法に對する根本的な氏の無理解を證明してられる。吾々は統一的なるものを分解して、それに含まれてゐる對立物を發見するのである。かゝる對立物は客觀世界に與へられてゐる。吾々はこの客觀世界を離れて、たゞ頭の中で對立物を考へ出さうとしてゐるのではない。例へば、長掌筋に關して日本人は人種的に西洋人に劣つてゐるといふ命題が立てられた場合に、これに對する對立物は何であるかを形式論理的に考へるならば、形式論理では、甲の對立物は非甲であるから、長掌筋に關して日本人は西洋人に劣つてゐるといふ命題の對立物は、長掌筋に關して日本人は優れてゐるといふ命題であらう。机の對立物としては、机にあらざる物が考へられると土方教授の言はれるのは、正にこの流儀の形式論理に基づくのである。

だが、客觀的事實の反映としての辯證法的論理は、長掌筋に關して日本人は西洋人に劣つてゐるといふ命題の對立物として、例へば、長蹠筋に關して日本人は西洋人に優れてゐるといふ命題を定立する。かゝる對立的命題は、たゞ頭の中で形式論理的に考へ出されたものではない。

い、人間の肉體を現實的に解剖することによつてのみ發見されるのである。

周知の如く、マルクスはその『資本論』の冒頭において、資本家的社會の細胞たる商品(この統一物)を分析して、商品の『二つの要素』としての(すなはち矛盾に満ちたる構成成分としての)使用價值と價值(交換價值)とを發見してゐる。如何なる勞働生産物でも、それが商品である以上、一方では、何等か人間の欲望を満足せしめうる物でなければならぬと同時に、他方ではまた、例へば金何圓に値する物でなければならぬ。かくて使用價值と價值(交換價值)とは、商品といへる統一物のなかに現實的に含まれてゐる對立物なのである。この場合、商品が如何なる對立物から構成されてゐるかは、現實の商品を分析することによつてのみ、はじめに認識されうる。吾々がもし形式論理によつて、使用價值の對立物は何であるかを考へたならば、吾々はたゞ非使用價值を得るに止まるであらう。辯證法的論理における對立物は、かゝる形式論理的な對立物と、一致することもあり、一致しないこともある。すべては問題とされた具體的な對象の客觀的性質がこれを決定する。

土方教授は更に言はれてゐる、『問題は經驗科學としての經濟學を否認して、端的に吾人が經濟學の形而上學に邁進すべきか、それとも經驗科學としての經濟學において可能なる限りの認識を進展せしめて、遂にその超ゆるべからざる極限に到達して始めて形而上學的思惟に入る



べきかである。著者は、端的に經濟學が經驗的認識を棄て、形而上學的領域に直進することは徒らなる紛亂を導くのみであつて、決して吾人の認識を進めるゆゑではないと信するをもつて、經濟學が能ふかぎり經濟科學の領域を嚴守すべきを主張したい。しかも經驗的認識の領域において形式論理は到底棄てがたきものであると信する。』(前掲書、七九頁)。

重ねて失禮ながら、こゝにもまた、完全なる無智の表白以外の何物があるか？ 吾々は先きに、辯證法的思惟に對立するものを、形而上學的思惟と名づけると言つた。しかるに土方教授は辯證法的に思惟することを、『經濟的認識を棄て、形而上學的領域に直進すること』だと考へてゐられる。マルクスの『哲學の貧困』は、二つの章から成立つてをり、その第二章は、『經濟學の形而上學』と題されてゐるが、土方教授は、そこでマルクスが經濟學の形而上學を主張してゐるとでも思つてゐられるのか？

私の先きに引用した具體的な例が明示してゐるやうに、人體を現實的に解剖することによつて吾々の經驗的認識を深めれば深めるほど、『人種的の違ひはすべて絶對的のものではない』といふ辯證法的な結論に到達せざるをえないのである。『兩極的な對立、無理に固定した境界線や分類別、かゝる對立や區別は、自然のなかにあるにはあるが、しかしたゞ相對的な妥當性をもつにすぎない、といふことの認識、——かゝる認識が、辯證法的に自然を把握することの

核心をなす。人々は、自然科學において集積される諸々の事實に強制されつゝ、かゝる認識に到達する。』エンゲルスのこの言葉の正しさは、科學的認識の進歩が年々に立證しつゝあるところである。土方教授は『能ふかぎり經驗科學の領域を嚴守する』と言つてゐられるが、もし教授にして果して忠實にかゝる經驗的認識を累積して行かれたならば、私は豫言する、教授は遂に辯證法的論理を採用すべく強制されるに至るの日はあるであらうといふことを。だが、私はまた同時に豫言する、教授はかゝる強制を感じだされる以前に、必ずや形式論理の領域において足ぶみされるであらうといふことを。何故なれば、『辯證法は、——マルクスの言へる如く、——その合理的な姿においては、ブルジョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の苦悶であり恐怖である』から。吾々がなほ後に至つて見るであらう如く、辯證法は『その本質上、批判的であり、××的である。』もし××××××××に進むことが一の××××であるならば、何人も非辯證法を『嚴守』せざるを得ないのである。辯證法が、ブルジョアジーの空論的代辯者として自らを規定せる大學教授たちによつて到底理解されえず、むしろ××××××とする××××××の間、眞の××××を見出しつゝあるは、これがためである。

辯證法的に思惟することをもつて經驗的認識を棄てることとなす土方教授の見解は、根本的に誤謬である。レーニンの言葉によれば、マルクスの經濟理論は、『彼れが二十五年以上も



研究した莫大な材料『實際的資料の大量（全モン・ブラン山）』に基づいてゐる。『資本論』のなかに展開されてゐる辯證法的な思惟過程は、商品生産社會といへる客觀世界の現實的な運動の・人間の頭腦への・忠實なる反映にすぎない。それゆゑにこそ『資本制の歴史は、資本家的社會の發展の諸法則および資本家的全體系の××に導くべき資本家的社會の諸矛盾に關するマルクスの學說を、完全に確證する』こととなつてゐるのである。

土方教授は更に問題を提供してゐられる。曰く『最後に問題とすべきは……辯證法はそもそも思惟の他の法則たる形式論理と如何なる關係に立つとせられるのであらうか、これ直ちに起る疑問である』と。これについて、氏はプレハーノフの若干の言葉を引用した後、すぐ引續いて、『かくして如何なる點まで形式論理が適用せられ、それ以外は辯證法論理が適用せられるのであるか、その區劃限界が明瞭でない』と言つてゐられるが、（前掲書、七二―七三頁）、この場合にも、プレハーノフの議論が不明瞭のではなく、たゞそれが土方教授によつて理解されえないといふまでのことである。私はできうるかぎり簡単に、更にこの問題について一言しておかう。

レーニンも嘗て次ぎの如く言つた。『コップは疑ひもなくガラス製の圓筒であり水を飲む道

具である。しかしながら、コップは、たゞ二つの屬性・特徴・もしくは方面をもつてゐるばかりでなく、無数の屬性・特徴・方面・他の全世界との相互關係および「媒介」をもつてゐる。コップは、投げつける道具としても利用しえられるところの、目方のある對象物である。コップは、紙押えとしても、また捕へた蝶を容れる容器としても、役に立つことができるし、それはまた水を飲むために使用されるときか、ガラス製であるとか、その形態が圓筒形もしくはその他のものであるとか等々のことから全く獨立して、藝術的彫刻もしくは繪畫のついでゐる物體として價をもつこともできる。……學校で吾々がそれに止つてゐるところの（そして——附け加へておくが——下級のクラスではそれに止まらざるをえないところの）形式論理は、形式的の諸定義を取り上げ、最も廣く使用されるもの・もしくは最も頻繁に目につくもの・によつて導かれ且つこれに止まつてしまふのである。もし吾々がその際二つもしくはそれ以上の種々なる定義を取つて、これを偶然的に統一するならば、（圓筒形と水を飲む道具）、吾々は、對象物の若干の方面を示すところの折衷主義的定義を得るが、しかしそれは、それ以上何物でもない。辯證法的論理は、吾々が更に前進することを要求する。對象を現實的に認識するためには、人はそのあらゆる方面・あらゆる聯絡および「媒介」を把握し探究せねばならぬ。吾々は決してこれを完全に果しはしないであらう、しかし全面性の要求は、誤謬と硬化とに對して吾々を守



る。』(河上譯『事項別レーニン選集、第一分冊、一〇三—一四頁)。  
 問題は極めて明白である。形式論理は、『下級のクラスはそれに止まらざるをえないところの』初歩の論理であり、辯證法的論理に比較すれば、より低級な・より不完全な論理である。それは一定の限界内で妥當性を有するに止まる。それゆゑに辯證法は、——土方教授の引用されてゐるブレハールノフの言葉にある通り、——『形式論理を排除するものではなく、たゞ形而上學がその法則に賦與する絶對的妥當性を排除するにすぎぬ』のである。

例へば、日本人は人種的に西洋人に劣るといふ一方的な立言は、長掌筋といふ一つの方面に關するかぎりにおいては妥當するのであり、また日本人は西洋人に優るといふ同じやうに一方的な他の立言も、長蹠筋といふ他の一方面に關するかぎりにおいては妥當する。また例へば、初等數學(すなはち下級のクラスにおける數學)にあつては、直線と曲線とは決して同一でありえない。對立物の同一性は、ここでは問題にならぬ。しかしながら『微分學は、人間の常識のあらゆる抗議にも拘らず、直線と曲線とは一定の状態のものであるとする。しかもそれによつて、直線と曲線とを同一なりとすることを矛盾だと固執する人間の常識が、決して成就することのできない結果を、成就するのである。』(『反フェーリング論』、河野・林兩氏譯本、一八六頁)。  
 部分的な一面的な認識も、一定の限度内においては、それ相應に役立つ。如何なる曲線も、

その一小部分を切り取つて見れば、常に一の直線である。だから例へば、地球は一個の圓球であるとしても、吾々が小さな地面の上に家を建てようとする場合には、その地面を平面だと看做して差支ない。けれども、そのことのために地球は扁平であると主張するものがあれば、吾々はそれを看做して『樹を見て森を見ざる漢』<sup>ヤフウラ</sup>といふのである。

だから形式論理を『嚴守』するといふことは、初等的な智識を嚴守するといふことである。かくてそれはより基本的な法則に眼をふさぐといふ結果を齎らす。例へば茲に一本の絲があつて、その一端は赤色であり、中央に近づくに従つて次第に紫色<sup>むらさき</sup>となり、逆に他端に近づくに従つて次第に青色となると假定する。この場合に、もし人がその絲の極めて僅な部分のみを次ぎ次ぎに見てゆくならば、彼れは前後を通じて全く色の變化を看取しえないであらう。それと同じやうに、社會の運動(變動)過程も、これを寸斷して局部的にのみ觀察するならば、社會は靜止してゐるかに見えもするであらう。かくて一切の變化と變動とは、完全に吾々の認識の外に逸脱し去る。私は先きに言つた『社會は動く、現代社會は今まさに大に動かんとしてゐる』と。だが斯かる運動を觀念的に否認することのうちに、正にブルジョアジーの空論的代辯者たちにとつての任務が存在するのであり、それゆゑにこそ彼等は、如何にしても初等論理を『嚴守』せざるをえないのであり、しかもまた正にそのことのうちに、經濟學は、それがブル



デオア的であるかぎり、言ひ換へれば現代の資本家的社會の永久的存續をその神聖なる（これに觸れることは××に値するところの）理論的前提となしてゐるかぎり、到底科學として發展しえないといふ理由が、含まれてゐるのである。

事情は此の如くであるから、苟くもブルジョアジーへの御奉公のため熱意を有する學者は、その仕事のひとつとして、辯證法を——このブルジョアジーにとつての一の××であり××である辯證法を——××の××から蔽ひかくさねばならぬのである。だがそれは、初等數學の智識をもつて高等數學を排撃し、あるひは大學の構内の地面が扁平であるといふ事實をもつて、地球が球體をなしてゐるといふことを、否認せんとするのと同じで、全く無理な藝當であるから、あなたの見られる通り、土方教授の學才をもつてしても、實際のところ甚だみじめな議論をするより外、致方がないのである。（一九二九年—昭和四年—四月號『改造』所載）

『東京帝國大學教授土方成美氏は、日本の經濟學界における第一の勇者である。氏はしばしば極めて不用意なる準備のもとに、マルクス主義の排撃に突進され、その度毎に、至極の勇者でなければできない藝當を、吾々の眼前で演出される。』本誌『改造』前號において私は斯様に述べた。そしてその證據の一つとして、氏の近業『經濟學總論』中の唯物辯證法に關する氏の批

判に對し、私は若干の評言を加へておいた。しかるに氏は、かゝる證據を更に追加せんと欲するものなるかの如く、本誌の前號と同時に發行された『中央公論』の卷頭に、『經濟學と辯證法』と題する論文を公けにされた。レーニンの言ふところによれば、特殊な事實の研究に關しては如何に價值ある業績を擧げうる經濟學の教授でも、彼れが一たび經濟學の一般理論に普及するならば、吾々はたゞの一語だも信じてはならぬ。また特殊の領域においては如何に價值ある業績を提供しうる自然科學の教授連でも、もし問題が哲學に關することであつたなら、吾々は彼等の言ふことをたゞの一語だも信じてはならぬ。ところで土方成美氏は、ともかく經濟學の教授であるに相違なく、そして今ともかく哲學について語つてゐるのである。だからもしレーニンの言ふところが正しければ、それは如何なる方面から見ても、たゞの一語だに信じてはならない筈のものである。現に氏自身も、『要するに辯證法そのものについては、始めに斷つた如く、これを根本的に批判するつもりもなければ、能力のないことを、卒直に告白しなければならぬ』ことを、繰り返し述べられてゐるのであり、あるひはそのことを證明するため、に斯かる論文を發表されたものかとも思はれるが、事の序ゆゑ、少しくそれに觸れておかう。ブルジョア學者たちが——永年哲學を專攻せる者でも——眞に辯證法を把握することができないのは、彼等が觀念論の立場に立つてゐるからである。これが彼等の根本的な病源である。



土方氏は先づその論文の冒頭に次の如く言つてゐられる。『辯證法の特徴は、その綜合性、絶對否定性、實在性、等々であると言はれてゐる。以下において、これらの特徴が果して辯證法のみ固有なるものであるかが、よしこれらが辯證法のみ固有なるものであるとしても、これを具體的なる經濟現象へ適用することによつて、どれだけ吾人の經濟の理解を深めるであらうか。特にこの後者の問題を以下において考へて見よう。』これが氏の自分に課した問題である。そして此の如き問題の提出の仕方それ自身によつて、氏は先づ辯證法に對する自己の無智を表白してゐられる。私はデューリングを批評したエンゲルスの言葉を引かう。

『彼れにあつては、外界からでなく・思惟から・導かれた形式的な諸原理が問題なのであり、それらの諸原理は自然および人間の領域に適用さるべきものであり、従つて自然および人間はそれらの諸原理に従ふべきものである。だが思惟は何處からこれらの原理を取り來たるか？ それ自身からか？ 否な……こゝでは存在の・外界の・諸形態が問題なのだ、思惟はこれらの諸形態を決してそれ自身からではなく、全く外界からのみ、汲み取り導き出しうるのである。だが、さうだとすると、全關係は「デューリングが考へてゐるのと」逆になる。

諸原理は研究の出發點ではなく、その終局的產物である。それらは自然および人類史の上に適用されるのではなく、むしろ自然および人類史から抽出されるのである。自然や人類世界

が諸原理に従ふのではなく、むしろ諸原理は、それらが自然および歴史と一致するかぎりにおいてのみ、正しいのである。』（エンゲルス『反デューリング論』、ドイツ本、二二頁）。

土方氏は、辯證法を『經濟現象へ適用することによつて、どれだけ吾々の理解を深めるであらうか』を、その問題とされてゐる。だが辯證法は、元來、土方氏の理解されるが如き意味において現象の上に適用されるものではなく、むしろ現象から抽出されるものである。氏は辯證法的把握の高唱が『やゝもすれば人々をして徒なる混迷に陥らしめる虞なしとしない』と言つてゐられるが、實際のところ氏は、立論の最初から『徒なる混迷』に陥つてゐるのである。分かり易くするために、私は前に掲げた軟部人類學の問題を、重ねて茲に引用しよう。例へば吾々が、長掌筋に關して日本人は西洋人に劣つてゐるといふ命題に對し、長掌筋に關しては日本人は西洋人に優れてゐるといふところの、前の命題と矛盾する。他の一命題を對立せしめうるのは、數多き屍體について吾々が實際の研究をなし終へた結果にすぎない。だから假に、その掌筋に關して日本人は西洋人に劣つてゐるといふことが、先づ既知の知識であるとしても、その場合吾々は、矛盾の論理を『適用』することにより、既知の命題に矛盾する命題もまた正しからうといふ風に、たゞ頭の中での推理をもつて、長掌筋に關しては日本人の方が優れてゐるといふ第二の命題を案出し得るのではない。辯證法は客觀世界の論理である。それは客觀世界



からのみ『汲み取り』『導き出し』『抽象し』うるものであつて、逆に客観世界へ『適用』さるべきものではない。土方氏にしてこの事を理解されざるかぎり、氏はいつまでも際限なく『素朴なる疑問』を開陳（氏自身の言葉を借用）することに没頭されざるをえないであらう。だが私は氏の提供された素朴なる二三の疑問について、順次に數言を費さう。

氏はその論文の第一節で次ぎの如く言はれてゐる。

『綜合性といふことが論理の本質に基くものであるとすれば、甲は甲であつて、非甲ではない。AはAである、Aは非Aではないといふ自同律、矛盾律といふが如きものも、同一の平面に於て廢棄されるのではなくして、たゞ一層高き平面に於て、低次の平面における矛盾對立が反對對立に代るのであるといふ、田邊博士の所説が正しいやうに私には思はれる。或物が夜白く見へ、晝は黄色に見へるとき、同時に此物は白い、黄色いといへば矛盾である。即ち同じ夜ならば夜に於て同時に此二つの述語を主語について定立すればそれはたしかに矛盾であるが、夜と晝とを含む立場に立つて見れば、此者は夜は白く見え晝は黄色いといふことは何等矛盾でないやうである』（以上氏の文章をすべてそのまゝに引用す。——河上）。氏がこゝに提供せんとしてゐられる『素朴なる質問』が何であるかは、ちよと分かりにくい。

しかしそれは恐らくこゝういふのであらう。

『甲は非甲である』といふことは、同一の平面では、矛盾であつて成立しえない。だが、より高き平面に立つて見れば、『甲は非甲である』といふことも、矛盾にあらざるものとして成立しうる。例へば或る物は白くて同時に黄色いといへば矛盾であるが、その物は夜は白く晝は黄色いといへば矛盾でない。すなはち矛盾の論理における二個の立言は、『その行はれる平面が異なると思へば、それで困難がないやうに思はれる。』自分は辯證法における矛盾を斯様に解する。此の如きが氏のこゝに主張せんとするところであらう。

氏はしきりに矛盾を恐れてゐる。だが、すでに述べたやうに、一切の事物は矛盾に満ちたる構成成分から成り立つてゐる。言ひ換へれば、對立物の統一は、自然・社會・および思惟・の一切を通じての、極度に一般的な法則であり、自然および社會それ自身がすべて對立物によつて構成されてゐるがゆゑに、それはまた、かゝる客観世界の吾々の頭腦における反映としての、思惟の法則となつてゐるのである。だから、より精密に考察すれば、『辯證法一般は人間の認識に固有なもの』であり、吾々は『あらゆる任意の定言のうちに、辯證法の一切の要素の胚種を發見しうる。』

『例へば、木の葉は青いか、ヨハン是人であるとか、スピッツは犬であるとかいふ如き、任



意の定言をもつて始めたとする。さうしたならば、すでにこゝに（ヘーゲルが天才的に認識した如く）、吾々は、個別的なものは普遍的なものであるといふ・一つの辯證法をもつ』（レーニン）。この場合、ヨハンは一人の人にすぎない、彼れ以外になほ多くの人がゐる。またスピッツはボメラニアン種の犬にすぎない、それ以外になほ多くの種類の犬がゐる。だからヨハンは個別であり、人は普遍である。スピッツもまた個別であり犬は普遍である。従つてヨハンは人であるといひ、スピッツは犬であるといふのは、個別的なるものが普遍的なるもの（それは個別的なるものの反対物）であるといふことであり、それは取りも直さず、甲は非甲であるといふのである。かくて如何なる任意の定言のうちにも、（もしそれが無内容なる同義反覆でなければ）、土方氏の最も恐れられる矛盾が常に含まれてゐるのである。土方氏によれば、或る物が白くて同時に黄色いといへば矛盾だが、たゞ或る物は白いか、また或る物は黄色いかいふやうな、一つ一つの命題には少しも矛盾が含まれてゐない、といふのである。だが、より立ち入つて考察すれば、紙は白いといふやうな簡単な立言でも、實は矛盾に充ちてゐるのである。何故といふに、白い物は紙以外に澤山あるのだから、卷II 四〇番では無い。しかも吾々は、紙は白いといひ、紙は白い物であるといふ。この場合吾々は、紙と白い物を同一視すると同時に、またこの兩者を區別し對立せしめてゐるのであり、そこに對立物の統一または同一性を

表現してゐるのである。土方氏が如何に頑強に抵抗されても、何等かの内容をもつた立言をなさんとする場合、自分自身がかゝる對立物の統一をなさざるをえないであらう。問題はたゞそれを意識すると否とに存する。

次ぎには土方氏がその論文の第二節以下第五節にわたつて取扱つてゐられる發展の法則、否定の否定、等について一言しておかう。

氏はこゝで、京都帝國大學教授田邊元氏が『哲學研究』（昭和二年三月號以下）に連載された『辯證法の論理』を、唯一の力杖ちからづえにしてゐられる。氏は田邊氏の論文の一節を引用したのち、『かくして博士（田邊元氏）は、辯證法の妥當する領域を、精神生活・意志生活の領域に限定』せられると言つてゐる。土方氏によれば、これは哲學專攻者の言ふところであるから間違はない。そこで、此の如く『精神生活の領域に限定』された辯證法は、果して經濟の領域にまで、『適用』されうるかが氏のために次いで起る問題となる。そしてこの問題には、經濟學の專攻者たる土方氏自身が答へよう、といふのである。

だが、たとひ一般に信用の厚き哲學の專攻者であつても、また個人的にはよくその人柄を知つてゐるにしても、私は先づ田邊氏を哲學者としては無條件的に信用することができない。一



切のブルジョアの哲學教授と同じやうに、氏にして飽くまでも觀念論の城壁内に閉ぢこもつてゐられるかぎり、氏はまた到底、ヘーゲルの辯證法に付き纏つてゐる觀念的な外皮を突き破つて、そのなかに含まれてゐる合理的な核心を把握することに、成功されはしないであらう。土方氏の引用文の一部を引用すれば、次ぎの如く言つてゐられる。

『今平面上に原點Oをとり、これを判斷の起點乃至立場と想像する。このOから一點Aに至る距離OAを+Aで表はし、これが一の定立を代表するとする。この定立肯定においては、+Aの意味は完全に限定せられ、何等の不定を残さないと考へて置かう。さてこれだけの豫想の下に、もし否定すなはち反定立が必然に-Aを意味するならば、否定は肯定と同じく完全に規定されたものであらう。何となれば、-OAすなはちOAと反對の方向にOAの長さに等しい距離を計つた-OAは、如何なる意味においてもその規定が+AすなはちOAに劣るところはないからである。私はこのやうな完全に相對應しつゝたゞその方向の反對なる如き一對のものの對立を、假に雙關的對立性と呼ぼうと思ふ。辯證法は否定を肯定に對してかかる雙關的對立に立つものと考へ、それによつて反定立の定立に少しも劣るところなき積極的想定を有することを主張しようとするものである。……』

『それでは斯かる雙關的對立性の範圍は如何なるものであらうか。私はこれが意識であると

思ふ。……意志の形態を外にしては、雙關的對立性の成立する地盤はないと思はれる。』

かくて氏は、『概念は「現實の生ける魂」と呼ばれるのであるが、その謂はゆる現實とは、精神生活の直接なる體驗内容を指すことは、疑ひない』といひ、あるひは『かくて私は、辯證法が單に純粹論理の立場で成立するものでなくして、具體的なる意志の體驗に基づく精神生活の論理に外ならざること、一般的に結論しうと思ふ』といつてゐられる。『哲學研究』一三六號、二七、二六頁。』

此の如く辯證法をもつて『精神生活の論理』となすこと、そこに觀念論的な根本誤謬が横たはる。辯證法は精神生活の論理ではない、それは客觀世界の論理である。たゞ客觀世界が辯證法的に構成されてゐるがゆゑに、その客觀世界の人間的頭腦への反映としての、人間の精神生活もまた、辯證法的に構成されてゐるのである。辯證法の地盤は物質そのものに存するのである。例へば商品を取つて見やう。商品の形態は二重である。商品は先づ使用價值としての形態を有する。商品といふ以上、何等かの種類の人間の欲望を充足するものでなければならず、従つて種々なる種類の商品は、種々なる種類の欲望を充足するために、互にその使用價值としての形態を異にする。米、酒、煙草、織物、机、紙、等々、あらゆる種類の商品は、一として全くその形態を同じくするものはない。なほ商品は、かゝる使用價值としての形態の外に、商品價



値としての形態——交換價值——を有する。例へば、米一石の交換價值は金何圓であり、また煙草一箱の交換價值は金何圓であるやうに、如何なる商品もみな一定の代價を有する。ところで諸商品の交換價值は、それらのものの使用價值が互にその品質を異にするのと正反對に、完全にその品質を同じくする。ブルジョアの細君の指に光つてゐるダイヤモンドも金何萬圓であり、プロレタリアが足にはいてゐる靴も金何圓である。かくて一個のダイヤモンドの交換價值も、一足の靴の交換價值も、たゞその分量を異にするだけで、品質においては全く同じである。かゝる意味において、諸商品の使用價值と交換價值とは互に對立してゐる。言ひ換へれば商品なる統一物は、使用價值および商品價值（その現象形態は交換價值）なる對立物によつて構成されてゐるのである。この場合吾々は、現實における商品を分析するがゆゑに、使用價值の對立物として商品價值（または簡單に價值）を發見するのである。かゝる『對立性の成立する地盤』は、『意志の形相』でも何んでもなく、外的現象としての商品である。

更に商品の交換について見るに、これをその純粹な姿において觀察するかぎり、その販賣者と購買者とは、『自由なる・法律上對等なる・人格者として契約を結び』、相互に等價物を交換するといふ平等關係に立つてゐる。だが一たび勞働力が商品として賣買されることになれば、その販賣者は購買者によつて剩餘勞働を搾取される關係に立つことになる。かくて平等關係は

搾取關係に轉化し、簡單なる商品生産は資本家的商品生産に轉化する。すなはちこの場合、簡單なる商品生産の否定として生まれるものは、資本家的生産である。ところで、この簡單なる商品生産と資本家的生産との『對立性の成立する地盤』も、やはり『意志の形相』でも何んでもなく、現實における商品生産の發展の歴史そのものである。それは恰も、麥粒の否定として植物としての麥が生まれることが、全く人間の意志から獨立した外的世界の屬性に基づくのと何の變りもない。辯證法が『現實の生ける魂』を形成してゐるとは、現實そのものが辯證法的に構成されてゐるといふことである。現實とは現實である、それは一切の現實を含む。『謂はゆる現實とは精神生活の直接なる體驗内容を指す』といふが如きは、一の觀念論的な幻想である。

翻つて哲學者田邊氏を典據とせる經濟學者土方氏を見よう。『田邊博士の所說に従つて』辯證法の『經濟への適用の價值』を決定しようとする氏は、例へば次ぎの如きことを言つてゐるに止まる。

『なるほど意志の世界において、或事の否定は、一の積極的内容を持つといへるであらう。「密柑を欲しない」といふことは、「密柑を欲する」といふことと、同じく積極的内容を持ち、

茲に田邊博士の謂はゆる雙關的對立が可能になるやうである。然るに、「密柑を欲しない」







を支持せんとするかぎり、非合法政黨を支持することを欲しないならば、合法政黨を支持することを欲するの外ない。また吾々がブルジョアの大政黨を支持せんとするかぎり、政友會を欲しないならば、民政黨を欲するの外ない。更に吾々が社會民主主義者の黨を支持せんとするかぎり、若干の地方政黨を除いた以外では、右翼的社會民主主義の黨たる社會民衆黨を欲するか、しからずば左翼的社會民主主義の黨たる日本大衆黨を欲するの外ない。土方氏自身も、例へば選挙の際などには、何黨を欲しないことが何黨を欲することを意味するかを、それこそ『具體的なる意志の體驗に基づく精神生活の論理』によつて、明白に理解されることができよう。土方氏は更に机の否定として何が生まれるかといふやうなことで問題にしてゐられるが、これも例へば日本現在の商品世界について見れば、机と競争の地位に立つてゐるものはテーブルであるから、もし机が完全に否定されたならば、何人の書齋にもその代りにテーブルが生まれるといふことが、發見されうであらう。

さて以上の簡單なる批判によつても、辯證法を『根本的に批判する能力のないことを』土方氏自らが『卒直に告白しなければならぬ』ことが、よく分かるであらう。氏の意識しつゝある『覆ふべくもなき科學的無力』の感じは、その論文の各行毎にあらはとなつてゐる。しかも氏は、敢てブルジョアジの『空論的代辯者』たる地位を辱しめざらんがために、勇敢にも引續

き斯かる論文を公けにされつゝある。一般的理論の領域を避けて、特殊的な領域における事實的研究に籠城せざるかぎり、ブルジョア經濟學者は、氣の毒ながら今や斯かる難事業を擔當することを、餘儀なくされつゝあるのである。(一九二九年—昭和四年—五月發行『改造』掲載)



## マルクス主義經濟學のために

——土方教授の謂はゆる『盲信的マルクス主義の克服』について——

日本におけるマルクス經濟學は、今年一年その地歩を確立し、益々その勢力を擴大しつつある、それと同時に、何等學問的理由を明示することなき無理解なる排斥、無責任なる罵詈雑言は、學者の間においてすら、却つて漸く烈しからんとしてゐる。マルクス經濟學はこれを理論的に攻撃すべく餘りに有力であるといふことが、今や一部の人々の意識に上ほりつゝある。理論上の論争に代ふるに、吾々を指して漫にマルクス狂信者と呼ばはるが如き行爲の、漸く盛んならんとするは、一派の人々の科學的無力の感じが自然に誘發する現象である。かゝる現象は近頃經濟學全集刊行の計畫行はるゝに及んで、特に甚しきを見る。現に教授土方博士の如きは、『こゝ數年來我國の讀書界はマルクス學說の洪水であつた、その結果かの忌むべき共產黨事件を生んだのである』と宣言されるに至つた。此の如きは、これを單なる一時の商略に出でたるものと解釋せざるかぎり——かく解釋することは大學教授としての氏に對して恐らく無禮であらう、——共產黨事件に關する一般民衆の漠然たる恐怖を利用してマルクス學の普及を妨害せんとす

る意圖に出でたるものと解釋するの外ない。今は吾々がマルクス經濟學の根本的見地、その窮極目的、その傾向を、世間に向つて忌憚なく發表し、これをもつてかのマルクス經濟學の妖怪談に對立せしむべき hohe Zeit である。私はその目的のために、日本におけるマルクス學徒の一人として、こゝにこの一文を公けにする。

マルクス經濟學は辯證法をその研究法としてゐる。そして辯證法は、マルクス自身の言葉によれば、『現存事物の肯定的理解のうち、同時に、またその否定の・その必然的没落の・理解を含め、あらゆる生成した形態を運動の流れにおいて・それゆゑにまたその暫時的な方面から把握し、何物によつても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり革命的なものである。』

辯證法の光に照されるときは、如何なるものも常住不壞の相を失ひ、萬物はたゞ流轉の姿においてのみ現はれる。『その前には窮極的なるもの、絶對的なるもの、神聖なるものは、何物も存立しない。それは一切のものに消滅性を呈示する、そしてその前に存立するものは、生成と衰滅との低きより高きに向ふ限りなき向上の・不斷の過程の外に何物もない。』(エンゲルス) 『つぎからつぎへと續く一切の歴史的状態は低きより高きに向ふ人間社會の限りなき發展の道程における暫時的な段階にすぎぬ。各々の段階は必然的なものである、すなはちこれを發生せしめたる時代と諸條件とに對しては存在理由を有つてゐる、だがその段階自身の胎内で漸次に



發展してくる新たなるより高級なる諸條件に對しては、根據がなくなり存在理由を有たぬものになる。それより高級な段階に席を譲らねばならぬが、今度はまた後のものが衰頹没落の順番となる。』(エンゲルス)

資本家的社會をその研究對象となせるマルクスの經濟學は、それゆゑに、資本家的社會の『肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定の・その必然的没落の・理解を含め』てゐる。この社會形態は、これを發生せしめた時代と諸條件とに對しては存在理由を有つてゐたのであり、しかる限りにおいてそれは必然的なものであつた。だが資本家的社會の胎内において急速なる發展を遂げつゝある生産諸力は、次第にその外被たる資本家的生産諸關係と衝突することになる。私がマルクスに倣うて、近業『經濟學大綱』上卷『資本家的社會の解剖』第二篇の末尾において指摘したる・過剰人口の増大ならびに之に伴ふ大衆窮乏化の増進は、その半面の兆候であり、また第三篇の末尾において指摘したる・資本家的生産の行詰りならびに之に伴ふ世界恐慌と世界戰爭との脅迫は、他の半面の兆候である。これらは何れも資本家的生産諸關係の埒内における生産諸力の發展が必然的に齎らす災害であり、現存せる生産諸關係がすでにその存在理由を失へることの證據である。なほ私は第四篇の末尾において、社會の總資本が極めて少數なる金融大資本家の手に集中されつゝあるの事實を指摘した。このことは、新たなる社會形態

を生むべき物質的諸條件が、現存諸關係それ自身の胎内において次第に成熟しつゝあることを意味する。こゝにおいてか資本家的社會の運動の必然的な方向は、極めて明瞭である。生あるものは死を免れない。吾々は現存事態の絶對性・永遠性を信じ能はざるものである。かくて吾々は、現存せる社會形態を『運動の流れにおいて・それゆゑにまたその暫時的の方面から・把握する』のである。

かゝる見地が『何物によつても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり革命的である』ことは、もちろん『ブルジョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の苦悶であり、恐怖である。』吾々は敢てこのことを公衆の前に隠覆せんとするものではない。だがブルジョアジーにとつての苦悶と恐怖とは、プロレタリアートにとつての希望と歡喜とである。吾々は何故に斯く言ふか？

世間には吾々を指して無批判的だと言ふものがある。だが人々は眞の批判とは果して何を意味するかを理解してゐるのであるか？ それは顧慮なき批判の謂ひであり、そして『顧慮なき』(unbesorgt)とは、『批判が如何なる結論を生ずるも敢て怖るゝことなく、また現存せる諸權力との衝突をも敢て怖るゝことなき謂ひである。』しかも此の如き批判は、『窮極的なもの、絶對的なもの、神聖なもの』一切を認めざる辯證法のみが、成し遂げ得るところで



ある。批判は『顧慮なき』精神によつてのみ始めて行はれ、科學は『何物によつても畏伏せしめられざる』ところのみ始めて成り立つ。

吾々の稱してブルジョア經濟學となすものは、『資本家的秩序を歴史的な過渡的な發展段階としてでなく・逆にこれを社會的生産の絶對的な且つ終局的な姿として・理解してゐる』ものを指すのであるが、『それはたゞ、階級闘争が潜在状態に止まつてゐるか、あるひは、たゞ孤立した現象となつて顯はれてゐる間だけ、科學として止まりうるにすぎなかつた。』

幾多の功績を残したイギリスの正統派經濟學は、『未發展なる階級闘争の時代に屬する。』この派の最良の代表者たるアダム・スミスおよびリカードウは、階級闘争の未發展なる時代に生存したるがゆゑに、彼等は資本家的社會の××を憂ふる必要がなかつたのである。それゆゑに彼等は何等恐るるところなく、資本家的社會に向つて『顧慮なき』批判を加へたのであり、従つてまた一定の科學的業績を擧げえたのである。しかしながら、一たび階級闘争が脅迫的な姿をもつて社會の表面に現はれるやうになつてからは、資本家的社會の絶對的永遠性に對する信仰が動搖し始めた。それと同時に、これに對する『顧慮なき』批判は、ブルジョアジーにとつての恐怖とならざるをえなくなつた。かくて經濟學は、それが資本家的社會を『社會的生産の絶對的な且つ終局的な姿』として辯護することを目的とするかぎり、言ひ換へれば、それが

ブルジョアジーの好感と保護とを必要とするかぎり、その『獨創的な繼續的發達は一切不可能となつた。』だが、『たゞその批判に至つては然らず。』かくてブルジョアジーの一切の利害に顧慮するところなき、プロレタリア經濟學としてのマルクス經濟學が、ブルジョア經濟學との對立において、『何物によつても××せしめられざる』批判的精神の守護者となつたのである。それは現存せる社會形態を『社會的生産の絶對的な且つ終局的な姿』として認めず、逆にこれを『運動の流れにおいて、それゆゑにまたその暫時的方面から』把握することによつて、正にブルジョア經濟學に對立する。

それは何故に革命的であるか？ 私は拙著『マルクス主義經濟學』から、次の數節をこゝに引用する。

吾々は自然現象についても社會現象についても、屢々事物の本質を倒さまに錯覺してゐる。科學はかゝる錯覺を顛倒する點において、すべて革命的である。地球が動くのではなく太陽が動くのだと考へてゐるのを、倒さまにひっくり返へして、太陽が動くのではなく地球が動くのだと認識せしめることは、一の革命的な仕事である。マルクスが經濟學の領域において成し遂げたところもすべて斯る×××な仕事であるが、なかんづく現存せる社會形態の不動觀を顛覆したことはその最も革命的な業績に屬する。



『資本論』の『最後の窮極目的』はマルクス自身のいへる如く、『近代社會（すなはち資本家的社會）の經濟的運動法則の暴露』にある。こゝに近代社會の經濟的運動法則といふは、例へば地球の運動法則といふが如きものである。人々は嘗て、自分らがその上に住んでゐるこの地球を、世界の不動の中心だと考へてゐたのであるが、宇宙物理學は、その地球が實に一秒間に二萬九千七百メートルの急速度をもつて運動しつゝあることを、科學的に立證した。それと同じやうに、人々は自分らがその中に住んでゐる現代の社會組織を永久的に變更されえぬものと諦めてゐるのであるが、『資本論』は、この不動に見えてゐるものが、實は動き得るのであり、現に動きつゝあることを教へる。それは虐けられたるものを彼等の錯覺にもとづく宿命的な諦めから呼びさまし、彼等に向つてその困厄の眞因を暴露し、且つ斯かる原因の排除の可能と道程とを指し示し、彼等に自己解放の希望と指針とを授けるところのプロレタリアにとつて最上の親友である。そこからはプロレタリアのみが、つきせぬ希望と歡喜とを酌みとりうるであらう。

それと同時に、それは『ブルジョアジーおよびその空論的代辯者たちにとつて、一の苦悶であり恐怖であり』、その最惡の敵である。けだし既成の諸權力は、いつも民衆の錯覺を——事

物の眞相を逆に考へてゐる大衆の錯覺——を利用してゐるのであり、従つてそれを維持し助長することに最大の關心を有つ。それゆゑにあらゆる教化の機關は、——學校、青年團、寺院、新聞紙、雜誌、著書、等々は、——それが既成諸權力の支配下に屬するものであるかぎり、社會の隅々において悉くこの目的のために動員される。階級闘争が激烈になればなるほど、かゝる目的のためにそれらの機關が利用されてゐるといふことは、現象形態の上にも露出するやうになる。しかも斯かる舊勢力の意圖に對する最も有力なる妨害物は、新興科學である。それゆゑに、新興科學は強大なる既成諸權力との闘争においてのみ、始めて自らを發展せしめうる。太陽が動くのではなく地球が動くのだといふことを主張してすら、昔の學者は牢獄に投ぜられた。しからば同じことを、社會現象の領域において——成し遂げんとするものが、既成諸權力ならびにその雇人たちの非難、中傷、妨害、壓迫、等々の砲火のもとに曝らされねばならぬことは當然のことであり、覺悟の前のごとでなければならぬ。『顧慮なき批判』が『諸權力との衝突を敢て怖れざること』を必須の條件とするは、そのためである。『自由なる科學的研究は』、——マルクスの言ふ如く、——『經濟學の領域においては、他の總ての領域における同一の敵に出逢ふのみではない。經濟學の取扱ふ材料の特殊な性質のために、人間の心の最も激しい最も狭量な・最も意地悪き情念が、私的利益のフリー——神が、經濟學の敵として戰場に呼び立



てられる。』吾々は現に眼の前において、斯かる敵の今正に戰場に呼び立てられつゝあるを見る。かくて新興科學は、既成の諸權力にとつて其の最悪の敵であると同時に、既成の諸權力はまた、新興科學にとつて其の最悪の敵である。

プロレタリア經濟學は、たゞに上記の敵と戦はねばならぬのみならず、また大衆の常識を敵として戦はねばならぬ。本來それは大衆の生活安定を目指してゐるのであり、實際は大衆のための親友であるにも拘はらず、最初のうちは必ず大衆によつて反撥される。此の如きは、あらゆる新興科學の古來の宿命として、プロレタリア經濟學のまた免れ難きところである。

むかしコペルニクスは、大地が世界の不動の中心にあらざることを説いて、常識に一大打撃を與へたと同時に、何故に大地は不動に見ゆるかをも説明したのであるが、マルクスが經濟學の領域において成し遂げたところも、また正に此の如きものであつた。吾々は『資本論』の隨所において、かくの如きコペルニクスの轉回を見出すのであるが、なかなづく根本的な轉回の一つとしては、前に述べたる如く、現代社會それ自體の運動觀を指摘せねばならぬ。普通には誰でもが太陽は東の空から出て西の空に没するものと考へてゐる。たゞ眼で見たまゝでは實際さう考へるのが自然であり、それが謂はゆる常識である。ところでこの常識が、いつもそのまゝで眞實であるならば、別にこれに向つて科學的研究を加ふる必要はない。『もし現象形態と

事實の本質とが直接に一致してゐるなら、すべての科學は贅物であらう。』たゞ兩者は屢々直接には一致してないがゆゑに、始めて科學の必要が起るのである。そこで例へば、吾々の眼には地球が動くのではなく太陽が動くのであるかの如く見えてゐる(それが現象形態である)、けれども、しかし實際のところは、それと全く逆で、太陽が動くのではなく地球が動くのである(それが事物の本質である)といふことを、説明するといふことが必要なばかりでなく、それと同時に、なぜ斯様に本當のことが吾々の眼には顛倒して反映されるかをも明かにしなければならぬものであり(それが現象形態と本質との辯證法的統一である)、そして斯かる仕事を果すことをこそ、科學はその任務となすのである。

だから科學はいつも常識と相容れない。科學は常識を打破せんとするものであり、またそれゆゑに必ず常識から反撥される。大衆の常識に訴へてその聲援を求めんとすることが、學者として如何にその本分を忘れたる陋態であるかは、これによつて理解されるべきである。科學の常識に對する闘争は、その成立・發展の歴史に伴ふ宿命であり、俗人との闘争は科學者の任務であり、かかる對立物の闘争の過程においてのみ、人類の認識は發展するのである。そして、この闘争において科學的知識が勝利を占むるならば、常識は科學的知識のために克服されるが、それは同時に科學的知識が常識そのものに轉化することに外ならぬのであり、かくして科學的



知識は遂に常識をそれ自身のうちに包容し、またはそれ自身が常識のうちに包容されて、自己を止揚（アウフヘーベン）するに至るのである。

事情此の如くであるに拘らず、たゞ一般の常識を學問的な言葉に翻譯するに止まるものを、吾々は俗流經濟學と名づける。それは、實のところ、科學たるの名に値せざるものである。吾は先きに、アダム・スミス、リカードウの正統派經濟學がブルジョア的であるに拘らず、なほ科學的でありえたのは、當時階級闘争が未發展の状態にあつたがためであるといふこと、ならびに一たび階級闘争があからさまな威嚇的な形態をとり來たるや、その瞬間に科學的ブルジョア經濟學の吊鐘が鳴り渡つたといふことを述べた。ブルジョア經濟學はもはや科學として止まりえなくなつたのである。資本家的なる社會形態の存続に對する威嚇が加はれば加はるほど、その維持に對する不安が増せば増すほど、資本家的社會の内的連絡の忌憚なき解剖、その本質的機構の顧慮なき暴露は、益々恐るべきものとなつた。従つて經濟學は、それがブルジョア的であるかぎり、言ひ換へれば、資本家的社會の永久的存続を『神聖なる』前提となすかぎり、たゞ社會の表面に浮動する現象形態を敘述するに止まるの外なくなつた。すべて常識は現象形態の無批判的なる攝取から成り立つ。それゆゑに單なる現象形態の敘述は、畢竟するに單なる

常識の羅列にすぎない。よく行つて、それはたかく、普通人の知らざる過去または現在の歴史的・統計的事實の蒐集・整理にすぎない。經濟學が、ブルジョア的であるかぎり、益々科學的に無力なものとなりつゝあるは、（そのことは現に吾々の目撃しつゝあるところであるが）全くこれがためである。そこには博識があつても經綸がない、事實の堆積があつても法則の啓示がない、人をして混沌たる表象のうちに溺れしめるのみで、吾々の住む現代社會が果して何處より來り、將に何處に往かんとするかを指示することができない。此の如きが俗流經濟學の特徴であり、そして階級闘争の尖鋭化する今日の時代にあつては、ブルジョア經濟學は、かゝるもの以外の何物ともなりえない。かくプロレタリア經濟學の對立物は、すなはちブルジョア經濟學であり、それは同時にまた俗流經濟學である。

すでに述べたる如く、吾々は常識と闘はねばならぬのであるから、またこの俗流經濟學と闘はねばならぬ。そしてこの闘争もまた困難である。

何故ならば、科學は常識を顛倒せんとするものであるがゆゑに、その説くところは直接的には常識と一致しない。常人の眼に映ずるところの現象形態は、微細にわたる科學的分析の長き道程を媒介としたる最後の結果として、始めて本質との連絡において説明されうる。従つて、これを學ばんとするものには、必ず多くの困難が課せられ、少なからざる忍耐が要求される。





殊に複雑極まれる現代社會の經濟的構造を説明せんとする經濟學にあつては、その研究材料の特殊性のために——化學的試薬も檢微鏡も利用され得ないといふことのために——吾々の頭腦の作用による抽象力を必要とすることが、極めて多い。これ『資本論』の第二章が、著者により出來うるかぎり分かり易く叙述したとされるに拘はらず、吾々の理解によつて最大の困難を呈するゆゑである。一言にしていへば學問が科學として止まるかぎり、それは科學であつて常識でないがゆゑに専門外の人々にとつて、その理解は必ず困難である。

それに反し、俗學者は常識そのものに單なる學問的扮装を施すにすぎざるがゆゑに、その説くところは極めて俚耳に入り易い。斯かる俗學者の著作を読む人々は、往々にして膝をたゞき『なるほど、これはおれが考へてゐる通りだ』と感歎しうる機會を有つてあらう。そこには、日々太陽は、あしたには東の空より出でゆふべには西の空に沈む、と書いてある。それは讀んで見ると直ぐに分かるのであり、(實は讀まぬ前から分つてゐることなのだが)、直ちに人々の同感を博しうるがゆゑに、それ自身は無力なものでありながら、しかも科學的知識の普及に向つて、實は少からざる妨害をなす。これ吾々が屢々俗流經濟學者に向つて憤怒の聲を發するゆゑである。

かくて新興經濟學は、少くともその勃興の初期に當つては、四面楚歌のうちに身を置き、八方の敵と不斷の闘争に従はねばならぬ。それは既成の諸權力にとつての危險物であるがゆゑに、これらの諸權力によつて彈壓される。吾々の偉大なる教師は、その著『政治經濟學批判』の序文の結語としてダンテ神曲地獄篇の句を引いてゐる。——

*Qui si convien lasciare ogni sospetto*

*Ogni viltà convien che qui sia morta*

〔こゝに一切の疑懼を棄てねばならぬ。〕

一切の怯懦がこゝに死なねばならぬ。〕

彼れは、『地獄への入口と同じやうに、科學への入口にも、かゝる要求が掲げられねばならぬ』といふのである。

他方において、新興經濟學は、それが最も忠實にその利害を代表してゐる大衆からも、最初は先づその常識によつて反撥される。大地は不動であると思ひ込んでゐる人々に向つては、それは間違であり、實際は一秒間に二萬九千七百メートルの急速度をもつて運動しつゝあるといふことは、決して容易ではない。先づ最初には、人々が吾々を捉へて一種の狂者であるとなすことは、むしろ自然である。一部の人々は、そこを狙うて、盛んに吾々をマルクス狂者となし



て非難するのである。

八方から敵を受けて——否な八方をも敵たらしむべく驅り立てて——困難なる闘争を戦ひつゝある新興科學の・科學としての・唯一の強味は、それが他の何れの學派よりも遙により近く眞理に位してゐることである。これは科學としてのその唯一の強味であるが、科學としてはまたそれ以上のものを必要とせざる充分の強味でもある。

吾々は人間の認識の發達に信賴する。吾々は眞理の結局における勝利を確信する。事物の眞相は、如何に隱蔽するとも、遂に暴露されるの目がある。如何に多くの人々が大地を世界の不動の中心であると主觀してゐても、地球自體はかゝる意識のために毫末も左右されることなく一秒間二萬九千七百メートルの速度に達する運動は、一瞬時といへども之を止めぬし、緩めもしない。たとひ學者を阮にし書を焼くとも、刑罰を加ふるもの自體が、地球とその運動を共にしつゝある。客觀的眞理の前には何人も膝まづかざるをえない。人が眞理のためには、死してなほ悔むざるの意氣を示すは、これがためである。新興經濟學はこの意氣に立つて闘ふ。

かゝる闘争の過程を通じて、それはやがてプロレタリアートの常識に轉化する。『もちろん批判の武器は武器の批判に代位することはできぬ、物質的權力は、物質的權力によつて顛覆されねばならぬ、だが理論は、それが大衆をつかむや否やまた物質的權力となる。』ブルジョア

經濟學者が、マルクス主義の普及の前に、戦慄を禁じ得ざるも、道理ではある。現に我が日本においてもかゝる物質的權力を代表するものとして、〇〇×××が、すでに公然、大衆の前に現はれる段階にまで進んだ。それは必然の軌道に載つてゐる。白色テロルのあらゆる威嚇にも拘らず、それは日を追うて大衆化されるであらう。

マルクス經濟學の研究法としての辯證法が、あらゆる既成の形態を運動の流において把握するといふことは、吾々の以上述べたるが如くである。ところで茲にいふ運動とは、自己運動のことである。吾々は更にそのことを明かにしよう。

けだし辯證法の光のもとにあつては、宇宙萬物の運動は、盡くそれ自身のうちに含める矛盾に充ちた・相互に排斥し合ふ・對立した諸傾向の闘争過程としての、自己運動である。そして運動を此く如きものとして把握する點に、辯證法の重要な一特徴が横たはるのである。

數學においては、正數および負數、微分および積分。

力學においては、作用および反作用。

物理學においては、陽電氣および陰電氣。

化學においては、アトムの場合および解離。

社會科學においては、階級闘争。



此の如く統一物を分解して、矛盾に充ちたるその構成成分を認識することが、吾々の科學的認識にとつて根本的に大切である。けだし矛盾は運動の唯一の母である。世界における一切の事物の變動と推移とは、たゞそれ自身うちに含める矛盾が生み出だすものとしてののみ、始めて根本的に理解されうる。何故なれば、かゝる見地のみが、事物の運行を、自發的なる『自己運動』として把握するのであるから。もし事物の運動がそれ自身に基づくものとしてでなしに、すなはち他に依存するものとして、——例へば神の意志、人間の精神、等々に依存するものとして説明されるに止まるならば、それが依存するところの他のものが更に説明されねばならぬ。しかるにその説明さるべき他のものが、また同じ仕方によつて説明されるに止まるならば、それは重ねて他に依存することとなり、かくて遂に際限なきに至るであらう。それは斷じて事物を根本的に理解する方法ではない。

それゆゑに吾々は、統一物を分解して、矛盾に充ちたる其の構成成分を認識することが、吾々の科學的認識にとつて根本的に大切である、といふのである。かゝる認識の仕方を離れて辯證法は成り立ちえない。そして、社會科學の領域にあつては、わがマルクス學こそ斯かる辯證法を最も嚴密にその方法となせる唯一のものである。

一切の社會諸現象の統一的なる根本的説明法としてマルクスの唯物史觀は、すべて人間社會

の歴史を、人間と自然といへる對立物の鬭争過程として把握する。それはまた、過去における經濟的社會組織の變動を、——大まかに言へば、古代共產社會より奴隸社會へ、奴隸社會より封建社會へ、封建社會より資本家的社會へ、等々の社會諸形態の推移を、——生産諸力と生産諸關係といへる對立物の鬭争過程として把握する。更に現代の資本家的社會に關するマルクスの經濟理論は使用價值および價值といへる對立物の鬭争過程として、かゝる社會の運動を、詳しく言へば、その成立、發展、および死と、他のより高級なる社會形態による之が代位とを、把握せんとしたものであり、それゆゑに『資本論』の劈頭は、資本家的社會の根本的構成成分たる商品の分析をもつて——商品のうちに含まれてゐる對立的な構成成分としての使用價值と價值との發見をもつて——その研究を出發せしめてゐる。そして『それより以上の叙述は、これらの矛盾の、およびその根本構成成分の總和として見たるかゝる社會の發展（成長および運動）を、始めより終りまで吾々に示現する』。それは *Omnis cellula e cellula*（細胞は細胞より生ず）といへる生物學上の原則があらゆる動植物の組織體を一の例外なしに説明すると同一の精確さをもつて、資本家的社會の細胞たる商品を根本の出發點となしつゝ、複雑極まれる現代社會の組織を系統的に説明する。その叙述が互に盡く必然的な連絡と順序とを保ちつゝ、最も捨象的な範疇から出發して次第に具象的な範疇に向つて、歩一歩づゝ向上するの偉觀に至つては、斯



學の領域において未だ曾てその比儔を見ざるところである。

以上の如く運動を一の自己運動として把握するの立場は、やがて『社會の經濟的構造の發展〔すなはち運動〕を一の自然史的過程として把握する』の立場である。そして斯かる立場の必然的な結果として、人間の社會的存在は全くその意識から獨立してゐるといふことが、明かにされる。

一例を貨幣に取らう。それは商品に内在する矛盾の解決のために生れたるところの・商品世界にとつての・一の必然的産物である。私はそのことを、近業『經濟學大綱』上卷『資本家的社會の解剖』第一篇第一章第三節において、出來うるかぎり平易に説明しておいた。今その概略を述べるならば、生産物が商品として生産される以上、それらのものは相互に交換されねばならぬのであるが、しかもそのためには、必ず一の矛盾にぶつかるのである。けだし各々の商品所有者は彼れの商品を他人の商品と交換しようとするのであるが、しかし他人の商品ならば如何なる種類のもでも可いといふのではなく、その使用價值が彼れの欲望を満足しうる如き商品と交換しようとするのである。それと同時に、彼れは、彼れ自身の商品が相手方にとつて使用價值であると否とを問はず、彼れ自身の自由なる選擇によつてその相手方を求め、その者の所有する商品と自分の商品とを交換せんとするのである。しかし此の如き欲求は、各々の商

品所有が一樣に有つところであるから、れが互に矛盾し衝突することは言ふまでもない。このことは、商品が使用價值および價值といへる・矛盾した・互に排斥し合ふ・對立物を、それ自身のうち包含してゐるといふことから生ずる。一定の生産物が商品となるためには、使用價值および價值の統一物とならねばならぬ。ところで商品となるべき生産物は、その所有者にとつては非使用價值である。それはたゞ他人にとつて使用價值となりうるにすぎない。だから、それらのものは使用價值となるために、全般的にその所有者を變更せねばならぬ。しかし總ての生産物が全般的に交換されるためには、それらのものが先づ相互に價值として——例へばAは百圓、Bは五十圓、Cは十圓であるといふやうに——一定の關係を保たねばならぬ。すなはち總ての生産物は、使用價值となる前に、先づ價值とならねばならぬのである。ところで總ての生産物が價值となるのは、それに支出された勞働が社會的に有用な形態で支出された限りにおいてであるが、しかもその勞働が果して社會的に有用な形態で支出されたるや否やは、それらのものが互に交換されるや否やによつて始めて證明される。して見ると、商品は價值として實現されるがゆゑに、使用價值となりうるのであるが、また他方においては、それは使用價值として保證されるゆゑに、始めて價值となりうるのである。斯様にして一方の解決は互に他方の解決を前提とする點において、生産物の全面的交換は解決を必要とする一の矛盾にぶつかる



のである。それは商品のうちに含まれる使用價值および價值といへる矛盾の展開に外ならぬのであり、且つ斯かる矛盾は、交換さるべき生産物の種類の増加に伴うて益々増大する。だが、かゝる矛盾の展開は、同時にそれ自身のうちに之が解決を含んでゐる。何故ならば、種々なる生産物の交換が廣く行はれるやうになれば、それらの生産物のなかには、誰でもが欲求する物と必ずしも然らざる物との等差が自然に生じてくる。その結果は、誰でもが欲求する生産物が、自然に、種々なる生産物に對する交換の相手方となるやうになる。そして斯かる交換の相手方たる地位を獨占する生産物が成立したならば、それはすなはち貨幣である。そして既に貨幣が成立したならば、誰でもが先づその生産物を貨幣に換へ、しかる後その貨幣をもつて彼れの必要とする隨意的生産物を購買するのであり、かくして全社會に生産された多種多様な生産物が貨幣を媒介とすることによつて、滞りなく全面的な相互の交換を結了するのである。

これによつて見れば、生産物が商品として生産されるといふことを前提とするかぎり、貨幣はかゝる商品生産の發展の必然的産物である。或る特種の商品が他の普通の商品から除外されてより多くの規定を有つた・より具象的な・貨幣としての商品に轉形することにより、商品の

世界が普通の商品と貨幣とに分化するといふことは、商品生産の自然史的な過程である。それは母胎に宿つた生殖細胞が分裂増殖を重ねつゝ一定の發育段階に到達したときに、分化せる特殊の器官を有つに至ると、全く同じことである。それは何人の意志、意圖、意欲からも獨立してゐる。

貨幣の必然性を認識しえざるものは、その發生について多くのお伽話を發明する。或る者は物々交換の不便を列擧し、かかる不便を除去せんがために、人々が合意によつて貨幣を制定したかに考へ、あるひは天氣晴朗なる一日、賢明なる君主が現はれて、人民の不便を救濟せんために貨幣を發明したかに考へてゐる。それらは總て、貨幣を媒介とする商品交換關係といへる吾々の社會的存在を、意識によつて規定されたものとなすところの、觀念論的な童話にすぎない。

貨幣の必然性に關する認識の缺如はまた、從來屢々社會改造に關する貨幣廢止の空想を生んだ。この空想は、現代社會に於ける百弊の根源を貨幣にありとなし、これを救濟せんために、貨幣に代はるべきものとして例へば勞働券の如きものを以てせんとする説である。吾々は此の如きを空想的社會改造案と名づける。(私は各般の方面に亘つて此種の空想案を指摘し批判するの餘白を有たぬが、しかし科學的認識の缺如は、到るところにおいて斯かる空想案を生みつ



あることに對し、讀者の廣汎なる注意を促さざるをえない。

商品生産を前提とするかぎり必然的に貨幣が発生するといふことは、H<sub>2</sub>Oなる化合物が必然的に水となるといふと同じことである。それは何人の意志・意圖からも獨立してゐる。もちろん『個々の人間にあつては、彼れの行動の總ての動力が、彼れを行動に導くために、彼れの頭腦のなかを通過し、彼れの意志の動因に轉化せねばならぬやうに、市民社會の總ての欲求は法律の形態で一般的效力を獲得するために、國家意志のなかを通過せねばならぬ。これは問題の形式的方面であつて、それは自明のことである』(エンゲルス)だが、『いづれの時代たるを問はず、經濟的諸條件に服従せねばならなかつたのは××たちなのであり、斷じて彼等がこれらの經濟的諸條件に對する法則を作り出したものでない、といふことを知らないやうな人は、およそ歴史的知識なるものを全然缺如せるものと言はざるをえない。かの公法や私法は、いづれも單に經濟的諸關係の欲求を布告し記録するにすぎない。』『金銀が法律上受授性をもつてゐるのは、たゞそれが事實上然るがために外ならぬ。そして金銀が事實上受授性をもつてゐるのは、現在の生産組織が或る一般的な交換手段を必要とするからである。法律はたゞの事實の公けの承認にすぎない。』(マルクス)貨幣が單なる法律の公布によつて廢止されうるものなるかに觀念することは、一の純粹なる空想である。それは××や立法者やの意識に依存するものでは

ない。むしろ逆に、一定の社會的存在がこれら立法者の意識を規定するのである。

だからマルクスは唯物史觀の根本的命題として、『人間の意識が彼等の存在を規定するのはなく、むしろ逆に、彼等の社會的存在が彼等の意識「社會的意識」を規定する』のであるといふことを、宣言してゐるのである。

それが吾々の社會に關する唯物論的見解である。吾々はかゝる見解の主張者であるといふ點において唯物論者である。

世間では、吾々の唯物論を誤解して實際生活における物質的利己主義であるかの如く思惟し、物質偏重主義に對して精神主義を鼓吹せねばならぬなどと主張するものがある。『だが吾々は理論上の唯物主義および理想主義を實際上の理想主義および唯物主義と、混同してはならぬ。實際的意味における理想主義者とは、彼れの思想に忠實であり、これに向つて一切を犠牲にせんとする人のことである。かゝる理想主義者は、もちろん哲學的唯心論の理論唯心論の斷乎たる反對者でありうる。その生命を犠牲に供しうる××主義者は、實際的には一の理想主義者であるが、しかし同時に、徹底的に唯物論者である。その愛する主神のために歎息する人々は、非常に理想主義的な見解をもつが、しかしそれは、彼等をして世間並の臆病な・利己的な



狭量な輩たらしめることを妨げばしない』(フーバー)

地球は、人間がその上に發生する以前に、従つて人間の頭腦が、その意識が成立するより遙かに以前から、存在してゐたものである。それば人間の意志によつて發生したものでなく、人間の意識から獨立するところの外物であり、それが人間の頭腦に反映して地球なる意識を生ずるに至るのである。

吾々の社會的意識との關係も、また此の如くである。たゞ相違する點は、吾々の社會的存在の結成が意識體たる吾々の意志行爲を媒介とする點である。例へば商品の交換は決して無意識的に行はれるのではなく、それは形式的には商品所有者同志の自由意志に基づく契約關係が必然的に生むところの貨幣も、形式的には國家の意志による公の承認を経る。それゆゑに、そこに一種の××が生ずる。そして吾々の唯物論は、かゝる錯覺を打破せんとするものである。

社會はもちろん意識體たる人間から成り立つ。社會を組織してゐる個々の個人は、各自の行動を意識的に營んでゐる。しかし斯かる個々人の意識的活動から社會全體の上に如何なる結果が生れるかは、これら個々人の意識・意圖から全く獨立してゐる。『人間は相互に交通してゐながら、しかし彼等は少しでも複雑な社會組織のなかでは——殊に資本家的な社會組織のなかでは——それによつて如何なる社會關係が形成されるか、それらは如何なる法則によつて發展

されるか、等々のことを意識しない。例へば、穀物を賣る農民は世界市場に於ける世界の穀物生産者たちと「交通する」のであるが、しかし彼等は、自らそのことを意識せずまた同じやうに、その交換から成立するところの社會的諸關聯をも意識しないのである。世界經濟の中における個々の各生産者は生産技術の上にかくの變化を齎らしたことを、意識してをり、各々の商品所有者は、彼れがかくかくの生産物を他と交換したことを、意識してゐるが、しかし生産者も、商品所有者も彼等がこれによつて社會的存在を變化することを、意識してゐない。資本主義的世界經濟の内部における斯かる諸變化の一切の總計を、その一切の分歧に亘つて知り、つくすことは、マルクスが七十人ゐても成しえないことである。たかだか成し遂げられたところのものは、かゝる變動の諸法則が主要な根本的な筋道において發見され、かゝる變動の客觀的、主觀的、その歴史的發展とが啓示されたことである。——ここに客觀的といふは、意識體たる人間から成り立つてゐる社會が、意識體の存在とは無關係に存在し且つ發展しうるといふ意味ではなく、社會的存在は人間の社會的意識から獨立してゐるといふ意味である。諸君が生活をなし經濟を營み、子を産み、生産物を造り、またそれらの生産物を交換するといふ事實から、出來事の一の客觀的に必然的な連鎖が、一の發展の連鎖が、成り立つのであるが、それは諸君の社會的意識からは獨立してをり、諸君の社會的意識は決してこれを遺漏なく把握することは出來



ない。』(レーニン)

如何に極端なる唯心論者といへども、複雑極まれる現代社會の隅々における諸變化の一切の總計を、その有らゆる分岐に亘つて知りつくしてゐると、主張しうる者はあるまい。しかもそのことは、現に唯心論者自身の意識から獨立に、吾々の社會的存在が變化し發展しつゝあることを意味する。吾々は、吾々が意識する以前にすでに與へられてゐる社會存在を事後において意識しうるにすぎない。しかもたゞその變動の諸法則の主要な根本的な筋道を發見しうるにすぎない。それは地球が吾々の意識に先だつて與へられてをり、しかも地球に關する吾々の知識はなほ極めて不充分である、といふに等しい。

『唯物論は總じて、人間の意識、感覺、經驗等々から獨立の・客觀的に實在的な・存在を(物質を)認める。史的唯物論は、人間の社會的意識から獨立の、社會的存在を認める。意識はこの場合前の場合と同じやうに、たゞ存在の反映にすぎない。よく言つてほど正しい(適當な、模範的に精確な)存在の反映である』(レーニン)。吾々はかゝる認識を有つものとして唯物論者なのである。

自然(人間社會を含めての最廣義の自然)そのものは、辯證法的に構成されてゐる。自然の忠實なる反映は、辯證的たらざるをえない。辯證法は客觀世界の論理である。そこに辯證法の

卓越性が存在する。かくて徹底的な唯物論者は、客觀世界の論理に強制されて、同時に辯證法的唯物論の終局的勝利は、客觀世界そのものによつて約束されてゐるのである。

唯物論者としての吾々が、決して個人の意識的活動を否認する者でないといふことは、すでに繰り返し述べたところである。吾々の唯物論をもつて、人間をば梶を失へる船の海に浮べるが如きものと看做す説とするならば、それは甚しき誤解である。『資本論』第三篇第五章の始めにおける次の章句は、人間がその目的を意識して活動するといふことを、何人よりも明瞭に説明してゐる。

『蜘蛛は織工のそれに類似した作業を行ひ、蜂はその蜂窩の建築によつて多くの人間の建築師を慚愧せしめる。しかも最も拙劣なる建築師をして最初から最も巧妙なる蜂に卓越せしめるところのものは、人間の建築師は蜂窩を蜂蠟で建築する以前にすでに彼の頭のうちに建築してゐる、といふことである。労働過程の終りには、その始めに際しすでに労働者の表象のうちに、従つてすでに觀念的に、存在してゐたものが、結果として出てくる。彼れはたゞ自然的なもの形態變化を生ぜしめるだけではない。彼れはたゞ自然的なものうちに、同時に彼れの目的を——それは彼れの意識してゐるところの・彼れの行爲の様式および仕方を法則として規定するところの・目的を——實現するのである』。



人間の建築師が蜂と異るところは、彼れが何を造るべきかを最初から彼れの頭腦のうちに描き、彼れの生産的活動の目的を最初から意識してゐることである。だがこのことはまた、彼れがその仕事の途中で他の目的を意識するに至ることを妨げはしない。そしてその場合には彼れが後に至つて意識するに至りし目的に關するかぎりにおいて、彼れは盲目的にその仕事を開始したのであり、その點においては蜂や蜘蛛と同類たることを免れぬのである。

私は斯かる事態の一例として、某全集の責任編輯者たる教授土方博士の最近の言動を、こゝに引用するであらう。氏は斯かる責任者として今日まで二回の宣言と一回の聲明とを公けにされた。そして第一回の宣言においては、『區々たる分派的感情を放擲して、如何なる思想傾向に屬するを問はず、苟くも擔當科目の最適任者と目せられる人々を捉へ、現代の誇りうる最高水準の知識を網羅せんことに努めた、幸にして……諸大家の賛同を得て云々』と言つてゐられる。また（一九二八年）十一月一日發行の『經濟往來』では、『各科目についての最適任者と目せられる人々に筆を依頼してその承諾を得たのである』とも言つてゐられる。

しかし氏は必ずしも最初に希望された『人々を捉へ』ることに成功はされなかつたやうである。それは最近における改造社の廣告が巨細に證明してゐるところである。現に右改造社の廣告に次いで現はれた教授の『聲明』にも、その全集は、『最初より、それが純粹に學的勞作た

るかぎり、マルクス經濟學の紹介のため一二冊を割くつもりであつた。この故をもつて……數氏にも執筆を依頼したが云々』と述べてある。すなはち氏により『純粹に學的勞作』を著はしうるものと認定され、執筆の『依頼』を受けた人々のなかには、大塚、山田、向阪、大森の諸氏があり、そして私も恐らく同様の認定を受けたのであらう、數回にわたつて執筆の『依頼』を受けたものであるが、しかし前記の諸氏を始め私もまた、遂に氏の『依頼』に應じなかつたのである。だがこのことのために、吾々は急に『マルクス狂信者』に轉化する筈はあるまい。

しかし氏の全集は、いつしか『マルクス狂信者の排除』といふことを、この看板の一つとなすに至つた。そして氏の最近に公けにされた『宣言』には、『使命は必ずしも意識的に與へられるものではない。我々は漸く本全集の眞の使命が盲信的マルクス主義の克服にあることを自覺し、勇躍してその偉大なる任務を果さんとす』といふ言葉があり、またその『聲明』には氏がマルクス經濟學のために執筆を依頼された人々が『他の多くの共產主義者と共に全部他の全集に参加してゐたことを知つた』ので、『こゝにおいて漸く我々は本全集の特質が非共產主義にあることを自覺した』といふ言葉がある。かくて吾々は知る、氏にあつては學問上の計畫ですら、その使命について最初は無意識的であり盲目的であつたといふことを。

それは例へば、一定の賃銀を得る目的を意識して他人を車に載せて走つてゐた車夫が、いつ



の間にか自分の脚の筋肉が発達したのを見て、『おれは漸くおれの仕事の眞の使命が筋肉の発達にあることを自覚した。おれは勇躍してこの偉大なる任務を果さんとするものである』と宣言し聲明するに等しい。それは自分自身の活動についてすら最初は無自覚的であつたことの告白にすぎない。『しかも最も拙劣なる建築師をして最初から最も巧妙な蜂に卓越せしめるところのものは、人間の建築師は蜂窩を蜂蠟で建築する以前に既に彼の頭のうちに建築してゐる、といふことである。』

吾々唯物論者は吾々の行動・吾々の實踐の盲目性を主張するものではない。むしろ逆に、吾々は吾々の實踐の社會的效果を最大ならしめんがため、これを社會の必然的法則の辯證法的統一に齎らすことを要求するのであり、それゆゑに吾々は現實の社會を唯物論的に見、先入とされる觀念論的妄想の總てを棄て、そこに客觀的な論理——必然的法則——を發見せんことを主張するのである。

吾々はかゝる必然的法則の認識によつて、吾々自身の生産物——吾々の社會的存在は吾々自身の生産するところのものである——によつて支配されることから免がれうる。

世界は自己運動をなしつゝある物質である。もちろんその運動は、人間の一切の意志・意識・

意圖から、完全に獨立して行はれてゐる。たゞ人間はその感覺を通して斯かる世界の運動法則を認識しうるのみである。なほその認識は、もちろん決して完全なものでなく、たゞ吾々の實踐により絶えずその誤謬を正しつゝ、益々より完全なる認識に近づきうるのである。だが、ともかくも斯かる認識を得るならば、しかるかぎりにおいて、吾々は意識的に世界の運行に参加しうるのである。造化の化育に參ずるとは、その謂ひである。そしてそこに人間の實踐にとつての理論の決定的重要さが横たはるのである。

人間が自然を支配するとは、人間が自然の法則に意識的な計畫によつて服従することである。それゆゑに、例へば電氣の利用は、電氣に關する諸法則の精密なる科學的研究を前提とする。それらの諸法則は、人間の意志・意欲から獨立してゐる必然的法則であるから、それ自體は吾々の方で如何ともなし難い。たゞ吾々のなしうるところは、それら諸法則に沿うて吾々の行動を營み吾々の意識せる目的をそれらの諸法則を通して實現することである。そこに自然の對する人間の隷屬の自然に對する人間の支配への・また自然的必然の人間の自由への・辯證法的轉化が存する。

『ヘーゲルは、自由と必然との關係を正しく敘述した最初の人である。彼れにとつては、自由とは必然の洞見である。必然はたゞそのものが把握されざるかぎりにおいてのみ盲目である。』



自由は、自然法則からの夢想的な獨立のうち、横たはるのではなく、この法則の認識のうち、且つその認識によつて與へられたところの、その法則を計畫的に一定の目的のため働かしむるところの可能性のうちに、横はるものである。このことは、外的自然の諸法則に關して妥當すると同じやうに人間の肉體のおよび精神的存在そのものを支配する諸法則にも妥當する。これら二種の法則は、吾々がたかく表象において互に分かちうるのみで、現實に互に分かれぬものである。だから意思の自由とは、知見をもつて決意しうる能力以外の何物を指すのではない。かくて一定の問題に關する或人の判斷がより自由であればあるほど、この判斷の内容は益々より多くの必然性をもつて規定される。それと同時に種々雑多の且つ互に矛盾してゐる決意可能性の間を表見のみ勝手に選擇するところの、かの無知に基づく不確定は、正に之を支配しなければならぬところの對象により却て支配さたるといふことにおいて、その不自由を證明する。すなはち自由なるものは、自然的必然性の認識に基づいて吾々自身の上に・ならびに外的自然の上に・行はれる支配のうち存するのである。(エンゲルス)

自然的必然の人間の自由への辯證法的轉化は、以上の一文のうちに既に遺憾なく叙述されてゐる。私はたゞ一個の例を蛇足となすであらう。例へば今私が或る西洋風の室内にゐるとき、もしその室外に出ようとするならば、私は扉の柄に手をかけ、これを一定の方向に廻はして、

扉を開けねばならぬ、それが、善くも悪くも、室外に出るための最も簡易な方法である。それゆゑもしも私が室内の構造をよく心得てゐたならば、室外に出ようとするとき、私は躊躇なくその扉に手をかけることを決意するであらう。そしてこの決意のうちに、室外に出ようとする私の意識的行動の自由が存するのである。しかるに、もし雀か鼠かがこの室内に迷ひ込んできて、慌てゝ外に飛び出ようとする場合には、前後、左右、上下のきらひなく、むちやくちやに跳ね廻るであらう、それがエンゲルスの言葉によれば、『種々雑多に且つ矛盾する決意可能性の間を、表見的にのみ勝手に選擇する』といふものである。勝手に跳ね廻るのだから、表面的には思ふがまゝに振舞つてゐるやうに見えても、實は盲目的に外物の支配を受けてゐるのである。眞の自由は、室内の構造を知盡することにより、出るべき場所から靜に出てゆく人間の上にのみ存するのである。

吾々が資本家的社會を支配する必然な諸法則を發見せんとするものも、また上に述べたるが如き自由を獲得せんがためであり、吾々の行動を盲目的ならしめざるがためであり、吾々の意識的目的をそれらの諸法則を通して實現せんがためである。

吾々が現にそのうちに住みつゝある今日の資本家的社會組織は、曾て何人もが意識的に設計したものではない。それは何千年かに亘る人間の物質的活動が自然に生んだところの最後の社



會形態である。善かれ悪かれ吾々は今かゝる經濟的構造のなかに閉ぢ込められてゐる。そして吾々はすでにかかる構造を土臺とするがゆゑに、それと直接または間接の連絡をもつところの吾々の社會的・政治的・および精神的の生活諸過程は、必然的にそれに適應するところの一定の相を呈する。

例へば、勞働力が一たび商品として賣買されるやうになれば、貨幣は必然的に資本に轉形するのであり、商品所有者と商品所有者との間における平等關係は必然的に一方のもの他方のものによる搾取關係に轉形するのであり、従つて資本家と賃勞働者とは階級を異にするものとして互に對立することとなり、そしてそこには必然的に兩者の間に階級闘争が起り、またその階級闘争には一定の發展段階において必然的に政治的闘争に轉形する等々、そこには『出來事の一の客觀的必然的な連鎖』が成立するのである。

吾々は今かゝる社會的構造のなかに閉ぢ込められてゐる。だからもし吾々はその構造の外に出ようとするならば、言ひ換へれば、もし吾々が現存の社會形態から外より高級なる社會形態へ推移しようとするならば、——恰も室内から室外へ出ようとする者が、先づ自分が閉ぢ込められてゐる室内の構造を確め、如何なる場所の如何なる扉が如何なる方面に動きうるかを研究せねばならぬと同じやうに、吾々は先づ資本家的社會の構造ならびにその運動法則を明かに

せねばならぬのである。

資本家社會の構造ならびにその運動法則の暴露、それはすでに述べたやうに、ブルジョアジ―にとつての苦悶であり、恐怖であり、威嚇である。そのみでなく、何千年かに亘る無意識的な發展の結果として今吾々が閉ぢ込められてゐる現代社會は、——この『乗りかゝた船』は、——實に血みどろな闘争を経ることなくしては、到底より高級なる社會形態に推移しえないであらうし、かゝる推移の實現のためには夥しき人の生命が犠牲とされるであらう。だがそれは、吾々の意圖外における自然史的過程が吾々に課してゐるところの必然的の成行であるから、吾々は『大膽に帷をあけて、光に面する』の外はない。

以上吾々は、事物の運動をそれ自身のうちに含める對立物の闘争過程（自己運動）として把握する辯證法が、必然的に吾々を導いて、社會的運動を一の自然史的過程として把握する立場に立たしめ、従つてまた、社會的意識をもつて社會的存在の反映となす唯物論的見地に立たしめることを見た。『唯物論は本質的には辯證法である』（エンゲルス）といひ、『吾々の辯證法の根柢には、唯物論的自然觀が存在する。前者は後者によつて支へられ、後者が倒れるならば前者も倒れるであらう。逆に、辯證法を俟たずしては、唯物論的認識は不完全である。否な全く不可能である』（プレハノーフ）といふは、かゝる連絡を指摘したものである。



しかるに以等上如き見地は、更に吾々に教ふるに、『人間はつねに、彼等の解決しうる問題（社會的問題）をのみ問題とする』ことをもつてする。

一例を前に掲げたる貨幣に取らう。吾々は先きに、生産物が商品として交換されるためには一の矛盾にぶつかるといふこと、かゝる矛盾は交換さるべき生産物の種類の増加に伴うて益々増大するといふこと、しかしそれと同時に、交換さるべき生産物の種類が或る程度以上に増加するならば、それら生産物のうちには誰でもが欲求する特殊の物が自然に現はれ、それが遂に貨幣となることによつて、先きの矛盾を解決するといふことを述べた。この場合、問題は解決の手段と共に發生するといふことが、極めて明瞭である。何故なれば、種々なる生産物に對する交換の相手となる如き商品は、種々なる生産物が交換過程に入り込むやうになつてからでなければ、發生のしようもないが、しかし直接な生産物の交換（物々交換）が次第に困難となつてくるのも、やはり種々なる生産物が交換過程に入り込むやうになつてからのことであるから。

このことは、一定の社會的構造のもとに生ずる根本的な矛盾——生産諸關係と生産諸力との衝突——について見るも、また全く同じことである。吾々の住む現代社會においては、深く經濟的構造のうちに根ざす斯かる根本的矛盾のために、さきに一言した如く、過剰人口の遞次的

増大、大衆の生活の窮乏化、資本家的生産の行詰り、世界恐慌および世界戦争の脅威、等々、一見したところ殆ど解決の不可能なるかの如き諸問題が發生してゐるのであるが、しかしそれらは結局のところ、現存せる生産諸關係の埒内において生産諸力が偉大なる發展を遂げた結果、それらの生産諸力が従來の生産關係と兩立し難くなつたことを意味するのであり、そしてそのことは新たな生産諸關係の物質的の諸條件が己に生成の過程にあることを告げ知らすものたるに外ならぬ。すなはち問題はその解決の手段と共に發生し且つ發展しつゝあるのである。『それゆゑに、——マルクスはいふ——人間はつねに、彼等の解決しうる問題のみ、問題とする。何故なれば、より精確に觀察すると、問題そのものは、その解決の物質的諸條件が己に存在するか又は少くともその生成の過程にある場合にのみ、發生するのであるから。』

吾々は以上の如き見地に立つものであるがゆゑに、吾々は問題の解決を問題それ自身の分析のうちに求める。それゆゑに吾々は吾々の空想によつて將來社會の設計圖を描くものではない。何よりも先づ現實社會の嚴密なる科學的研究を要求する。吾々は存在を意識かち生み出さんとするものではない。吾々の偉大なる教師の『眞心こめた。長年月に亘る。研究の結果』が『資本家的生産の仕方と、それに適應する生産諸關係および交易諸關係』との解剖圖に外ならぬのは、全くこれがためである。（學者のなかには、『資本論』のうちに共產社會の設計圖が描か



れてゐないと言つて、マルクスを非難するものがあるが、マルクスに對する非難のうち、これくらゐ無理解なものはない。かのレーニンが『人類の最高課題は、一般的な根本の筋道における經濟的進化（社會的存在の進化）の客觀的論理を把握し、人類の社會的意識と總ての資本主義國の進歩せる諸階級の意識とを、それに對して出來うるかぎり明白に明瞭に批判的に適合せしむるにある』と言つてゐるもまたこれがためである。

吾々に與へられてゐる問題は、解決されねばならぬ問題であり、これを解決することなくしては、歴史が新たなる段階に踏み入ることを得ざる問題である。吾々はこの問題を科學的に理解することによつて、これを意識的に解決せんとするものであり、今日に至るまで無自覺的なりし歴史の過程を、——従つて人間の精力および生命の夥しき犠牲を伴ひし盲目的闘争の過程を、——新たにそれ自身の意識に眼醒めしめんとするものである。社會はもちろん生みの苦しみ無くすることはできぬが、しかしそれを『短かくし且つ和らげることはできる。』吾々の學問の使命はそこにある。もしそれが、かの一部の人の最近に至り漸く自覺せりと廣告しつつある方便的『使命』と、相對立するものであるならば、吾々はむしろその對立を光榮とするであらう。

（一九二九年——昭和四年——三月發行『中央公論』所載）

## 經濟と權力

——高田教授の『勢力説』の批判——

近頃九州帝國大學教授高田保馬氏は『經濟學』と題する著書を公けにされた。

それは第一章『根本概念』第二章『貨幣』第三章『企業』第四章『價格の理論』第五章『分配の理論』の五章から成り立つてゐるが、そのうち最後の章の最後の節『利子および企業利潤』のみが、これらのものとの關係において資本を取扱つてゐるだけ、その外には、資本——現代社會において支配的の勢力を有するこの資本——のために獻けられた節は全卷を通じて一つもないといふことは、この書の奇怪なる一特徴である。しかし私は今そのことを問題としようとするのではない、著者自身がこの書の特徴だとされてゐるところの、謂はゆる勢力説なるものである。それについて、著者は序文のうちに、次の如く言はれてゐる。

『此書は……もとより小さな書物ではあるが、私は眞劍の努力を注いだ。この後に、經濟學原論に關する著書を公けにするにしても、根本の考方はこれから餘り離れないであらう。』



序述などはなるべく平凡なものにした。たゞ、全體を貫く一の特色を出したいと力めてゐる。それは價格の勢力説である。從來、經濟學上の勢力説は、私から見れば、すべて微溫的である、私は過去の何人よりも最も徹底的に之を展開したと信じてゐる。……或ひは何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ、然らば何物かを作り上げたる喜びにほゝえまう。非才、自ら判断するに苦しむ、切に識者の高教をまつ。』

著者は、この序文を結ぶに、形式上謙遜な言葉をもつてしてゐるに拘らず、他方においては、そこで十分な自負を示してゐられる。價格の勢力説といふのが本書の『全體を貫く一の特色』であつて、その點をば著者は『過去の何人よりも最も徹底的に展開した』のであり、その點において『或ひは何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ』といふのである。

しからば著者の謂はゆる價格の勢力説とは如何なるものであるか？ 著者は『價格を決定する』勢力なるものを、『經濟的勢力』と『經濟外的勢力』との二つとなし、後者をもつて『決定作用』を有するものとしてゐる。(第四章第六節)。こゝに『非經濟的勢力または經濟外的勢力といふは——著者自身の説明によれば——普通廣義において權力と稱せられるものである』が(一四五頁)、かゝる權力をもつて經濟的勢力をも決定するのであるとなす點——『單純なる經濟的勢力を決定するものは、一に經濟外的勢力であると云ひうる』となす點(一四九頁)——こ

れが著者の謂はゆる全體を貫く一の特色なのである。

だが著者は、たゞかゝることを斷定せるのみで、その論證のためには殆ど一言をも費してゐない。吾々はたゞ次の如きことを聞きうるに止まる。

『……何ものが終局的生産財(例、勞働、土地の用役)の提供に伴ふ單純の經濟的勢力を決定するのであるか、勿論、此の勢力によりて主張しうる極限が生産物の價格をこえざることには云ふまでもない。併しながら、此限界内のどこまでかをかの勢力が主張しうるか。之を決定するものはたゞ一より考へがたい。それは即ち非經濟的勢力である。即ちかの單純の經濟的勢力が(「は」の誤字か?)恐らくゼロから、生産物價格の全部までの間の、何れかの大きさを主張するものでありうる。然るにその中の一定額だけを要求するのは、之を決定するところの經濟的勢力があるが故である。(傍點は原文のま。)

經濟外的勢力の價格の上に及ぼす作用は二の方向に存する。一は價格に關す強制の作用である。それは一定の價格を強制的に一定し(例へば法定最低勞銀)、又は賣買そのことを強制する(土地の收用の如き)。二は單純の經濟的勢力を決定する。前者については今論及をさける。後者について考ふるに終局的生産財の提供に伴ふ勢力の大きさを決定するものは此の外に何等考へ得べくもない。事實において此の種の生産財の提供者、例へば勞働者は、その



供給する労働の對價として種々なる程度の勞銀を要求しうるわけである。そのあまたの可能的大きさのうち、現にどれだけを要求するかは、單純なる財の所有または供給そのことから決定される。もしもそれによりて決定せらるゝならば、かゝる數多の可能はない筈である。而して現に労働者自體が社會的關係において優勢の地位を占むるときは其要求は大となり、反對の事情においてそれが小となるのを見る。これによりて考ふれば、この經濟外的勢力こそは、かの單純なる經濟的勢力の大きさを決定するものであると思ふ。生産物の供給に伴ふ單純の經濟的勢力は、一に生産財の價格によつて決定せられ、而しこれはまた、經濟外的勢力によりて決定せられる。かくて終局的生産財たと生産物たとを問はず、その供給に伴ふ單純的勢力を決定するものは、一に經濟外的勢力であると云ひうるわけである。』(一四七—一四九頁。傍點は引用者の加へたもの。)

以上私は著者の説明そのまゝに引用したのであるが、讀者の見られる通り、そこにはたゞ斷定があるのみで、論證と看做しうべきものは殆どない。

著者はいふ、『例へば労働者は、その供給する労働の對價として種々なる程度の勞銀を要求しうるわけである』と。——これが第一の獨斷である。次にいふ、『そのあまたの可能的大きさのうち、現にどれだけを要求するかは、』單純なる經濟的勢力によつて決定されないと。——

——これが第二の獨斷である。そしていふ、『これによりて考ふれば、經濟外的勢力こそは、かの單純なる經濟的勢力の大きさを決定するものである』と。——これは第一第二の獨斷を前提としておいて、それから形式論理的に引出された結論にすぎない。

しかもこの簡單なる三段論法に盛り込まれた内容には、一の矛盾を含む。何故といふに、例へば勞銀は、一方において著者のいふところによれば、單純なる經濟的勢力で決定されるものではない。しかるに、他方において同じ著者のいふところによれば、經濟外的勢力は單純なる經濟的勢力を決定し、そして斯く決定されたる經濟的勢力が勞銀を決定する。すなはち勞銀は、經濟外的勢力によつて決定されるところの單純なる經濟的勢力によつて決定されるものである。

なほ假にかゝる説明をすべて是認するも、吾々の問題は少しも解決されてゐない。何故ならばもし經濟的勢力が經濟外的勢力によつて決定されるのであるならば、吾々の疑問は當然に、しからばその經濟外的勢力は何によつて決定されるかといふことに向ふ。しかるにそれについては著者は固く説明を拒んでゐる。このことはつまり著者が、經濟的原因によつて彼れの説明しえざる課題を、他の原因から説明されるの外はないとして、拋棄してしまつたことを意味する。それは説明したのではなく、問題を説明しえざることを説明したにすぎない。



聰明なる著者は何故にかゝる他愛なきことを今の時代に唱道し始めたか？ 著者の意識・意圖は如何やうにあらうとも、客觀的には、彼れは經濟學の領域において、一個の有力なる反動的役割を演じ出さんとしつゝあるのである。

著者の主張の反動的意義はどこに存するか？

著者自身の説明によれば、經濟外的勢力とは『普通廣義において權力と稱せられるものである』が、かゝる權力をもつて經濟的勢力を決定するものとなす點、こゝに著者の謂ゆる全體を貫く一の特徴があるのであり、且つ正にこゝに著者の主張の反動的意義が横たはるのである。この主張は、理論的には、經濟的勢力をもつて結局のところ社會的・政治的・精神的諸勢力一般を決定するものとなすマルクス主義の對蹠物であり、實踐的には、經濟的勢力の發展に伴ふて必然化される社會の變革をば、權力——暴力——をもつて阻止し抑壓することにより、歴史の不可避的なる進展の要求に逆行せんとしつゝある、かの反動的武力政治の學問的辯護に役立つものである。

生産諸力（人間が有用物を造り出す力）は絶えず發展する。だから、嘗ては生産諸力と統一を保ち、その發展に役立つた生産關係（その總和は社會經濟的構造をなす）も、一定の階段に達するときは、必然的に、生産諸力の發展形態からその桎梏に轉化する。それは恰も小供の成

長につれて着物が小さくなるが如きものである。その着物は嘗ては確かに小供の發育のために有用なものであつたが、今は小供がすでに大きくなり過ぎたために、従前の着物を無理やりに着せて置かうとすることは、その發育を阻止することである。かゝる階段に到達したときに、舊き着物を脱ぎ棄て、新たな着物を纏はんとする要求が起る。かくて社會××の時代が到來する。吾々の住む今の時代は、正にかゝる時代に屬するのである。この場合に、時代に逆行するものは、人間のからだかその着物の大きさを決定するのではなく、着物の大きさが人間のからだの大きさを決定するのだとする。そして無理やりに舊き着物のなかへ成長しゆく人間を押し込めて、その發育を抑壓しようとするのである、被壓迫階級の解放運動とは、生産階級が舊き生産諸關係の桎梏を打破し、その束縛から自分を解放せんとする運動であり、そしてこの運動を政治的矛盾によつて壓殺せんとすることが、例へば矛盾反動内閣によつて代表されてゐる彈壓政治の目標である。吾々はかゝる反動的政治權力が結局において經濟的勢力——『例外なく且つ殘酷に自己の血路を開いて進みつゝある經濟的勢力』——のために轉覆されることを信するものであるが、高田氏の權力説は、その本質において、正に吾々の斯かる見解に對立するところのものである。それは一見したところでは、價格論といふ『純粹』理論の領域における一學説たるに過ぎぬが如くであつて、實は——著者の意識するや否やとに拘らず——深くその根



祇を支配階級の階級的利益のうちにおろしてゐる。レーニンと言つてゐる、『特殊な事實研究の領域においては極めて價値ある業績を提供しうる經濟學の教授たちの誰れ一人をも、彼れが一たび經濟學の一般理論に論及するや、たゞの一語だも信じてはならぬ。けだし經濟學もまた近代社會の内部にあつては、認識論に劣らず黨派的な一科目であるから。大體において、經濟學の教授連は資本家階級の學識ある番頭以外の何物でもない。』(事項別レーニン選集、第一冊『辯證法的唯物論』について、七七頁)。然り問題が一たび一般理論に係はるならば、ブルジョア經濟學者のいふところは、たゞの一語だも信じてはならぬ。

そして諸君は、今、高田氏においてその一例を見出すことが出来よう。

高田氏はその序文において自分の見解を何等か新たなるもの如くに吹聴してゐられる。だがかゝる見解を唱道することによつて、『或ひは何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ』といったやうな幸運を僥倖しうる餘地が、果して著者に残されてゐるであらうか？ 私には更にそれについて一言しよう。

マルクス主義の文獻に通じてゐられる諸君は、この點に關し、直ちにエンゲルスの『反デューリング論』を思ひ出されるであらう。

エンゲルスはデューリングの著書から、次のやうな言葉を引用してゐる。(河野・林兩氏譯本、二五三頁以下)

『經濟的權利の形成に對する一般政治の關係は、余の理論體系においては、極めて決定的な同時にまた極めて特有な、意味を有する云々……政治關係の形勢は歴史的に基本的なるものであつて、經濟的隸屬は常に第二次の事實たるにすぎない。……始源はこれを直接的なる政治的權力に求むべきであつて、たゞちに間接的なる經濟的權力に求むべきではない。』

すなはちエンゲルスが批判の對象としたデューリングもまた、非經濟的勢力説の主張者であつたのである。なほ吾々が、以上の外エンゲルスの引用してゐるデューリングの種々なる文章を見るならば、吾々は、かの高田氏よりも——『私は過去の何人よりも最も徹底的に之を展開したと信じてゐる』と言はれてゐる高田氏よりも——むしろこのデューリングの方が、遙に徹底的に、非經濟的勢力説を展開してゐることを、見出すのである。

ところで、エンゲルスは、デューリングについて、先づ次の如く述べてゐる。(同上譯本、二五五頁以下)

『第一に注意すべきことは、デューリング氏ほどの自惚屋でもなければ、こんな見解を、飛んでもない、かくも「特有」だなどと考へるものはない、といふことである。……この思



想は、過去一切の歴史觀を支配せるものであつて、王政復古時代のフランスのブルジョア史家により初めて衝擊を受けたのである、しかるにこれをしも「特有」だとは、まことにデューリング氏がこれに對してもまた全く無智なのが「特有」なだけである。』

これは今から五十年前に、それよりなほ三年前に現はれたデューリングの著書を、エンゲルスが批判したものである。しからば高田氏の著書はいつ生産されたのであるか？ 私はその著書の卷末に次の文字を見出す。——『一九二七、一二、九、午前十一時筆をおく。一九二八、五、二一、午後二時加筆を終る。』

私は今、デューリングの著書が何月何日の午前または午後の何時に筆をおかれたものであるかを知らないが、いづれにしても、高田氏の著書がデューリングのそれに後れること約半世紀以上であることには、疑ひがない。して見れば、それは實際には、約半世紀を隔てゝのデューリング説の再生産に外ならない。しかも不思議に兩著者の態度はよく似てゐる。すでに引用したやうにデューリングはその權力説をば『余の理論的體系においては、極めて決定的な・同時にまた極めて特有な・意義を有する云々』と述べてゐるが、高田氏もまた、一方においては價格の權力説なるものをもつて、『全體を貫く一つの特色』であるとなし、他方においては、『何人も捉へざる眞理にぶつかつてゐるかも知れぬ』とされてゐるのである。もしエンゲルスの言

葉を借るならば、吾々は次の如くに言ひうるであらう。

『高田氏ほどの自惚屋でもなければ、こんな見解を、飛んでもない、特有などと考へるものはない。』それは全く本質的にはデューリングの再生産である。たゞそれが擴大再生産であるに止まるといふまでである。

非經濟的な權力をもつて經濟を説明するといふ企は、マルクスの歴史觀および經濟理論の最大の特徴を覆さんとする試みの一つの型である。——マルクス排撃者の逃げ込む穴はほど決つてゐるが、この權力説といふのは、その穴の一つである。今やそれが新たに日本においても利用されんとしてゐる。私がこの論文の題目とした經濟と權力、この二つのものの關係を、改め、て明白にすることは、この場合必ずしも無用ではあるまい。

吾々は、高田氏と逆に、經濟的權力をもつて結局においては社會的の・政治的の・および精神的の・勢力一般を決定するものと考へてゐる。だから、もしも經濟と政治とが衝突するならば、經濟が必ず勝つ、と信じてゐるのである。

『一國內部の國家權力がその國の經濟的發展と對立する場合には、その鬭争は常に政治的權力の轉覆をもつて終つてゐる。例外なく且つ殘酷に、經濟的發展は自己の血路を開いて進ん



できたものである。』(『反フェューリング論』、前掲譯本三〇二頁)。

右のことは、今日絶大の政治的權力を握つてゐるブルジョアジーそのものの發展史が、吾々に證明してゐるところである。その初めブルジョアジーは、封建貴族に對して全くの被壓迫階級であつた。一方は殿様であり、他方は素町人であり、生殺與奪の權は全く前者にあつた。すなはち、ブルジョアジーの勃興に伴ふて次々に日程に上ほされたところのこの・封建貴族に對するブルジョアジーの・全闘争に亘つて、既成の政治的權力は、つねに封建貴族の側にあつたのである。この場合、もし非經濟的勢力が經濟的勢力を決定するものであつたならば、今日の如きブルジョア社會の成立は、——それは同時に封建社會の崩壞を意味するのであるが、——ただ封建貴族の御機嫌を害せざる範圍内の手段をもつてのみ(すなはち當時の社會における合法的手段をもつてのみ)行はれるの外なかつたであらうが、しかも封建貴族を倒す企てが封建貴族そのものの御機嫌を損せざることは、如何なる場合においても在りえない。しかればかの素町人どもは、斬捨御免といふ絶大の權力を有する封建貴族たちの最大の逆鱗に觸れるべき事業を、何によつて敢行しえたのであるか? 如何なる強味が彼等の陣營に存在したのであるか? その強味は、——この闘争におけるブルジョアジーの結局における決定的武器は、——たゞ彼等が社會全體の經濟的發展を代表する地位にあつたといふことに外ならぬのである。封建貴族

がいつまでも權力を維持してゐたならば今日の資本主義諸國におけるが如き偉大なる經濟的發展ならびに之を土臺とするところの諸般の文化的精神發展は、全く不可能であつたであらう。封建社會の内部における生産諸力の發展が、一定の段階に達するときは封建的な社會的諸關係がそれ以上の生産諸力の發展を阻害するための桎梏に轉化する。そしてブルジョアジーは、かかる桎梏から生産諸力を解放せんとする立場に立つことにおいて、社會全體の經濟的發展を代表するところの進歩的な革命的な役割を演じうるのであり、かゝる社會的背景と強味とをもつて新たに政治闘争の舞臺に登場するものであるがゆゑに、よく『貴族との不斷の闘争において、歩一步と權力地位を攻略し、やがて最も發展せる諸國においては、貴族に代つて支配權を掌握するに至つたのである。』

しかるに今やブルジョアジーの支配は、再び經濟的發展の妨害物となりつゝある。社會の生産諸力は、多數の人々が現在よりも遙により善き生活をなしうる程度にまで、すでに發展してゐるにも拘らず、しかも多數の人々の生活は益々窮乏化し、その生存は益々脅かされつゝある。この事は、ブルジョアジーがもはや社會の委託に副ふ能はざる段階に到達したことを——彼等の政治的權力がもはや經濟と衝突することなくしては作用しえざる段階に到達したことを——意味する。この時に當り、もしブルジョアジーが、彼等に代つて社會全體の經濟的發展を



代表するものとして政治の舞臺に登場せるプロレタリアートの勢力を、乃至はそれに伴ふて必然的に生ずるプロレタリア的思想の勃興を、單なる政治的權力をもつて鎮壓し壓殺しうるものと考へてゐるならば、それは、エンゲルスの言葉によれば、『クルップ砲とモーゼル銃との射撃をもつて、蒸汽機關や、それによつて運轉される近世の諸機械や、世界商業や、また今日の銀行上および信用上の發展やの、經濟的作用をば、この世界から追ひ出しうるものと考へてゐる』に等しい。歴史に逆行するところの斯かる無謀な企てをなすものを、吾々は反動政治家と名づけ、かゝる反動政治を學問的に辯護するものを、吾々は反動學者と名づける。

經濟的勢力が經濟外の勢力に依て決定されるのではなく、逆に經濟外的勢力が經濟的勢力によつて決定されるのである。だからブルジョア階級は今日如何に絶大なる權力をもつてゐるやうとも、それが經濟の發展に逆行せんとするものであるかぎり、かゝる權力による新興階級の抑壓は結局において無効であり、それゆゑまた社會の經濟的發展を代表する立場にあるプロレタリア階級は、かゝる權力との闘争において、最初のうちは如何に微力に見えようとも、必ずや結局における勝利者たらざるを得ないのである。

だが、如何にして——如何なる過程を経て——それは結局における勝利者となるか？

もちろんそれは、天氣晴朗なる一日、例へば議會における多數決の結果として、既成の勢力

がブルジョア階級の手からプロレタリア階級の手へ『平和的』に譲り渡される——“aus einer Hand in die andere zu übertragen”——といふが如き、のんきな仕方においては、×××××では到底役立ちえないであらう。新たな階級は、彼等自身の×××××を、彼等自身の手によつて組織せねばならぬ。そして斯く組織されたる×××××は、舊×××××に對する闘争の間に、すなはち×××××との闘争過程において一歩づゝそれ自身を強大化し、遂に舊×××××を *Zerbrechen* するに至るであらう。今吾々にとつてはかゝる闘争の勝敗を結局において決定するところの自然史的・法的法則を、明白に意識に齎らすことが肝要である。レーニンは次の如く言つてゐる。『人類の最高課題は、一般的な根本の筋道における經濟的進化の客觀的論理を把握し、人類の社會的意識とすべての資本主義國の進歩せる諸階級の意識とを、それに對して出來うるかぎり明白に明瞭に批判的に適合せしめるにある』と。『唯物論と經驗批判論』、ドイツ本、三三二頁。

一九〇六年ストックホルムで開かれた黨の大會の席上で、ボルシェヴィキが敗北したとき、彼は力強く言つた、『落膽したまふな、同志、吾々は必ず勝つ』と、自己の力に對する信頼、勝利の念、これがその時レーニンの吾々に與へた言葉である。——スターリンはこのやうに言つてゐるが、この落膽することを知らざる勝利の信念なるものは、先きに引用したレーニンの



言葉を用ひれば、『一般的な根本の筋道における經濟的進化の客觀的論理の把握』に、社會進化の必然的法則の理解に、その根をおろしてゐるものだと、私は考へる。

ところで、かゝる經濟的進化の客觀的論理を吾々のために闡明してくれたものは、マルクスである。それゆゑに、多年レーニンの妻として彼れと生活を共にしたクループスカヤ女史は、次の如く言つてゐる。

『同志、吾々がレーニン主義とは何ぞやを規定したく思ふとき、吾々は當然、それは現時の實際に適用されたマルクス主義だ、と言はねばならぬ。……それゆゑ、もし諸君が……聴講をして能ふかぎり善くレーニン主義を理解するやうにせしめたいと思ふならば、諸君は先づ、その聴講者が、マルクス主義とは何であるか、實際に對するマルクス主義の適用とは如何なるものであるかを、理解するやうにせねばならぬ。マルクスが階級闘争をどう解釋したか？ どのやうにして彼れはそれを理解したか？ 社會の發展が如何にして、また何處へ向つて進みつゝあるか？ 彼れが如何にその理論によつて階級闘争の發展を助けたか？ 歴史的に労働階級の前に提起された問題の意識を彼れはどのやうにして助けたか？ を示さねばならぬ。だから、マルクス主義の研究、その基礎の研究に對して、極めて眞面目なる注意を拂はねばならぬ。』（瓜生氏譯『人間レーニン』、二九、三〇頁。）

私は重複を厭はず、同じくレーニンの回想記のなかから、ルナチャルスキーの言葉を引用しよう。『すべての事を見てとつてそれを正確なる理論となし、それに科學的基礎を與へたマルクス、何處へ、そして如何にして、行かねばならないかといふ實例を、幾千も指示したマルクスは、吾々にとつて、世界上の最も偉大な人間であつたである。』（同上、一五三頁）

クループスカヤ女史の言葉のなかにも、ルナチャルスキーの言葉のなかにも、社會は何處へ、如何にして・進みつゝあるかといふことが指摘されてゐる。現代の社會は必然的に何處へ進むか？ またそこへ進むためには必然的に如何なる過程を必要とするか？ 如何にして吾々はこの過程を能ふかぎり短くすることが出来るか？ これらの、諸問題を、基本的には、マルクスがすべて吾々のために解決してゐるのである。

マルクスが最も多くの時間と勞力を費した『資本論』は、根本的には、かゝる問題の解決のために獻けられてゐる。以下私は、専らこの『資本論』を問題とするであらう。經濟と經濟外の權力との關係は、そこで如何に取扱はれてゐるか？ その一端を明かにすることが、以下の私の仕事である。

エンゲルスは、唯物史觀と剩餘價值による資本家的生産の秘密と曝露とを、マルクスの二つ



の偉大なる發見としてゐる。この二つの偉大なる發見のうち、私は後のものを茲に問題とするのである。

剩餘價值が如何にして成立するかといふことの説明は、資本家的生産が如何にして成立するかといふことの説明であり、それは畢竟、資本家階級が如何にして成立し、發展し、やがてまた必然的に没落するに至るか、といふことの説明のための、根本的な前提である。

今かゝる問題の説明のため、マルクスが純經濟的勢力以外の一切のものを無視してゐるといふことは極めて特徴的な點である。この點につき、エンゲルスは次の如く言つてゐる。

『マルクスは「資本論」において、商品生産は一定の發展段階においておのずから資本家的生産に轉形すること……を、火を見る如く明かに證明してゐる。言ひ換へれば、たとえ吾々がすべての掠奪・すべての暴力行爲およびすべての詐偽・の可能性を排除する場合にでも……吾々が生産と交換との進展につれて必然的に辿りつくところは、現在の資本家的な生活の仕方であり、少數なる一階級の掌中における生産手段および生活資料の獨占であり、尨大なる多數を形成する他の階級の、無産的なプロレタリアへの墜落……である。全經過の始終は、たゞの一度なりとも掠奪や權力や國家や乃至何等かの政治的干渉を必要とすることなくして、純經濟的原因から説明されてゐる。』(河野・林兩氏譯本、二六三、二六四頁參照)

資本家階級の成立發展を説明するために、たゞの一度たりとも掠奪や詐偽や暴力やに訴へることなく、全經過の始終を純經濟的原因から説明してゐるといふこと。これが吾々にとつて最も注意すべき點の一つである。

レーニンもまた『人民の友とは何ぞや』において、同じ點を吾々に向つて注意してゐる。

『マルクスは問題を説明しようとして、これら生産諸關係の外に立つところの或るモメントに一度も訴へることなく、社會的經濟の商品的組織は如何にして發達するか？ それは(すでに生産諸關係の領域内において)ブルジョアジーおよびプロレタリアートの對立的階級を創造しつゝ、如何にして資本的組織に轉形するか？ またそれは如何にして社會的勞働の生産力を發展せしめ、且つ如何にしてそのこと自身によつて此の資本家的組織そのものの基礎に對し和解しがたき矛盾となるところの諸要素を齎らすか？ 等々を知るの可能性を與へる。』(川内氏譯本、一七、一八頁)

マルクスは、剩餘價值が如何にして成立するかを説明するために、等しい價値の物が互に交換されるといふことを、絶對的の前提としてゐる。

そこで、例へば、第一には、『何等かの特權によつて販賣者が商品に賣る場合』を除外し(河上・宮川共譯本、二七六頁)、第二には、『商品とその價値以下に買ふ購買者の特權が



存在する」場合を除外し（同上、二七七頁）、第三には、『賣ることなくして買ふだけの階級』が存在する場合を除外し（同上、二七九頁）、第四には、個々の商品所有者の間において詐欺暴行等の行はれる場合を除外し（二八〇—二八二頁）、——「この論文は『マルクス主義講座』刊行完成記念のために催された講演會の席上でしたものであるが、朗讀しつゝこの個所に來つた刹那、臨監の警官より『辯士注意』と呼ばれたのは、聊か面喰つた。』——第五には、商業資本を除外し（二八五頁）、第六には、更に高利貸資本を除外してゐる。（二八四頁）

要するに、AとBとが互に全く相等しい價値の物を交換し合ふ場合にでも、如何にしてその交換の結果、例へばAの手に一定の剩餘價値が獲得され、かくてAの手に次第に餘分の價値が蓄積されるに至るかといふこと、これがマルクスの提出した問題である。かゝる問題の提出の仕方がすでに、非常な意義をもつてゐる。商品の交換に際しては、實際には、しばしば詐欺、暴力等が伴はれてゐる。少くとも、價値の相等しからざるものが交換されるといふことは、常にある。けれどもマルクスは、商品の交換それ自體のなかに含まれてゐる事柄以外のものは、極めて注意深く一々排除してゐる。そして商品の交換なるものを、その純粹の姿で觀察してゐる。Aは穀物をもつてをり、Bは鐵をもつてをるといふ場合に、これらのAとBとが互にその所有物を交換したならば、Aの手に穀物の代りに鐵が、Bの手に鐵の代りに穀物が、存在

することになる。このことが商品の交換に含まれてゐる唯一の本質的な事柄である。かかる交換が行はれる場合に、例へばAが、これによつて彼れの手離した穀物よりも多くの價値を有する鐵を手に入れ、かくて彼れは、たゞに彼れの不用とする穀物を彼れの入用とする鐵に換へたばかりでなく、彼れが以前穀物の形でもつてゐた價値よりも多くの價値をもつことになり、従つて一定の剩餘價値を獲得するといふ立場から見れば、全く偶然的の附隨の出來事であつて、商品交換それ自身のうちに含まれてゐる事柄ではない。マルクスは、剩餘價値の成立をば、商品交換以外なるモメントにも訴へることなく、純粹に商品交換それ自身の法則によつて説明せんがために、商品交換を不純ならしむるあらゆるモメントを捨象しAとBとは互に全く相等しい價値の物を交換し合ふ場合であつても、なほ如何にして、かゝる交換の行はれた結果、例へばAの手に一定の剩餘價値が獲得されるに至るかといふことを、問題とし提出し、*Die Rhodius Sic Salta 1*——ローズ島は茲にある、茲で踊れ——といつて、その問題の解決を迫まつてゐるのである。

そしてこの問題は、今日では廣く知られてゐるやうに、人間の勞働者が商品として賣買される場合を分析することによつて、言ひ換へれば、勞働者がその勞働力を商品として資本家に賣り渡した結果を觀察することによつて、はじめて解決されるのであり、そこにエンゲルスのい



ふところの・マルクスの二大発見の一つが横たはるのであるが、私は今そのことを立ち入つて述べようと思ふのではない。私がこゝに諸君の注意を請はんとするところは、かゝる解決の前提となつてゐるところの・問題の提出の仕方についてである。

剰餘價値の成立を・従つて資本家的生産の成立を・従つてまた資本家階級の成立を・純經濟的原因からのみ説明せよといふのが、マルクスの彼れ自身に課した問題であるが、——そしてエングルスもレーニンも、マルクスがこの問題を純經濟的原因からのみ説明してゐることを、特に注意してゐるのであるが、——かゝる問題の提出の仕方またはその解決の仕方には、果して如何なる意義が存するのであるか？

マルクスの見地からすれば、經濟的諸關係が『社會の歴史の決定的土臺』であつて、法律的および政治的上層建築や觀念的な上層建築は、この土臺から派生したものである。根本的な第一次的なものは、經濟的諸關係であつて、その他のものは、すべて派生的な第二次的なものである。だから、法律や政治や乃至人間の意識から經濟的諸關係を説明することは、第二次的第三次的なものをもつて第一次的なものを説明することであり、従つてそれは事物を根本的に説明する仕方とはなりえない。

先づこれを意識について見るならば、例へば先づ地球が存在し、しかる後それが人間の頭で反映されて、地球といふ意識を生ずるのであり、それと逆に、人間の頭腦のなかに先づ地球といふ意識が生じ、その意識によつて地球が生じてくるのではないが、丁度それと同じやうに、吾々が意識的に社會的諸關係の統制を行つてゐない限りにおいては、吾々の意識せぬうちに、すなはち知らず識らずのうちに、吾々の間に一定社會的諸關係が結ばれてくるのである。しかる後それらの社會的諸關係が、吾々の頭腦に反映して、多くの場合は極めておほろけにはあるが、ともかく吾々は斯く／＼の社會のもとに住んでゐるといふことを、意識するやうになるのである。だから社會的意識は派生的のものであり第二次的のものである。それらの社會的意識は一定の社會的諸關係に依存してゐるが、それと逆に、吾々の社會的關係は吾々の意識・意欲・意圖・から獨立してゐるのである。だからまた、一定の社會的意識の成立は社會的諸關係から説明さるべきものであつて、逆に社會的諸關係が社會的意識によつて説明さるべきものではないのである。

政治の經濟に對する關係もまたこれと同じである。すべて階級社會にあつては——すなはち社會が搾取する階級と搾取される階級とに分裂してゐる社會にあつては——搾取階級は被搾取階級を抑壓するために、一定の Gewalt を必要とするものであるが、かゝる Gewalt のための



装置は、眼に見えるものとしては、人および物から成り立つてゐる。例へば、人としては、 $\times \times$ 、 $\times \times \times$ 、 $\times \times \times \times$ 、および $\times \times$ を形成してゐる。 $\times \times$ 以下 $\times \times$ に至るまでの、尠大な人の塊り、物としては、 $\times \times \times$ 、 $\times \times \times \times$ 、 $\times \times \times \times \times$ 、 $\times \times \times \times \times \times$ 、その他の $\times \times$ 、かゝる人的ならびに物的な諸装置の總和が、一國の政治的構造を形成してゐるのである。今これらのものが主として如何なる階級により如何なる目的のために使用されるかを考へたならば、吾々は、かゝる政治的構造の形態と機能とが、すべて社會の階級關係によつて規定されてゐることを理解しうるのであり、そしてまた階級社會の經濟的構造を形成する基本的な原型的な生産關係は、畢竟かゝる階級關係に外ならぬのであるから、結局のところ、社會の政治的構造はその經濟的構造によつて規定されてゐるといふことが分かる、すなはち政治は派生的のものであり、第二次的のものであり、經濟こそが一定の政治形態を生み出すところの基本的なものであり、第一次的なものである。だから一定の經濟關係の成立を説明するに當り、非經濟的な權力の作用をもつてするといふことは、派生的なものをもつて基本的なものを説明するといふことである。理論的には、そこに謂はゆる權力説なるものの根本缺陷が存する。それは關係の顛倒であつて、譬へば、何故親子が似てゐるかといふことを説明するために子から親を説明せんとするが如きものである。だから、假に一定の經濟的關係が非經濟的な權力で説明されたとしても、すぐそ

れに續いて、しからば何故に左様な權力が成立したかといふことが疑問になる。しかもデューリングはこの後の問題を説明してゐないのである。かゝる仕方をもつてしては、事物は決して根本的に把握されうるはずはない。

だからマルクスは、資本家的社會の成立・發展・および没落の過程を一の自然史的過程として把握することにより、これは全く人間の意識・意欲・意圖から獨立せるものとして取扱つてゐるのみでなく、更に政治的權力の影響をも捨象し、これを純粹な經濟過程として觀察してゐるのである。しかるかぎりにおいて、そこにはたゞ商品の自己運動があるばかりである。マルクスが『資本論』の冒頭で分析してゐるやうに、商品には矛盾が含まれてゐる。そして矛盾は一切の運動の源泉であるがゆゑに、かゝる矛盾を内藏せる商品もまた、その矛盾のために、すなはちそれ自身のうちに内在してゐる力の作用によつて、更に言ひ換へれば、純粹なる商品交換それ自身のなかに含まれてゐるモメント以外のものには嘗て一たびも訴へることなくして、それ自身に運動の過程において商品は貨幣に轉形し、貨幣は資本に轉形し、そしてまた資本は、同じくそれ自身のうちに含む矛盾のために、際限なき自己運動をなすものとなる。此の如くにして資本家的社會の成立・發展・および没落の過程は、必然的な自然法則によつて支配されてゐるものとして、はじめて根本的に把握されるものであり、そこに唯物史觀に立てるマルクスの經











ぬのだとしても、しかし斯かる抽象的なものをもつて現實の歴史と同一視してはならぬ。それゆゑに吾々は、一方において純經濟的の觀察をなすと同時に、また地方においては現實の歴史をも願みねばならぬ。これマルクスがその資本家的社會に關する研究を特に政治、經濟學、批判と名づけ、經濟に直接の關係をもつかぎりにおいては、政治をもまた其の研究對象となしてゐるゆゑである。

資本家的生産の成立に關するマルクスの説明は、この點に關し極めて特徴的である。すでに述べたる如く、『資本論』第一卷第二編の冒頭においては、彼れは一毫だも權力に訴へることなくして此の問題を説明してゐる。しかるに彼れは同じ第一卷の最後の篇においては、この資本家的生産の成立に際して行はれた様々な權力の血と火との歴史を詳細に敘述してゐる。けだし政治的權力が社會進化の上に特に著しき働きをなすのは、 $\times \times \times$ の没落・ $\times \times \times$ の誕生といふクリティカルな時期においてである。封建社會が倒れて資本家的社會が生れようとしたときも、かゝる政治的權力が實に非常なる $\times \times$ 的役割を演じた。『資本論』第二卷の最後の篇は、このことに關する豊富極まる史實で埋められてゐる。そこでは労働者を土地から切り離すといふこと——それは舊生産關係の破壊を意味する——が、かくて生産手段の所有から隔離されたる・従つて自己の労働力を賣るのほかに生活資料を得るの手段をもたざる・プロレタリアを作り出す

といふこと——それは資本家的生産の成立のための根本前提である——が、一言にしていへば農業革命が、主要の問題とされてゐるのであるが、『こゝでは吾々は農業革命の純經濟的動力を無視する、吾々はその強力的積杆を問題とする』と言はれてゐるやうに、(カウツキー版、六五四頁)、取扱はれる問題の側面は前と全く一致してゐるのである。先きに純經濟的動力のみを問題とし一切の強力を無視することにより資本家的生産の成立が説明されたのであるが、こゝでは純經濟的動力は總てこれを無視したゞ強力的 $\times \times$ のみが敘述されてゐるのである。かくて光景は一變してゐる。先きには何等の詐欺・何等の暴力も行はれざるところの、等價と等價との交換といふ極めて平和的な取引が前提とされてゐるが、こゝでは一切の $\times \times$ が荒れ狂ふ。私はこゝにはたゞその一例を引用するに止める。

『ホランダは第十七世紀の資本家的模範國民であつたが、その植民地經營の歴史は、「欺瞞、贈賄、 $\times \times$ 、卑劣に關する此の上もなき光景を呈してゐる」。ジャブで使用する奴隸を得んために、セレベス島で行つた彼等の人間 $\times \times$ の制度ほど特徴的なものは、とてもない。「私は講演の際、ここまで朗讀して來たときに、臨監の警官から重ねて『注意』を促された。それで當時は以下の朗讀を省略することを餘儀なくされたが、これは廣く流布してゐる高島氏の譯本にもそのまま載つてゐるものであるから、文章として公けにするにはもちろん差支な



きことだと考へる——。河上「人間××がこの目的のために養成された。人間××と、通辯と人間××者とが、この商賣における主なる關係者であり、人間××者の主なるものは、土着の王族である。さらはれた少年は、やがて奴隸船で送り出せるやうに成長するまで、セルベス島の秘密監獄に隠まはれた。官廳報告書の一つにいふ、——「例へばこのマカッサ一の市は、××××充されてゐる。そのうち他に優つて××××もの一つには、××と××との犠牲たる不幸な人々が、鎖で繋がれ、彼等の家族から無理に引き裂かれながら、一杯つめこまれてゐる。」」ホランダ人はマラッカを手に入れんがため、ポルテュガルの總督を買収した。一六四一年總督は、彼等がこのマラッカ市に入ることを許した。彼等は直ちに總督邸に駆けつけ、二萬二千八百七十五ポンドの賄賂の支拂を「節約する」ために、總督を××した。彼等が足をおろしたところは、荒廢と住民絶滅とが相次いで起つた。ジャバの一つの州たるバンジュワンギでは、一七五〇年に住民八萬以上を算してゐたが、一八一一年にはやつと八千に足るか足らぬかになつた。」（カウツキ一版、六八〇、六八一頁）。

吾々がすでによく知つてゐるやうに、資本家の獲得する剩餘價值は、資本家によつて搾取される賃労働者の剩餘労働から成り立つものである。だから、資本家的生産が成り立つためには、賃労働者が存在してゐねばならぬ。しかしながら斯かる賃労働者は、最初のうちは、決して十

分に存在してはゐなかつた。だから、労働者を彼等の××××から無理やり引き離してそれらの労働者を強制的に賃労働者たらしめる必要があつた。そのために、今述べたやうな××が使

用されたのである。日本においては、そんなことは曾て一度も行はれたことはあるまいと、誰もが言ふであらうが、しかし現在にでも『監獄部屋』なるものがまた存在してゐるのである。私は『有島武郎全集』（第六卷、一四三頁以下）から『或る土木工夫の直話』をこゝに引用しておかう。

『大體日本には今四十五萬人の土木工夫がゐます。そしてそのうち七萬人は、自分の労働力ばかりでなく、自分の身を賣ることを餘儀なくされて、生き恥をかゝされてゐます。

七萬人の九分通りは、人夫仲間からいふと、赤の素人で、學校生活を途中でやめた者とか、不首尾で投出されたお店者とか、田舎から一攫千金を夢みて都會に出て來た百姓とか、怠惰のために喰ひつめた世間知らずとか、さういふ人々から成り立つてゐます。それらの人の多數はなすこともないまゝに、都會の場末とか公園とかをうろついてゐる間に、悪募集屋の手先きに難なく乗せられるのです。

謂はゆる人夫募集屋は、東京、大阪、神戸、名古屋、仙臺等に、仕掛の大きな根據を備へて盛んに商賣をやつてゐますが、……甘々と口車にひつかゝつた者がそれらの募集屋の暖簾



をくぐると、張場には口の上手な男がゐる。歩合のいゝ契約を取り結びます。……證書に捺印することになると、すぐ二階の溜りに追ひ上げられます。追ひ上げられたらもう最後です、便所一つ行くにも一見物凄風體をした男の監視を受けなければならないのです。……そこで二十人なり三十人なりの頭が揃ふと、土木の現場の方に送り出されるのですが、かうした人身賣買の行はれる地方は、東京以北では、福島、仙臺あたりから始まつて、北海道から北は樺太まで及んでゐます。――

……募集屋の二階で全く自由を束縛された人達は、とても逃げることの出来ないほどの多数の護送人に附添はれて汽車に乗り込むのですが、乗り込むと護送人の数は減つて、二人か三人になります。その二三人といふ男は、殊に腕つききな物凄風體で、客車の入口の所にがらばつてゐて、辨當から便所への立ち居にまで氣を配つて、一寸の隙も見せません。この役目をする男は、一日三圓の日當と酒代とを貰つてゐます。汽車が目的地につくと、停車場には、十人について四五人といふ割合に、獲物を持った荒くれ男が迎えに出てゐるので、大抵の應募者は度膽をぬかれて觀念の眼を閉ぢる外ありません。

さてこれから本當の人身賣買が始まるのですが、東北地方では大抵直接土工組に賣り込みますし、北海道では函館真砂町に引受所があつて、一旦その手に渡されてそれ〴〵需要のあ

る所に送り込まれることになつてゐます。福島地方は差別なしに一人三十圓、北海道は七十圓、樺太は百二十圓といふやうな相場になつてゐます。募集屋はその金を受け取ると、さつさと引き上げてしまふのですから、それらの處置は全く土木組の勝手です。募集屋と取り交はした契約はよし一圓二十錢だらうが、二圓だらうが、それは反古同然です。……土木組ではそんなことに頓着なく賃銀を定めるのです。……現場ではどの位の賃銀かといふと、先づ最上五十錢、北海道で一圓二十錢といふ位の相場です。……これだけ聞くと、とにかく少くとも賃銀は呉れるやうに見えませう。しかしその底を割つてお話すると、賃銀は一切現金では呉れないで、各組にて發行してゐる切符で支拂はれるのです。それはもちろん現場以外では通用しない紙きれです。……

現場はといふと、停車場から一里も二里も離れた山の中で、そこに厩舎のやうな細長い堀建ての荒小屋ができてゐます。それが監獄部屋と呼びならされてゐる合宿所です。眞中が道路で、その兩側に一本の丸太がねかしてある、それが枕です。日がな一日働いてきた人夫たちは眞暗なところで干鮭と腐れ澤庵とで飯を喰はされて、すらつと列んでその丸太を枕にして寝るのです。入口は二ヶ所だけよりなく、その二ヶ所には嚴重な警戒がしてあります。労働は朝の六時半から掛かつて夕方六時まで、晝飯時の半時間の休憩を除けばあとは引つき



りなしです。八時間労働だ何んだと言つてゐるお人達がおかしくなる位のもです。……病人は随分出來ます。その筈です。ところが足腰の立つ間は打ちたゞいてもこき使つて、使ひ切れなくなると二度分の辨當と五十錢とをあてがつて、お拂箱にするのです。そんな人は停車場のある所まで辿り着くのもやう／＼といふくらゐ弱つてしまつてゐるのです。……

……實況を世間に漏らすことのできる手紙は書けない仕掛けになつてゐます。手紙を書いたら開封のまゝで帳場に出さなければならぬのです。帳場ではよし／＼といつて皆んな受取りますが、さしはりのある手紙は、一つ残らず紙屑籠に抛り込んでしまふんですから。

……苦しまぎれに遁走を企てる者がありません。しかし先方でもそれには相當の用意ができてゐます。第一現場に通ずる道路の三叉四辻には、きつと一人の屈竟な男が叢に隠れて見張りをしてゐます。近所の二つ三つの停車場には氣の利いた小頭が山から下りて監視してゐます。逃げは逃けても逃げおほせないと觀念した氣の弱い男などは自殺するのがあります。……考へのあるのになると、道に出ずに草深い所につぐんで二日か三日かちつとしてゐます。それ逃げたといふんで搜索にかゝりますが、三日も知れないと手がゆるみます。その頃になつて、そつと叢を出るのですが、何しろ饑しいから腹をふくらすために、その近所の百姓家にも飛び込んで、仕事を手傳はして貰ふ外ありません。ところが百姓もこの頃は

暮しがせち辛くなつたためか、氣のいゝ人は先づありません。それは氣の毒なといふやうなことを口先きでは言ひながら、濁酒でもあてがつておいて、裏から早速帳場に内通します、帳場では時を移さず人をやつてその男を取りかへして、内通した百姓には大概三圓の手當に食事その他の實費を支拂ふのです。連れ歸つたが最後、一同への見せしめだといふので、皆の見てゐる前で、小頭どもが寄つてたかつて息の根がとまるやうな目に遇はせるのです。……

……こんな忌々しい習慣に對する地方××の態度はどうかといふと、實に生ぬるいものです。第一××は大抵買収された土工組の味方です。かういふ大土工の經營者は大抵地方地方の有力な資産家ですから、××の方もさはらぬ神に崇りなしといつたやうな態度を持つてゐて、私なんか話に行つても、うろんな奴だといふやう色眼鏡で見られる外ありません。『此の如きは、嘗てホランダ人の行つた『人間××の制度』と何程も違つてはゐない。たゞホランダ人はマラッカを手に入れるために、ポルテュガルの總督を××したが、相手が總督であつただけに、賄賂は二十萬圓以上——十七世紀の當時では巨額——であつた。それゆゑ彼等ばかり賄賂を儉約するために、總督を×××してしまつたのだが、村の×××の巡查は、僅かな××で買収されるお蔭で、總督の運命を免れてゐるのである。』

『資本家的生産の根本條件』たる労働者の生産手段からの隔離は、マルクスが諸國の歴史的事







力は——此の如き産みの苦しみの××を短縮し速進するために役立つのである。マルクスの言葉によればそれは舊社會から新社會への轉化を温室的に××せしめ、その過程を××するため、大なる役割を果すものである。こゝに温室的といふ言葉は、もとより比喩的に用ひられてある。だがそれは正確なる比喩である。茄子でも胡瓜でも、それはそれ自身の生物學法則に従つて成長する。吾々はそれをどうすることもできない。しかし吾々はまた、温室の設備によつてそれらのもの生長を××することができる。經濟外の力は經濟に對して斯かる作用をもちうるのであり、しかる限りにおいてそれ自身一の經濟力であり、一の生産力である。

『資本論』では、封建社會の没落に伴ふ資本家的社會の成立に際する××の革命的な役割が、説明されてあるに止まる。加ふるに、かゝる××の組織そのものはそこで少しも論じられてない。何故なれば、『資本論』は資本家的社會の經濟的構造を研究對象となせるものであり、従つて政治的權力は、それが社會の經濟的構造に影響を及ぼす限りにおいてのみ、問題とされてゐるのであり、權力組織そのものは、おのづから問題外におかれざるをえないのであるから。

よつて私は最後に、將來における××××××××に際しての××役割ならびにその際におけ

る××の組織について、一言を補足しておかうと思ふ。

資本家的社會の成立のために如何に××が××的な役割を演じたかについては、吾々のすでに見たところであるが、かゝる××はブルジョアジーの支配の樹立によつて益々強大化し、今日の資本家的諸國におけるが如く、彪大なる官僚および××の組織を確立するに至つた。しかしそれと同時にかく組織化された××は、今や往年の××的意義を失ひ、むしろその反對物に轉化し、現在では完全に、歴史の進行を阻止するための保守反動の役割を果しつつある。それは、専らブルジョアジーの支配を永久的することを目標とせるものであるから、如何にも強大なる一の××組織には相違ないが、しかし、それはもはや『××なる社會を孕んでゐる×社會の助産婦』ではありえない。

だから、封建社會の没落に伴ふ資本家的社會の成立に際して××が有力なる××的役割を演じたと同じやうに、資本的社會の××に伴ふ×社會の誕生に際してもやはり××が同じやうな××的役割を演じるに相違ないが、しかしその××は、すでにブルジョアジーによつて集中され組織化されたる××の××ではありえない。むしろそれは——すでに前にも一言したやうにかゝる既成の××を××するために、新たなる××によつて新たなる××に役立ち新たなる××を果すべく新たなる××によつて集中化され組織化されたる××でなければならぬ。社會の











## マルクスの絶對地代論

——土方教授の『地代論より見たるマルクス價值説の崩壊』  
と題する論文の分析——

マルクスの地代論については、吾々は近頃一つの有益なる文献を得た。『マルクス主義講座』（上野書店發行）の第三卷から第五卷（一九二八年二月乃至四月發行）に亘つて連載された村山藤四郎氏の『マルクス主義と農業問題』がそれである。私はもちろんその内容をこゝに紹介することはできぬが、たゞ私が本論において問題としようとしてゐるマルクスの絶對地代については、氏はなかんづく次の如く言はれてゐる。

『絶對地代の發見とこれが嚴密な理論づけこそは、マルクス經濟學上、最も重要な一點である。何故に然るか？

『けだし第一に、絶對地代の存在の論證とその嚴密な理論づけのためには、價值と生産價格との差異が論證されなければならず、従つてまた平均利潤論が打ち立てられなければならぬいからである。個別剩餘價值が如何にして平均利潤化するか、この平均利潤化がどこで妨げ

られるか、を問題とすることなくしては、絶對地代は問題とならない。……

『第二に、従つて、絶對地代の存在の論證とその嚴密な理論づけのためには、リカアドウの地代論（等差地代のみが地代であるとなす地代論）の不充分さを、その根據たる價值と生産價格との混同において衝かなければならなかつた。それはブルジョア經濟學をその最も深い根據において批判克服することを意味した。』

\* 『マルクス主義講座』 第三卷、二二二頁

村山氏のこの論文と殆ど同じうして、他方には、土方成美氏の『地代論より見たるマルクス價值論の崩壊』が現はれた——東京帝國 學經濟學部の機關雜誌たる『經濟學論集』第六卷第四號（本年四月發行）の卷頭論文として。

讀者の記憶されるであらう如く、嘗て慶應義塾大學の小泉教授は、先づマルクスの價值論に對する非難を公けにされ、次いでマルクスの地代論に對する疑惑を公けにされたが、今また東京帝國大學の土方教授は、先づ『マルクス價值論の排撃』を發表された彼、更に進んで此の如き『地代論より見たるマルクス價值の崩壊』なるものを發表されたのである。私は今それを批判しようとするのである。



同一生産部門内における利潤率の不均等と異なる生産諸部門の間における利潤率の均等

吾々は當面の問題を取扱ふために、種々なる豫備知識を必要とする。今それらのものを、讀者の總てが具備してゐられると前提することは、若干の讀者にとつて不便であらう。それゆゑ私は先づ本節においては、價值、生産價格、平均利潤率、等々の關係につき、こゝに必要なかぎりの説明を出来るだけ簡単に試み、更にそれに基づき、次節にあいては、マルクスの地代論そのものの大要を説明するであらう。土方教授もその論文の第一節と第二節とをマルクスの地代論に充てゝられるが、それは甚だ不充分であるがゆゑに、私は私自身で先づマルクスの所説そのものの紹介を試みねばならぬのである。

私の便宜のため社會の表面に現はれてゐる現象から話を進めよう。私の手許にある材料によれば、大正十四年上半年期における日本紡績界の状態は次の如くあつた。

- (1) 三〇萬鍾以上のもの 五社 配當一〇%—三八%
- (2) 三〇萬鍾以下一〇萬鍾以上のもの 五社 平均二五%
- (3) 一〇萬鍾以下五萬鍾以止のもの 五社

- 配當一〇%以上のもの
- 配當八%以上のもの
- 配當五%以上のもの (殆ど機械を有せざるもの)
- 無配當のもの (全く機械を有せざるもの)

五社  
二社  
一社  
一社  
一社  
平均九・四%

(4) 五萬鍾以下一萬鍾以上のもの

三七社

a) 自社製綿絲を全部織布とするもの

一二社

- 配當一八%—八二%のもの 三社
- 配當一〇%—一二%のもの 四社
- 配當六%—一八%のもの 三社
- 不明のもの 二社

平均一三・五%

b) 自社製綿絲の一部を織布原絲とし一部を綿絲のまま賣るもの

二〇社

- 配當一〇%以上のもの 四社
- 配當五%以上七%以上のもの 五社
- 無配當、缺損のもの 六社
- 不明のもの 四社
- 例外のもの(上海に大工場を有するもの) 一社

平均四%



① 紡績のみにて織布を兼營せざるもの

配當四以上六%以下のもの	三社	五社
無配當五%のもの	一社	平均四%
不明のもの	一社	
(5) 一萬鍾以下のもの (七社のうち三社は休業中)	七社	
配當五%のもの	一社	
無配當のもの	二社	
不明のもの	四社	

これによつて見れば、同じ紡績業に放下されてゐる資本でも、その擧げうる利潤は甚だまちまちになつてゐる。すなはち配當率の最も高きものは三割八分にも上ほつてゐるが、他方には五分、六分の配當しかなしえざるもの、乃至無配當のものすらある。このことは、これを一般的に表現すれば、同一の生産部門内における資本相互の間における競争は、異なる生産条件を具ふる資本に對し、不均等なる利潤率を齎らす、といふことを意味する。

言ふまでもなく、同一の生産部門内における種々なる生産者は、互にその生産条件を異にしてゐるのだから、——前記の例では、生産規模の大小と織布業兼營の有無とが、先づ眼に見え

てゐる、——その生産する商品は、たとひ同じ種類・同じ品質のものであつても、これが生産のために費される労働の分量(商品個別的價值)は、互に相違する。しかしそれらの生産者が共に同一の市場に向つて彼等の生産物を提供することにより、彼等相互の間に自由競争が行はれつゝあると假定するならば、一個の市場には一個の價格といふ原則が實現され、互に労働費用を異にするものが皆な一樣に同じ市場價格で賣られる。この市場價格は、需要供給の關係によつて、絶えず變動する。しかしその變動の中心點となるものは市場價值であり、そしてその市場價值なるものは、取りも直さず『資本論』第一卷第一章で説明されてゐる商品價值であり、その大きさは、問題となれる商品の一定量を市場に供給するため、平均的な生産条件のもとで必要とされる労働(生産手段に蓄積されてゐる過去の労働、およびその生産手段に對し新たに合體される生ける労働)の平均量によつて規定されるのである。

さて一定の生産部門における商品の市場價值は、個々の商品がその特定の生産者に費さしめた労働の分量によつてではなく、その部門の商品總量について必要とされる労働の平均量によつて規定されるとするならば、同一の商品を平均的な生産条件よりも有利な条件のもとに生産しつゝある資本家は、平均以上の利潤を得、これに反するものは、平均以下の利潤を得るに止まることになる。すなはち同一の生産部門の内部における競争は、種々なる個別的價值を一個



の市場價值に轉形することにより、異なる生産條件を具ふる同一部門の資本に對し、不均等なる利潤率を齎らすに至るのである。

同一の生産部門の内部だけについて見れば、以上の如くである。ところが社會的生產は多くの部門に分れてゐる。例へば前記の紡績のほか、そこには製鐵、造船、採礦、製糖、釀酒、米作、等々、實に種々雑多な生産部門がある。そしてこれらの相異なる生産部門と生産部門との間における資本相互の競争は、前とは逆に、總ての生産部門を通じて均等なる利潤率を齎らさずにはおかない。そしてそのことのために、——種々なる生産部門における資本の平均的構成が互に異なる場合には、——前に述べたる商品價值は、そのまゝ市場價格となることなく、商品價值とはその大きさを異にするところの生産價格に轉形するのである。

けだし各種の生産部門を通じて假に剩餘價值率はすべて均一であるとしても、利潤率は資本の構成を異にするによつて異なる。なぜといふに、如何なる生産部門においても、資本は不變資本（機械、原料、等々の生産手段に放下された資本）と可變資本（勞賃の支拂のために支出された資本）とから構成されてゐるが、そのうち不變資本部分は、たゞそれ自身の價值を生産物の上に移轉するにすぎざるに反し、可變資本部分は、——それによつて購買された勞働力が

生産過程において、たゞにそれ自身の價值を再生産するのみならず、更にそれ以上の剩餘價值（勞働者の剩餘勞働を體現せるもの）を生産するがゆゑに、——その價值を増殖して生産物のうちに再現する。そして剩餘價值率とは、可變資本に對する剩餘價值の比（それは勞働者が搾取される程度を如實に示すもの、それは現象の底に隠れてをり、資本家の簿記にはもちろん記入されてゐない）であるが、利潤率とは、不變資本と可變資本との和（すなはち資本總額）に對する剩餘價值の比（資本の増殖を目的とせる資本家にとつては、これこそが大事なものである、もちろん彼等の簿記にも正確に記帳されてゆくものである。それゆゑ、もし各種の生産部門を通じて資本の構成——不變資本と可變資本との割合——が皆な一樣であれば、剩餘價值率が同一であるかぎり、（そして事實においても、それはほど同一であることを常とするが）利潤率もまた同一であるけれども、もし各部門における資本の平均構成が互に異なるならば、それにつれて、たとひ剩餘價值率は同一であつても、利潤率には著しき差異が生ずることになる。假にその關係を數字で示せば、次の如くである。（各部門の内部においても、個別的資本は多少ともその構成を異にするが、こゝでは或る生産部門と他の生産部門との關係を問題とするのであるから、一個の生産部門についてはその平均構成を問題とするのである。なほ符號 $v$ は不變資本、 $v$ は可變資本を現はす。不變資本のうち固定資本に屬するものは、その價值を一



時に生産物の上へ移轉するものではないが、こゝでは簡單化のために之を捨象しておく。

資本	剰餘價値率	剰餘價値	生産物の價値	利潤率
I, 60c + 40v	100%	40	140	40%
II, 70c + 30v	"	30	130	30%
III, 80c + 20v	"	20	120	20%
IV, 85c + 15v	"	15	115	15%
V, 95c + 5v	"	5	105	5%
合計 390c + 110v = 500	—	110	610	—
平均 78c + 22v	—	22	—	22%

第一部門以下第五部門に至るまで、資本總額はいづれも一〇〇單位であるが、たゞその構成は後の部門に至るに従つて次第に高級となり、全體の資本のうち不變資本部分の占むる割合が次第に多くなつゐる。従つてすべての生産物がその價値通りに販賣されると假定するならば、利潤率は第一部門では四〇パーセントの高率を示すに反し、第五部門では僅に五パーセントにすぎないといふことになる。

だが此の如きことは、これら各種の生産部門の間に競争が自由に行はれてゐるかぎり、現實においては決して常態となりえない。なぜなれば、資本は利潤率の低き部門から引き上げられ

て、利潤率の高き部門へ移轉され、その結果、前の部門における生産物の供給を減少することにより、その市場價格を價値以上のものたらしめると同時に、後の部門における生産物の供給を増加することにより、その市場價格を價値以下のものたらしめ、此の如くにして種々なる生産部門の間における資本の移出入は、すべての部門における生産物の價格が、その資本出費（費用價格）に加ふるに平均利潤をもつてした點に定まるに至つて、始めて平靜に歸しうるからである。この資本出費（費用價格）に加ふるに平均利潤をもつてしたもの、これを生産價格と名づける。すなはち價値が生産價格に轉形することによつて、各種の生産部門を通じての均等なる利潤率が成立することとなるものである。今その關係を、前記の表に基づいて表示すれば、次の如くである。

	生産物の價値	販賣價格(生産價格)	價値と生産價格との背離
I.	140	122	-18
II.	130	122	-8
III.	120	122	+2
IV.	115	122	+7
V.	105	122	+17
合計	610	610	+26-26



各種生産部門と生産部門との間に資本相互の競争が自由に行はれてゐるかぎり、資本家的社會全體の上に生ずる剰餘價値の總體は、投下されてゐる資本額に比例して各種の生産部門の間に配分されなければならぬがゆゑに、資本家的商品の市場價値は生産價格に轉形し、それらのものはその價値において賣られる代りに、生産價格において賣られることになる。それゆゑ、もし各種生産部門における資本の平均構成が互に異なるならば、本來は、各種生産部門を通じての均等なる剰餘價値率は、不均等なる利潤率として現はれねばならぬ筈のものであるに拘らず、却て逆に、それは均等なる利潤率に轉形するのである。(資本家的商品はその價値において賣られる代りに、生産價格において賣られるといふことであれば、マルクスの價値説は維持されなくなるではないか？ マルクスの生産價格説に對しては斯かる非難がしばしば加へられるが、私は近刊の『資本論入門』第四分冊において、それに對する詳細の批判を試みた。序ながら茲にそのことを一言しておく。)

以上述ぶるところによつて見れば、資本相互の間における競争は、二重の對立的な結果を齎らすものである、同一の生産部門の内部にあつては、競争は、生産條件を異にせる資本の生産物(それらは同一の生産物でありながら、互にその生産費を異にする)を一個の統一に齎らし、

互にその個別的價値を異にするものを同一の市場價値しか有ちえざるものたらしめ、これによつて、平均以上の條件を具ふる資本には平均以上の利潤を與へ、平均以下の條件を具ふる資本には平均以下の利潤を與へ、一言にしていへば、同じ部門内の種々なる資本に不均等なる利潤率を齎らす。しかるに他方において、競争は、種々なる生産部門相互の間における資本の移出入を自由ならしめることにより、如何なる生産部門の平均利潤率をも他の生産部門におけるそれと均等ならしめる。その結果、社會全體の上に、一個共通の一般的平均利潤率が形成される。個々の生産部門の内部には如何に利潤率の不均等があり、或る資本は他の資本に比し如何に法外なる超過利潤を擧げつゝあるとするも、それらは總て一般的平均利潤の構成分として合流する。

### 等差地代および絶對地代

ところで吾々の茲に問題とする地代(資本家的地代)なるものは、資本家的社會で生産された剰餘價値のうち、總じて、以上述べたるが如き資本の所得としての利潤の形成に参加せざる部分の轉形物である。資本家的社會全體の上に生産された剰餘價値は、放下資本額に比例して各種生産部門の間に平等に配當されねばならぬがゆゑに、社會のあらゆる方面において生産され



た剰餘價值は、すべて合流して一般的平均利潤の構成分子となるのであるが、今かゝる事態に對し一の例外を要求するものは地主階級である。地主階級は資本家階級の擄取したる剰餘價值に對し一定の分前を要求する、従つて資本家的社會に生産された剰餘價值の一部は、一般的平均利潤の構成分子たることから除外され、轉形して地代となる。

こゝでの問題は、かゝる意味の資本家的地代——資本家的剰餘價值の地代への轉形——である。だからそれは、現在の我が國の農村における支配的な地代と、もとより其の性質を異にする。『我が國では物納小作料が地代の支配的形態である。そこで深く考へないものが、マルクスの地代論の公式を我が國の小作料にあてはめて、とんでもない見當ちがひの議論を立てるやうな珍現象が現出する』。

\* 『マルクス主義講座』 第三卷、一九二頁

しかしながら『ブルジョアの社會の諸關係を表現する諸範疇は、その編制の理解は、同時にブルジョアの社會に向つて、すでに没落し去つた總ての社會諸形態の編制と生産諸關係とに對する洞察を與へる。……人間の解剖は猿の解剖に對する一の鍵である。これに反し、低級なる種の動物におけるヨリ高級なるものへの暗示は、ヨリ高級なるものそれ自體がすでに知悉されたときにのみ、これを理解することができる。ブルジョアの經濟學は、古代、等々の經濟學に

鍵を提供する。……地代（資本家的地代）を知悉したならば、貢賦、十分一税、等々を理解することができる、しかし吾々はこの兩者を同一視してはならない。我が國の農村では現在ほぼ封建的地代が支配的な形態となつてゐるけれども、それは先づ資本家的地代を知悉することによつて、より善く理解されうるものとなるであらう。吾々にとつての當面の研究は、我が國現在の農村に對し、以上の如き限度と意義とを有つのである。

\* 『經濟學批判序説』 河上・宮川共譯本、五七頁

さて吾々は前節において、競争は、利潤率の平均に關し、相對立せる二様の結果を齎らすことを見た。第一に、同一の生産部門の内部における競争は、異なる生産條件を具ふる同一部門内の種々なる資本に對し、不均等なる利潤率を齎らす。これに反し、種々なる生産部門相互の間における競争は、種々なる部門の資本總體に對し、均等なる平均利潤率を齎らす。

今地代の成立は、競争の斯かる二様の作用に關聯する。競争の第一の作用に關聯しては等差地代が生まれ、その第二の作用に關聯しては絶對地代が生まれる。

同一の生産部門内における種々なる資本に對し不均等なる利潤が生まれる場合に、もし或る資本に對する超過利潤が土地に附着せる或る自然的條件に基づいてをり、且つその自然的條件が資本の力により創造することをえざる特殊のものである場合には、その超過利潤は、これを



搾取せし當該資本家の手に留まることなく、またその他の資本家の手に移ることもなく、總じて資本家階級の外に流れ出で、土地の使用に對する報酬として地主の所得に歸屬する。

吾々は先きに紡績業なる一生産部門の内部における會社の配當が現に著しき差異を有しつゝ、あることを見たが、ここでは先づ一見して明かなやうに、大體においては、生産規模の異なるものほど大なる利益を擧げてゐる。ところで、大なる規模における資本の利用といふが如き長所は、資本そのものに係はる事情であるから、それは、同一の生産部門内における一切の資本がそれと同じ仕方において放下されることを、それ自身において妨ぐべき何等の保證をも有せぬものであり、むしろ資本相互の競争は、かゝる事由に基づく生産條件の差異を絶えず消滅せしめんとする傾向を有つのである。簡単にいへば、かゝる種類の生産上の長所は、資本の力によつて作り出されうるものである。しかるに之と異なり、工場が設立されてゐる土地の位置の如きは、一の動かし難き自然的條件である。紡績工場の位置は、第一には、原棉の輸送に便利なることを必要とするのであり、その點からいへば、日本では、神戸、大阪、名古屋、等々の輸入港が長所を有する。第二に、それは製品の輸送にも便利なることを必要とするから、その生産物がもし内地向きのものであるならば、例へば大阪、名古屋、和歌山、等々の綿糸消費の中心地附近たることを便利とする。第三には、動力を得るに便利な土地は、一の特長なる長所を

有する。鐘淵紡績會社の三池工場の如きは、石炭層の上に建てられてゐるのだから、この關係からは理想的な地點を占めてゐるわけである。總じて工業にあつては、農業におけると異なり、土地の豊饒度は問題にならぬけれども、その位置の如何は、生産物の生産工費の上に、從つてその事業の擧げうる利得の上に、少からざる影響を及ぼすものである。しかるに土地の位置といふが如きものは、資本の力によつて創造することのできぬ一の自然的條件であるから、かゝる條件のために生ずる部分の超過利得は、資本家に歸せずして地主の懐に入ることとなるのである。

これと同じことが農業においても起る。たゞ農業にあつては、同一面積の種々異なる土地の上に使用される同一量の資本に不同の結果を生ずるところの。資本から獨立した一般的原因として、土地の位置の外にその豊饒度がある。例へば同じ面積の五種の土地A、B、C、D、Eの上に、同じやうに五十圓づゝの資本が放下されるとしても、土地の豊饒度に差異あるがために、これによつて得られる收穫は、Aでは十石、Bでは十二石、Cでは十四石、Dでは十六石、Eでは十八石といふが如き差異を生ずる。この場合、しばらく土地の位置を問題外におき、専ら土地の豊饒度と等差地代との關係を明かにするために、吾々は次の如き假定を設けるであらう。すなはち一般的平均利潤は二〇%であり、そして最劣等地Aにおける總生産物十石



の價格は五十圓に十圓の利潤を加へたる六十圓——生産價格——に相當するとする。(この假定のもとにおいては、最劣等地に放下された資本も、平均利潤を得ることになる。すでに述べたやうに、實際においては、如何なる生産部門においても、平均以下の生産條件のもとに使用されつゝある資本は、平均率以下の利潤を擧げうるに止まるのであるが、こゝでは平均利潤以上の超過利潤のみが問題となるのであるから、吾々の研究を簡單化するために此の如き前提を置くのである。このことは、今吾々は、土地以外の生産諸條件については總て平均的、條件を具へてゐる資本のみを研究の對象としてゐる、といふことを意味するに外ならぬ。) 今かゝる事情のもとにおいては、Aなる土地には地代に轉形すべき何等の超過利得も生じないが、B、C、D、E、の四種の土地においては、優良なる土地であればあるほど益々多くの超過利得を生ずると同時に、しかもそれらは皆な土地の豊饒度といふ自然的條件の優越に基づくものであるから、いづれも地代に轉形するのであり、かくてこれら四種の土地に對する地代は、十二圓、二十四圓、三十六圓、四十八圓となるであらう。これがマルクスの謂ふところの等一形態の等差地代である。

なほ前記のもののほか、マルクスの名づけて第二形態の等差地代となせるものがある。けだ

し農業の經營者は、その使用する資本の分量を増加するにつれ、必ずしも同時にその使用する土地の面積を擴張する必要はないのであり、たゞ單に同じ面積の土地の上に放下すべき資本の分量を増加することによつても、その生産物の分量を増加してゆくことが出来るのであるが、しかし土地には收益遞減の法則が行はれてゐるから、如何に優良な土地であつても、放下資本の増加によつて生ずる收穫は、必ずしも資本を増加する割合に増加するものとは限らない。言ひ換ふれば、同一面積の土地の上に追次的に放下される追加資本によつて得られる増加収益は、或る限度以上は、資本の分量を増加するに従つて次第に減少するに至るものである。吾々は先きに、五十圓の資本を投じて、Aなる土地では十石、Bなる土地では十二石、Cなる土地では十四石、等々の收穫が得られると假定したが、今例へばCなる土地に使用する資本を倍加したとしても、これによつて十四石だけの收穫が増加するものではなく、その増加は例へば十石に止まり、更にまた同じだけの資本を増加しても、これによつて生ずる増加收穫高は僅に十石に止まる、といふが如くである。そして此の如き場合には、最後に放下された資本は地代を負擔しえないけれども、第二に放下された資本は、恰もBなる土地に最初放下された資本と同じやうに、十二圓の地代を生みうることになり、従つてCなる土地の地代は、前に述べたる第一形態の地代二十四圓に加ふるに、この十二圓をもつてしたるもの、すなはち合計三十六圓



となるであらう。此の如く、同一の土地の上に追次的に放下される増加資本の収益の差異に基づく地代を、マルクスは第二形態の等差地代と名づけたのである。

吾々は次にマルクスの謂はゆる絶對地代について觀察しよう。

リカードウはこの絶對地代を看過した。それゆゑ彼れは、利用される最劣等の土地は常に何等の地代をも生ぜざることを、その地代論——等差地代論——の前提とした。しかしながら土地が資本化されてゐる限りにおいては、かゝる土地を私有しつゝある地主は、無報酬にて之を他人に使用せしむることを承諾しないのであるから、地代なき土地はありえず、従つて最劣等の土地といへども、之を使用するためには必ず何程かの地代を必要とするのである。しかるに既に利用されつゝある土地のうち最劣等のものでも、これを使用するためには、現に一定の地代を支拂ふ必要があるとするならば、生産物の価格は、最劣等の土地における生産価格に加ふるに、更に斯かる土地に對する地代を加へたものでなければならぬ。そしてこのことは、吾々が先きに等差地代を觀察する際に設けた前提と——すなはち生産物の市場価格は最劣等地における最も不利益なる資本の使用を標準としたる生産価格に一致するといふ假定と——衝突することになるが、しかしそれは、等差地代の理法そのものに對しては、何等の變化をも及ぼすも

のでない。何故なれば、最も不利益なる條件のもとに生産された生産物の価格が、その生産価格に加ふるに一定の地代をもつてした價格にまで騰貴するならば、その騰貴せる價格が一般の市場價格を規定するのであるから、それに應じて、より善き條件のもとに生産せらるゝ生産物の價格もまた騰貴するのであり、従つて土地に關する生産條件の差異に基づく超過利得の等差は、前の場合と依然同じことになるからである。それゆゑ分析物の價格の順序上先づ等差地代を考察するに際しては、吾々は最劣等地の地代を無視することを妨げなかつたのであるが、土方教授にとつては、かゝる研究法は、めちやくちやなものとしか映ぜぬものの如くである。このことは同時に、前に述べた等差地代のほかに、これと關係なき別種の範疇に屬する地代の存在することを意味する。マルクスはこれを名づけて絶對地代といふのである。

吾々は先きに競争と利潤率との關係につき注意を促し、それは同一の生産部門の内部における、種々なる生産部門相互の間におけることにより、これが結果を異にすることを指摘しておいた。今茲に述べんとする絶對地代は、すなはち此の後の場合に關係する問題である。

等差地代のほか更に絶對地代なるものが存在するといふことは、農産物の價格が、その生産價格（すなはち資本出費に平均利潤を加へたもの）に一定の地代（絶對地代）を加へた高さに定まつてゐる、といふことを意味するが、このことはまた、農業部門にあつては、他の生産諸



部門におけると異なり、一般的平均利潤以上に上回る餘分の剰餘價值が生産され、しかもそれが一般的平均利潤の構成分のうちに合流することなく、農業部門それ自身の内部に保留されることにより、地主の所得としての地代に轉形する、といふことを意味する。すでに述べたやうに、各種の生産部門に放下されてゐる資本相互の間における競争は、それらの部門において種々異なる率（元本たる資本の總額に對する割合）をもつて生産された剰餘價值を、資本の大きさに比例して均等に分配することにより、それら諸部門に共通する一般平均利潤率を生み出すに至るはずであるが、今、農業の部門と他の生産諸部門との間において、かゝる平均化の作用が或る程度において妨げられるのは何故であるか？

マルクスはこれを説明していふ。農業部門における資本の構成は工業部門に比し低級であつて、全體の資本のうち可變資本部分（労働力の購買すなはち勞賃の支拂に充てられる部分）が相對的により多くの割合を占めてゐるがために、（剰餘價值は賃労働者の剰餘労働からのみ生ずるのであり、それゆゑにそれは、労働力の購買に充てられた部分の資本の上のみ生ずるのであるから）、全體の資本額（可變資本および不變資本の和）に對する比においては、農業部門において割合に多くの剰餘價值が生産されつゝある。これが第一の事情である。ところで、總じて労働の生産力の増加は、一定分量の労働によつて生産物に轉形せしめられる生産手段の分

量の増加を意味するのであり、従つてそれは資本の構成を高級ならしめるものであるから、（言ひ換へれば、全體の資本のうち、生産手段の購入に充てられる部分すなはち不變資本部分を割合に多からしめ、労働力の購入に充てられる部分すなはち可變資本部分を割合に少からしめるものであるから）、以上の如く農業部門における資本の平均構成が低級であるといふことは、この部門における労働の生産力の發展が、他の部門よりも比較的に後れてゐるといふことを意味する。

ところで、以上の事由に基づき、たとひ農業部門において平均率<sup>\*</sup>以上の剰餘價值が生産されたとしても、資本の移入移出が各々の生産部門を通じて全く自由であるかぎり、かゝる過剰分の剰餘價值は總ての生産部門に平均化され、一般的平均利潤の構成分に合流すべきはずであるが、それを妨ぐるものは土地の所有權であり、それが絶対地代發生の第二の條件となるのである。土地には此の如き所有權の防壁があるために、一定量の資本の放下に對し比較的多くの地面を必要とする農業部門には、（農業の斯かる技術的特徴を看過してはならない）、或る程度以上における資本の自由なる移入が妨げられ、従つてその生産物の価格は最劣等地における生産價格にまで下落することから妨げられ、その結果、農業部門の全體に亘り、土地の種類の等差または追加資本より生ずる収益の等差に基づかざるところの・すなはち等差地代に屬せざると



ころの・一般的なる超過利得が留保され、それが轉形して絶對地代となるのである。

この場合、吾々の特に注意を要することは、同額の資本を使用するに當り、農業にあつては工業に比し割合に多くの地面を必要とする、といふことである。工業にあつては、土地はたゞ生産が行はれるための地盤を提供するに過ぎない。従つて資本の構成の高級なる工業部門（例へば造船業の如き）にあつては、比較的僅な面積の土地の上で、莫大な資本の運用が行はれてゐる。しかるに農業にあつては、土地が生産要素として最も重大な役割を演じてゐるために、運用さるべき資本の分量を増加するためには、工業におけるよりも遙に急速なる速度をもつて土地の面積を擴大しなければならぬ。謂はゆる収益遞減の法則は如何なる生産部門にも行はれてゐるけれども、土地のその他の生産要素との理想的な割合は、——その割合が破られるにつれて収益は遞減する、——生産部門を異にするによつて異なるものであり、農業にあつては土地が最も多くの割合を要求するのである。だから同一面積の土地における資本の放下額は、工業部門に比すれば、農業部門において比較的には遙に少くなつてゐる。土地所有權が特に農業部門に對し自由なる放資の妨害をなすといふのは、かゝる事由に基づくのである。言ふまでもなく、工業上の放資に對しても、土地所有權は一の妨げをなす。苟くも資本化されてゐる土地であるならば、その上で農業を営むと工業を営むとを問はず、それが無報酬で使用されうるこ

とはない。だが一定の地代を支拂つてこれを借り入れた以上、その上に如何ほど多くの資本を注ぎ込まうとも、それは之を借り入れたものの自由である。たゞ農業にあつては、技術上の理由から、工業を經營する場合と同じ程度の資本を、一定の面積の上に注ぎ込むことができぬ。それゆゑ、工業部門にあつては、追加資本の最後の部分は地代を負擔せざることが出来るが、（言ひ換へれば、追加資本の最後の部分が全く地代を負擔せざるに至る程度にまで、同一面積の土地の上に多量の資本を注ぎ込むことが出来るが）、農業部門においては、すべての資本部分が少くとも絶對地代を負擔しなければならなくなつてゐるのである。

\* 平均率云々は、いふまでもなく、總體の資本に對する關係において云ふ。

### マルクスの絶對地代論に對する土方教授の異論の分析

マルクスの地代論は綿密複雑を極めてをり、以上の如き簡單なる叙述では、その大要の紹介としても猶ほ頗る不十分なことを免れないが、さしあたり土方教授の論文の批判のためには、以上の叙述をもつて足れりとするであらう。

教授はその論文の第一節および第二節においてマルクスの地代論の大要を紹介したるのち、第三節を『絶對地代論と對差地代論との矛盾』と題し、先づ次の如く言はれてゐる。



「以上の地代論に於て看過すべからざるは、マルクスが其の對差地代の説明に當つては、土地の豊度の差異、位置の差等より生ずる原生的生産力のより大なる土地に對差地代が生ずるとなすに反し、絶對地代の説明に於ては、資本の有機的組成の差によつて起る否其反面たる生産力の大小に基き生産力のより小なる土地に餘剩利潤たる地代が生ずるとなすことである。

「一見して何人も奇異に感ずるであらうことは生産力の小なるものに絶對地代たる剩餘利潤が生ずることである。殊に對差地代の説明に於ては生産力の大なる方に剩餘利潤が生ずると説いてゐるに於てである。

「而して絶對地代に於ては土地所有が利潤の平均化を妨げて地主をして平均利潤以上に出づる剩餘利潤を獲得せしめると云ふのであるから、生産力の大なるものを所有して他人の使用を排除するものに剩餘利潤が歸屬すると云ふならば首肯することを得るが生産力の小なるものを所有する人に剩餘利潤が屬するとの所論は所詮玄妙不可思議であつて私の如き常人の容易に理解し得ざるところである。」<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> 『經濟學論集』第六卷、第四號、一一、一三頁

以上私は教授の文章をそのままに(傍點も句讀點も一切そのままに)轉載したのであるが、私

は何よりも先づ教授の文章こそ「所詮玄妙不可思議」なものであることを見る。例へば「資本の有機的組成の差によつて起る否其反面たる生産力の大小に基き生産力のより小なる土地に剩餘利潤たる地代が生ずる」とは、全體何を意味するか? その表現の粗雑なる、概念の粗笨なる、苟くもマルクスを批判すと號するものにして、此の如きは、稀に見るところに屬する。「生産力の大なるものを所有して他人の使用を排除するものに云々」といふが如きも、またその一例である。

だが、教授の言はんとしてゐられることが、私に推測できぬわけではない。それは恐らく斯うであらう。マルクスは、等差地代を説明する場合には、例へば上等地においては、下等地におけるよりも、労働の生産力が大であるといふことをもつて、地代發生の條件としてゐる反し、絶對地代を説明する場合には、農業部門における資本の構成が、それ以外の生産諸部門における資本の構成よりも低級であるといふこと——そのことは取りも直さず、農業部門における労働の生産力が、他の生産諸部門におけるそれに比し小であることを意味する——をもつて、地代發生の條件としてゐる。すなはち前の場合には、労働の生産力の大であることが地代發生の條件とされ、後の場合には、逆に労働の生産力の小であることが地代發生の條件とされてゐる。これは「絶對地代論と對差地代論との矛盾」ではない? こういふのが教授の提出さ



れた疑問であらう。

教授のこの疑問は、根本的には、教授が同一生産部門の内部における問題と、異なる生産諸部門の間における問題とを、明白に區別されざることから起る。すでに前節において説明したやうに、資本相互の競争は、同一生産部門の内部におけると、異なる生産諸部門の間におけるとにより、相對立せる二重の結果を齎らす。すなはち前者にあつては利潤率の不均等を、後者にあつては利潤率の均等を齎らす。私は教授が先づこのことを明瞭に前提されんことを希望する。しかし、何れの場合の競争も資本相互の競争といふ點では全く同じ事柄であるに拘らず、此の如く矛盾した結果を生じるといふことは、『所詮玄妙不可思議であつて、私の如き常人の容易に理解し得ざるところである』と、教授が飽くまでも固執されるならば、これ以上に議論のしようもない。

さて同一の生産部門内における競争が、その部門内の種々なる資本に對し不均等なる利潤率を齎らすといふことは、同一の市場に向つて同一の商品を同一の價格で供給しつゝある種々なる資本の生産條件が(従つて商品の生産費)が異なるために、これら商品の販賣によつて得られる利潤が異なる、といふ事實に基づく。そして、或る資本にとつての有利なる生産條件が、もし土地に固着せる自然的條件であるならば、そのために生ずる部分の超過利得は、轉形して地

代となる。この場合、資本構成の差異は問題にならぬ。何故なれば、同一の生産部門内における種々なる資本の構成の差異は、資本それ自身の力によつて平均化されうる性質のものであり、土地に固着せる自然的條件の差異に屬せざるものであるから。それゆゑ等差地代を考察する場合には、吾々は同じ分量・同じ構成の資本の使用が、たゞ土地に關してのみ其の生産條件を異にすることから生ずる結果のみを、問題とするのである。

これと異なり、種々なる生産諸部門相互の間における競争を考察する場合には、吾々はそれらの諸部門における資本の平均的構成の差異を中心の問題とする。何故なれば、かゝる差異は、生産諸部門の間における資本の移出入が如何に自由であつても、排除されえざるものとして技術的に與へられてゐるのであるから。例へば、造船業とマツチ製造業とを同一なる構成の資本をもつて經營するといふが如きことは、技術的に見て到底不可能であらう。しかるに既に資本構成の差異を前提するならば、剩餘價值率<sup>\*</sup>にして均等なるかぎり、資本構成の低級なる部門では、總體の資本に對する比において割合に多くの剩餘價值が生産され、資本構成の高級なる部門では、その逆になる。しかも資本の構成が低級であるといふことは、労働の生産力の發展が比較的に後れてゐるといふことを意味し、また資本の構成が高級であるといふことは、労働の生産力が比較的高級の發展をなしてゐることを意味する。だから、總體の資本に對する比



からいへば、労働の生産力の小である生産部門では、その大である生産部門に比し、割合に多くの剰餘價值が生産されるのである。このことは、外見的には如何に逆説に見えようとも、苟くもマルクスの剰餘價值説を前提するに過ぎず、何人も承認せざるを得ざるところである。（現に分業や機械やが益々精巧となり益々大なる規模において行はれるにつれ、労働の生産力は急激な速度をもつて増進されつゝあるが、それにも拘らず、否な正にそれゆゑに、一般的平均利潤率は次第に下落せる傾向を有するといふこと、すなはち謂はゆる一般的平均利潤率の傾向的下降の法則は、一見すれば如何にも矛盾したことのやうであるけれども、しかし斯かる事實そのものは如何なる實業家も經驗的に承認せざるをえざるところであり、しかも此の如く外見的に矛盾せる事實を理論的に説明しえたるものは、實にマルクスの剰餘價值説をもつて嚆矢となすのである。）土方教授は、労働の生産力の小なる生産部門において、その大なる生産部門に比し、同一分量の總體の資本に對する關係からいへば、割合に多くの剰餘價值が生産されることをもつて、不思議なこととされてゐるかに見えるが、しかしマルクスの剰餘價值説を前提するに過ぎず、——教授はもちろん之を是認されはしないだらうが、マルクスの地代説の矛盾を云々される場合、これを前提されてゐるのでなければならぬ、——それは當然の結論である。すなはち労働の生産力の發達（分業および機械の應用などが）比較的おくれである農業部門で

は、工業部門に比し、同一分量の資本の上に、割合に多くの剰餘價值が生産されるといふことは、少しも玄妙不可思議なことでない。しかし種々なる生産部門相互の間において、もし資本の移出移入が自由に行はれてゐるならば、農業部門の如く總體の資本に對する關係において同一分量の資本の上に割合に多くの剰餘價值が生産される部門（従つて他の部門に比し高率の利潤を擧げうる部門）へは、他の部門より資本が流れ込み、従つて生産物の供給量を増加するに至るがゆゑに、生産物の價格の下落のため、他の生産部門に比し餘分の利潤を獲得することは不可能になる。だから競争は、同一の生産部門の内部にあつては利潤率の不均等を齎らすに反し、種々なる生産部門の間においては逆に利潤率の均等を齎らすといふのである。従つてもし農業部門にかぎり絶對地代に轉形すべき・一般的平均利潤率以上の・餘分の利得が留保されるとするならば、そこには何等か資本の自由なる移入を妨げる條件が存在するのでなければならぬ。そしてマルクスはそれを土地所有權の防壁のうちに發見したのである。このことは、マルクスが前提してゐるところの『何等か新たなものを學ばんと欲する・従つてまた自ら思索せんと欲する・讀者』にとつては、決して理解に困難なことではない。しかも土方教授はこれをもつて『所詮玄妙不可思議であつて、私の如き常人の容易に理解し得ざるところである』とされるのである。



\* 可變資本に對する剩餘價值の比。

もし事態が外見上矛盾するといふの故をもつて理論に矛盾ありといふならば、競争が同一の生産部門の内部においては不均等なる利潤率を齎らし、種々なる生産部門の間においては均等なる利潤率を齎らすといふことや、労働の生産力の増加につれて一般的平均利潤率が次第に下落するといふことなどは、いづれも皆なすでに矛盾であらうし、『所詮不可思議』なこともあらうし、『常人の容易に理解しえざるところ』であらう。だが批判者が斯くまでの常人たることに自らを謙遜されては、吾々は共に談ずるの術をすら見出しえぬのである。

前に一言したやうに、土方教授の疑問は、『根本的には、教授が同一生産部門の内部における問題と異なる生産諸部門の間における問題とを、明白に區別されざることから起る。』吾は先きに資本の構成を異にせる五種の生産部門を次の如く假定した。

資本	剩餘價值率	剩餘價值	生産物の價值	利潤率
I, 100 + 40v	1.00%	40	100	40%
II, 70c + 30v	"	30	130	30%
III, 80c + 20v	"	20	120	20%
IV, 85c + 15v	"	15	115	15%

V, 95c + 5v	"	5	105	5%
-------------	---	---	-----	----

この場合五種の生産部門における利潤率が四〇パーセントから五パーセントに至るまでの差異を呈するのは、すべての生産物があるの價值通りに——例へば第一部門のそれは一四〇の價格をもつて、第二部門のそれは一三〇の價格をもつて、第二部門等々のそれは一二〇等々の價格をもつて、——販賣されると假定するからである。しかしもし以上の如き資本構成の差異が同一の生産部門内における事實であるとするならば、それら諸資本の生産物はいづれも同一の市場に提供される同一種類の商品であるから、たとひそれらの個別的價值はまち／＼であらうとも、それらは皆な同一の市場價值（假にこれを一二〇とする）を有つにすぎない。假に第三類の資本による生産物が平均的條件を具ふるものとすれば、その生産物の個別的價值のみが市場價值と一致するに止まるであらう。かくて第一類以下第五類に至るまでの資本によつて生産された生産物は、いづれも一二〇の價格をもつて販賣され、従つて、その或るものは一四〇、一三〇等の價格をもつて、他の或るものは一一五、一〇五等の價格をもつて、販賣されるといふが如きことは在りえないであらう。そして、しかる限りにおいては、いづれの資本もみな二〇パーセントの利潤を擧げうるはずであるが、しかし五類の資本はいづれもその構成を異にしてをり、従つてその生産するところのものは同じ種類の生産物でありながら、資本の構成の高級



なるものほど（そこでは労働の生産力がより大であるから）その生産物の分量はより大であらう。すなはち五類の資本は、これを同額の資本として比較すれば、（實際においては、構成の高級なものほど生産の規模が、従つて使用されつゝある全體の資本額が、より大であるけれども）、その構成の高級なものほど、同じ市場價值を有する生産物のより大なる分量を生産するであらう。そして、この點においては、假に第三類の資本の利潤率を二〇パーセントとすれば、第四類、第五類の資本のそれは二〇パーセント以上であり、第一類、第二類の資本のそれは二〇パーセント以下であるであらう。要するに資本の構成の高級なものほど、その擧げうる利潤の率はより大となるであらう。

資本構成の差異が同じ生産部門内の事實であれば、資本相互の競争は以上の如き結果を齎らす。それは、吾々の先きに見たる・資本構成の差異が異なる生産部門の間に存する。場合とは、全く逆の結果である。しかるに土方教授は、これら二つの場合を一率に看做し、その間の根本的な差異を看過してをられる。そして吾々が、異なる生産諸部門間の問題を、同一の生産部門内の問題と、同一視しないことをもつて、『玄妙不可思議』とされるのである。だから教授は、『少しくマルクスの説明を聞かう』とて、『資本論』の一節を引用した後で、次の如く言はれてゐる。<sup>\*</sup>

\* 前掲雑誌、一四頁。

『農業に於ては労働に訴へる部分が多い。従つて労働搾取率を同一であると考へても、單位資本當りの剩餘價值量、従つて利潤率は工業に於けるよりも高く、平均して農産物は價值以下であるが、〔價值以下で賣られるといふ意味であらう——河上補〕海田瀧次十博士の論よりは少し高い價格を得る。工業利潤は價值以下であるが生産價格以上で賣られると云ふことになる。〔工業利潤は工業生産物の誤植であらうか？ いづれにしても、以上全體の記述は引用されたるマルクスの説明の要約として、この上もなくめちやくちやなものであるが、しかし吾々にとつての問題は、これに引續く教授の次の言葉である。——河上補〕無反省である人には、〔何人が無反省であるかは問題だが——河上補〕生産力小なる農業が平均利潤以上を獲得することが苦もなく立證せられたやうである。併し、翻つて思はなければならぬことは、生産力の大なる産業部門乃至各個の産業は生産力の小なる産業部門乃至各個の産業に比して同一の費用を投じてより多量の生産物、従つてより大なる市場價值を獲得することはないであらうかと云ふことである。』（●點は新たに加へたるもの、その他は一切原文のまま）教授が『産業部門乃至各個の産業』と言はれてゐる場合の『各個の産業』とは何のことであるか、十分明白ではないけれども、それは恐らく同一の生産部門内における個別的資本を指し



てゐられるのであらう。そして、もしさうであるならば、教授は以上の如く主張することにおいて、異なる生産部門に放下されてゐる資本相互の競争と、同一の生産部門内に放下されてゐる資本相互の競争とを、全然同一視されてゐるのである。だから教授は、前掲の言葉に引續き、更に次の如くにも言はれてゐる\*。

\* 同上、一四、一五、一六頁

『對差地代を論ずる際にはマルクスは明に此事を前提してゐる。又工業についても曰く……此所論よりすれば餘剰利潤は寧ろ工業の如く生産力の發達したるものに歸屬し、農業の如き勞働生産力小なるものは平均以下の利潤を獲得するといふ結論が生れて來べきである。』教授は飽くまでも、等差地代が問題とされてゐる場合の理論そのまゝを、絶對地代が問題とされてゐる場合に適用せねばならぬと、主張されてゐるが如くである。だが、すでに繰り返して説明したやうに、『對差地代を論ずる際』は同じ、農業部門の内部における或る個別的資本の超過利得を問題としてゐるのであり、『又工業についても云々』といふ場合も、特殊の或る生産部門の内部における或る個別的資本の超過利得を問題としてゐるのである。およそこれらの場合において、生産力の大なる資本が、『同一の費用を投じて、より多量の生産物を、従つてより大なる市場價值を、獲得すること』は論なきことである。けれども、それらは總て同一の生

産部門内のことである。もしこれを互に異なる生産諸部門について見んか、例へば同じ百圓の資本を投じて、米作の生産部門ではa石の米が收獲され、醸造の部門ではb石の酒が製造され、石炭の生産部門ではc噸の石炭が採掘され、織物の生産部門ではdヤールの織物が生産される、等々の事態が生ずるのであるが、かゝる場合に、互に種類を異にし従つてその秤量の尺度を異にするところの。これらa石の米、b石の酒、c噸の石炭、dヤールの織物、等々のうち、そのいづれが『より多量の生産物』であるかは、決して教授の前提されてゐる如く自明の問題ではありえない。同じ百圓を投じて米ならば二石が得られ、酒ならば一石しか得られないといふ場合に、教授は、米の生産部門をもつて酒の生産部門より生産力の大なるものとなし、前者は後者に比し、『同一の費用を投じて、より多量の生産物を、従つてより大なる市場價值を、獲得する』とされるのであらうか？ 教授が問題を如何に素朴に考へてゐられるかは、教授の提供された質問そのものが之を明瞭に物語つてゐる。

教授はなほ進んで次の如くにも言はれてゐる\*。

\* 前掲雜誌、一七、一八頁

『更に一步を進めて考察すれば、『教授が更に一步を進められるとき、如何なることが生ずるかを見よ！——河上補』……農業に於て資本の有機的組成が低次なる結果として同一資本



に於ける剰餘價值量が大であるとの前提其者が問題である。資本の組成が低位にある、即ち労働に訴へる部分が大であると云ふことは、云ひ換えれば、労働生産力が小であることである。従つてマルクスの所論に従へば必要労働時間が大であつて、労働者が彼自らの種族を維持するに必要な生活資料の價值を生産するに多くの時間を奪はれるから、剰餘労働の時間は少く、剰餘價值率は低いわけである。之に反して工業に於ては資本の有機的組成が高位にある結果、必要労働時間が減少して、労働日を同一とすれば、相對的剰餘價值は増大する筈である。従つて遽に農業に於ては工業に於けるよりも同一資本量の生む剰餘價值が大であるとは云へない。何となれば資本組成の高位に進むと共に剰餘價值率は大になると考へなければならぬからである。』

此の如きが『東京帝國大學經濟學部に經濟原論の講座を擔當する』ものとしての『責任を感ぜざるをえない』\* 土方教授の立言であり、しかもそれが太學の研究發表の機關たる『經濟學論集』の卷頭を飾れる論文の一節であるといふことは、如何に今の大學教授がマルクスにつき徹底的に無智であるかを證明する。

\* 『マルクス價值論の排撃』 四四頁

何より先づ滑稽なのは、教授が、農業部門における労働者は、その部門において生産される

農産物のみを彼等の生活資料となし、また工業部門における労働者は、當該部門において生産される工業品のみを彼等の生活資料となすものであるかの如く觀念され、従つて労働の生産力の發展がおくれてゐる農業部門では、労働者がその生活資料を生産するために、工業部門におけるよりも、より多くの労働時間を費し、それゆゑにまた、農業部門における労働力の生産（従つて勞賃）は、工業部門におけるそれよりも大であるかの如くに觀念されてゐることである。苟くも世に公にされた論文のうち、かほどまでにマルクスに對する完全なる無理解を、此の如く露骨に表白したものは、おそらく稀であらう。言ふまでもないことだが、労働者の生活資料は、その労働者が従事してゐる部門の生産物に限られてゐるわけではない。例へば石炭工は彼れの採掘する石炭を食料とし、紡績工は彼れの生産する糸を食料としてゐるわけのものではない。だから、謂はゆる奢侈品の生産部門を除くの外は、あらゆる生産部門における労働の生産力の發展程度が、労働者一般の生活資料の生産に、従つて労働力一般の價值（資本家が労働者に支拂ふべき勞賃）に、従つてまた、あらゆる生産部門における必要労働時間の長さ（労働者が彼れに支拂はれた價值を再生産するために要する労働時間の長さ）に、すなはち、あらゆる生産部門を通じての剰餘生産率に、影響するのである。土方教授は、此の如きマルクス經濟學におけるイロハをすら理解されざるもの如くである。



かくて教授は結論される、——「かくして資本組成の差より絶對地代の成立を説かんとするマルクスの所説は、到底之を救ひ得ざるものと斷せざるを得ない。〔到底救ひ得ざるものが何人であるかは、讀者のすでに看取されたところであらう。——河上補〕。リカアドが絶對地代を説くを得ずして單に對差地代のみを説いたが、マルクスによつて始めて絶對地代を説くを得たとは、多くの人々の説くところであるが、その絶對地代論の内容は寔に上述の如く誤謬に座せるものと斷せざるを得ない。\* 此の如き妄言をなす者をこそ、吾々は形容して「めくら蛇におぢず」といふのである。

\* 同上、十八頁

教授はなほその論文の第四節を「地代論と虚偽の社會價值」と題し、第五節を「地代論と平均利潤論との矛盾」、第六節を「地代論と生産價格論との矛盾」、第七節を「價值なき價值と地代論」と題し、それらの諸節において、吾々が以上分析したると同じ品質の議論の分量を増大してをられる。だが本冊の紙數はすでに盡きたばかりでなく、教授の議論が大體如何なるものであるかは以上の見本でほと明かとなつたと信ずるから、他の諸問題はしばらく之を省略に附しておく。

（一九二八年——昭和三年——七月發行『社會問題研究』第八十六冊所載）

## 反動學派の陣營における窮餘の一戦術としての事實の虚構

——拙譯「資本論」に對する福田博士の非難について——

マルクス學は、マルクスおよびエンゲルスよりレーニンに至るまでの發展を含めてのマルクス學は、少くとも經濟學の領域にあつては、——私は他の領域について語るの資格を有せざるがゆゑにのみ、かくの如き限定をなす。——科學的研究の最高頂に位してゐる。しかるに、ただに之を理解することに努めざるのみならず、淺薄なる知識により何とか彼とか之を非難せんとする學者が少くない。これらの學者は、その人自身が如何に意識しつゝあるかに拘らず、客觀的には、人類の科學的認識の發展を阻害しつゝあるに外ならぬから、私はその意味において彼等を反動學派の名稱のもとに一括する。彼等が此の如く學問的に反動的であることが、同時に社會的にも反動的な役割を果す結果を齎しつゝあることは、言ふまでもあるまい。

ところでマルクス學は、かゝる反動學派のあらゆる妨害にも拘らず、年一年その勢力を増大



しつ々ある。こゝにおいてか反動學派の陣營においては、窮餘の一戦術としての事實の虚構が行はるゝこととなつた。かゝる戦術は已に以前から行はれてゐるが、最近の日本においては特にそれが絶頂に達したかに見ゆる。私はその具體的な實例を、二人の大學教授の最近の勞作について擧げるであらう。

その一人は、マルクスの資本論を攻撃するために引續き數種の論文を公にし、遂には『マルクス價值論の排撃』と題する一書を纏められた土方成美氏である。この書については、私は先頃『マルクス主義講座』のための勧誘文の中で、すでに次の如く述べておいた。

『或は貴下の眼に觸れたことかと思ひますが、近頃東京帝國大學教授經濟學博士土方成美氏は、『マルクス價值論の排撃』といふ一書を公にされました。そして其の中には、或人が「近代社會の經濟的運動法則の曝露」といふ言葉を使つたのに對し、次の如く述べられてゐるのです。

運動法則の曝露とか云ふのは、ちよつと聞きなれない、痛快そうな、奇抜そうな言葉である。併し私も何だか此言葉を聞いたことがあるやうだ。いつぞや自然主義文學の流行時代によく聞かされた「現實曝露の悲哀」と云ふのによく似て居る。併し何も運動法則とか一寸聞くと體操か軍隊を思はせるやうな言葉を使はれなくとも、今少し平易に我々にも直

ちにわかるやうな言葉を使はれたらどうか云々。(二三五頁)

『草原を這うてゐる蛇は、頭を一寸だけ見せると、全體の大きさが分かる、といふ意味の言葉があります。私は以上の一句を見ただけでもマルクスの價值論を排撃すると稱する土方氏の造詣を測量するに足ると思ひます。「近代社會の經濟的運動法則を曝露することはこの著作の最後の窮極目的である」といふ句は、マルクス自身が資本論第一版の序文において其の著作の最後の窮極目的を言明した周知の句です。従つて經濟的運動法則の曝露といへば何を意味するか位のことは、吾々の間では固より問題にならぬのですが、それがマルクス價值論を排撃するとして一書を著はされた土方氏にとつては、「私も何だか聞いたことがあるやうだ」といふ位のものであり、しかも教授はそれによつてやつと自然主義の文學や體操やを思ひ起されるに止るのです。事物を「運動の流れ」において把握するといふマルクス的方法に對し、氏が如何に盲目であるかは、「運動」なる言葉を「すら知られ」ないことによつて推定されうるでありませう。

『私は氏の新著を一讀して、失禮ながらは、近頃資本論の廉價本が出たので俺も讀んで見ようと思つて一本を買つて來た中學生が、讀後の感想を作文にしたほどのものに過ぎぬ、と思ひました。氏はてんで問題を理解してゐられないのです。その一例を擧げませう。